する積りなれど、われ等が短才にては、良否を思ひあへずして、洩れたのもあらうといつて、年を越えて、宮中の昭陽舍に詰め切りで撰んだが、遂に春雨のふる頃にまで及んだ趣を含めた。序に延喜五年四月とあるは最後の完成で、ほゞ脱稿のうへ、目錄を作つたのは、その年の二三月の交であつたらう。

ふる歌にくはへて奉れる長歌　壬生忠岑

くれ竹の、よゝのふるごと、なかりせば、伊香保の沼の、
いかにして、おもふ心を、のばへまし、あはれむかしへ、
ありきてふ、人まろこそは、うれしけれ、身は下ながら、
ことの葉を、あまつ空まで、きこえあげ、すゑの世までの、
あととなし、今もおほせの、くだれるは、塵につげとや、
塵の身に、つもれる事を、問はるらむ、これをおもへば、
いにしへも、くすりけがせる、けだものの、雲に吼えけむ、
こゝちして、ちゞのなさけも、おもほえず、ひとつ心ぞ、
ほこらしき、かくはあれども、照るひかり、近きまもりの、
身なりしを、たれかは秋の、くる方に、あざむきいでて、
みかき守、とのへもる身の、みかき守、をさ〳〵しくも、
おもほえず、こゝのかさねの、中にては、あらしの風も、
聞かざりき、今は野山し、近ければ、春はかすみに、
たなびかれ、夏はうつせみ、なきくらし、秋はしぐれに、
袖をかし、冬は霜にぞ、責めらるゝ、かゝるわびしき、
身ながらに、つもれる年を、しるせれば、いつゝのむつに、
なりにけり、これに添はれる、わたくしの、老のかずさへ、
やよければ、身はいやしくて、年たかき、事の苦しさ、
かくしつゝ、ながらの橋の、ながらへて、難波のうらに、
立つなみの、波のしわにや、おぼほれむ、さすがにいのち、
をしければ、こしの國なる、しら山の、かしらは白く、
なりぬとも、おとはの瀧の、おとに聞く、老いず死なずの、
くすりもが、君が八千代を、若えつゝ見む。
君が代にあふ阪山のいはし水木がくれたりと思ひけるかな

釋 ○ふる歌云々　これも上のと同時ので、添へて奉つた歌である。○くれ竹の　枕詞。○ふるごと　古言。○伊香保の沼　上野國群馬郡今の榛名湖のことと思はれる。こゝは「いかにして」の枕詞。○のばへ　述べの延言。○むかしへ　昔方。いにしへと同じい。○人まろ　柿本人麻呂。飛鳥藤原の宮の代の大歌人で、官五位に至らない。○しもながら　下官ながらの意。○あまつ空　大宮の内を譬へていふ。○あと　例の意。○今もおほせの云々　いにしへ人麻呂の歌を召しけるに續いて、今も我が徒に、「歌奉れ」の仰言の下つたのは、かの人麻呂の例に繼げといふことかとの意。「塵につぐ」は文選に、「遙々播二清塵一、清塵竟誰嗣」とあつて、古き迹をまなぶを、繼塵といふのである。但、人丸の歌を召されたことは物に見えない。○塵の身　塵の如き身で、輕い卑しい身を譬へていふ。○つもれること　積れる言で、塵の緣語。○いにしへも藥けがせる　この二句、原文にない。六帖、及び忠岑集によつて補つた。神仙傳に、淮南王劉安が、仙藥を服して登仙した事を記したところに、「安、臨二去時一、餘藥器還在二中庭一、鷄犬舐二啄之一、盡得レ昇レ天、故鷄鳴二天上一、犬吠二雲中一」とある。獸などの仙藥を舐めたのだから「けがせる」といつた。○ひとつ心ぞ云々　俗に一心にといふに似てゐる。こゝは撰者の數に入つたのを喜び誇つたのである。○照るひかり　天子を譬へ奉る。○近きまもり　近衞の直譯。作者は左近衞の番長であつた。○秋のくる方に云々　「秋のくる方」は西である。作者はこの時、左近衞の番長から、右衞門の府生に轉任した。衞府の陣屋は、すべて左は東、右は西なので、東西の方位を以て敍した。さて、これは順任であつて、左遷ではないが、大御身に近づき奉る近衞の職を去つたのを、不本意のやうにいひなして、「あざむきいでて」といつた。○みかきもり云々　元來宮城の警衞は、その禁内を近衞、中郭を兵衞、外郭を衞門府といふ風に分擔してゐた。右衞門の府生たる作者は、外郭の御垣を守るのが職であつた。故に、「とのへもる身の御垣守」といつた。「とのへ」は外の重で、外郭のこと。○をさ〳〵しく　長々しにて、立ち優つたの意。○こゝのがさね　九重の直譯。文選に「君門多九重」とあるより、宮城又は禁內をいふ語とする。○今は野山しちかければ　衞門は外郭を守れば、「野山近し」といひ、近衞に對へて、外衞のあしさをいひ竝べた。○霞にたなびかれ　心の晴れやらぬをいつた。○時雨に袖をかし　涙に濡れを喩へた。○しるせれば　かき記したれば。○いつゝのむつに云々　五六三十年に及んだとて、わが公務の勤勞を陳べた。○やよれば　「や」は彌「よ」は愈で、數多き意である。佛足石の歌に、「やよつ光を放ち」とあるもこの意。○長柄のはしの　「長らへて」の序。○難波のうらに　「たつ浪」の序。○波のしわにや云々　皺だらけに老いくちなむの意。波の重なり寄るを、面の皺に譬へた。「おぼほれ」は溺れの原語。○しら山の　○おとはの瀧の　「の」文字、いづれもの如くの意で序詞。○藥もが　不老不死の藥を欲しの意。「もが」は願望の辭。○わかえ　若くなること。○君が代に云々　かく古き事を興じ給ふ君の御代に逢はうとも知らず、逢坂山の石清水の木隱れてあるやうに、人知れず沈んだ身と歎いたことを後悔するとの意。

評 長歌には、まづ御時にあうたのを悅び、次には身のわびしきをかこち、次には君をいはひ、終に我が命の長くあれかしと願ひ、短歌には、いよ〳〵君の御時にあうた悅をいひかへした。貫之の目錄歌よりはやゝ一ふしもあり、優つてはゐるが、冗長に堪へられない。また、貫之はさすがに萬葉集を心得てゐたものと見えて、五七調が流れて、ところ〴〵七五となつたと思はれるのを、これ及び次の二首は、却つて七五調が五七に流れたやうな觀がある。時代の風潮とはいひながら、かうも劃然たる體形をそなへぬ以上は、邯鄲に步を失つた燕人の

類で、どちらつかずの變なものになつてゐる。
君が代にの短歌は長歌の反歌である。反歌は長歌の意を反復し、又はいひ洩したのを歌ふのを、その本色とする。
「聞えあけ」は家集に聞えあけて、「いにしへに」は一本にいにしへも、「かくはあれども」は家集にかくはほこれどとある。「とのへもる身のみかきもり」は家集にない。「身ながらに」は一本に身ながらも、「しるせれば」は家集に數ふれば、「やよければ」は一本せめくれば、「ながらへて」は家集にながらへば、「浪の」は家集に老の、「瀧の」は家集に山のとある。

冬のながうた

ちはやぶる、　神無月とや、　けさよりは、　曇りもあへず、
うちしぐれ、　紅葉とともに、　ふる里の、　よしのゝ山の、
山あらしも、　寒く日ごとに、　なりゆけば、　玉の緒とけて、
こきちらし、　あられみだれて、　霜こほり、　いやかたまれる、
庭の面に、　むら〳〵見ゆる、　冬くさの、　うへに降りしく、
しら雪の、　つもり〳〵て、　あらたまの、　年をあまたも、
すぐしつるかな。

釋　○ちはやぶる　枕詞。○神無月とや　神無月といふことにやの意。○紅葉とともにふる里の　時雨が紅葉と共に零るといふに、古里をかけた。吉野の古里であることは、冬、「ふるさとは吉野の山し云々」の條に既出。○あらたまの　枕詞。

評　平凡の二字これを悉してゐる。しかも、「玉の緒とけてこきちらし」は自他がうち合はない。又、こきちらしたる如くと解かねば、その意が通じないが、それも無理で、元來詞が足らないのである。
「けさよりは」は家集にはつ時雨、「うちしぐれ」は六帖に初時雨、「山あらし」は家集に山おろし、「年をあまたも」は家集に年をおほくもとある。

七條の后うせ給ひにけるのちによみける　伊勢

おきつ波、　荒れのみまさる、　宮のうちは、　年へてすみし、
いせのあまも、　船ながしたる、　こゝちして、　よらむかたなく、
かなしきに、　なみだの色の、　くれなゐは、　われらがなかの、
時雨にて、　秋のもみぢと、　ひと〴〵は、　おのがちり〴〵、
わかれなば、　たのむ蔭なく、　なりはてゝ、　とまるものとは、
花すゝき、　君なき庭に、　むれたちて、　空をまねかば、
はつ雁の、　鳴きわたりつゝ、　よそにこそ見め。

【釋】○七條后　藤原温子。關白藤原基經の女で、宇多帝の中宮である。集中の詞書に、「寛平の御時后の宮の歌合の歌」とあるその后の宮の御事である。延喜七年六月御年三十六にておかくれなされた。○おきつ波　「あれ」にかゝる序。○年へてすみし　作者はこの后宮の女房として侍うた人で、宇多帝の寵をも受けた。○いせのあま　伊勢の海の海人。わが名の伊勢を寄せた。○よらむ　賴るに寄るをよせた。○かなしきに　悲しきによりての意。○われらがなか　宮のうちの女房達すべてにかけていふ。○おのがちり〴〵云々　一周の年月を經て、宮の中の人々も、御墓仕へする者も、おのがむき〴〵に退散するをいふ。○とまるものとは　留まるものとての意。○はつ雁の　初雁の如くにの意。

【評】草木こそ多けれ、薄を以てあしらひとしたは、彼れが穗に出て招くさまが、心ありげに見えるからである。しかも哀傷にも「君がうゑし一むら薄」などあるので思ふと、この頃、薄などを前栽に移して、秋の野らのさまをまねぶことが、專ら行はれてゐた事が知られる。后の薨ぜられた年の秋の頃、御忌はてゝ、宮の內の人達が散りぢりに成りゆく末を思ひやつて、眼前の景物を詩材として、その榮枯盛衰の情を敍した。故宮人空しく、殘草風雨に摧け、天邊雁語の冷やかなのを聞いたなら、何人といへども懷舊の情、斷腸の思に堪へなからう。況や作者が私の主人と賴んだお方であつて見れば、その船流したる海人のよるべない心地のしたのも尤もである。長歌五首のうちで、これひとり見られる。「たのむ蔭」は六帖及び家集にたのむかたとある。

旋頭歌

題しらず　よみ人しらず

うちわたすをちかた人に物まをすわれ、そのそこに白く咲けるはなにの花ぞも

【釋】○旋頭歌　セドウカと讀む。六帖にはセンドウカとかいてある。漢字序には、旋頭、混本と竝べ擧げてあるが、一體兩名である。混本、また双本ともいふ。旋頭はかみにめぐらす、混本は本にまじふる、双本は本にならぶるの意で、本の句五七七に對するに、末句もまた、五七七を以て仕立てた一體である。そのはじめは本末相互の問答を專らとしたことは、紀記にその例の見えた如くである。かくて本末いづれにまれ、その五七七の一句をさして、片歌と稱へた。奈良時代に至つて、この體大いに行はれたと思はれるが、なほ他の長短歌の盛んなのとは比べ物にならなかつた。しかもあながち問答體によらず、自在にその詩想を發揮した。只その體製が五七につぐに七字を以てしたから、下の方いよ〳〵重く、頭勝な七五調時代となつては、その調が氷炭相容れ難いものであつた。況や、字句ともに少なくて、融通出入の自在を缺いてゐる。これらの理由が平安朝においていて、やうやく廢絶に近づいた所以である。されば後には五七五とつらねた、短歌の半截の如きものも現はれるに至つたが、畢竟どちらつかずの異體であつた。

○うち渡す　此方より彼方へかける意。場處の時にはその距離あるにいふ。宣長が、「見渡すことなり」と解したが、古歌を案ずると、その意が差つてゐる。○をちかた人　遠方なる人。○花ぞも　花であるぞよ。「ぞ」はおし詰めていふ意の辭。「も」は歎辭。

大意　かけ離れた、はるか向ふの方の人に、私は物をお尋ね致しまする、貴方の居られるそれ其處に、白く咲いてゐる花は、何の花でありますぞ、まあ大層見事な花ですが。

評　詩形をそなへた平語に近い。われ物申すとあるべきを倒置したのは、その二音五音の組織が、あまりに緩調に流れるので、促調にしてその失をすくつたのである。

かへし

春されば野べにまづさく見れどあかぬ花、まひなしにたゞにのるべき花の名なれや

釋　○まひ　禮物をいふ。古來、幣の字を訓んでゐる。まひなひといふもこれで、賄賂をのみいふは後世の事である。萬葉巻六、「天にます月讀男幣(マヒ)はせむこよひの長さ五百夜(イホヨ)繼ぎこそ」、同九、霍公鳥の歌に「幣はせむ遠くなゆきそ」などの例を見て推し知られよう。○のる　告る。

大意　これは春になれば、野邊にまづ一番がけに咲く、見ても〳〵見飽かぬ花で、その名はお禮の物なしに、ついいつてしまふやうな、輕々しい花の名であるか、いやさうではござらぬわ。

評　詼諧を弄した狂言で面白い。この集における如き狹義の見解からすれば、これも俳諧の部のものであるが、姑く體製の上について、こゝに収めたものらしい。「たゞにのる」、原本たゞ名のるとある。「名告る」といふことこでは聞えない。高野切によつて改めた。

題しらず

はつせ川ふるかはのへにふた本ある杉、年をへてまたもあひ見むふた本ある杉

釋　○はつせ川　大和國磯城郡初瀬を流れる川。○ふるかはのへ　古川の邊。初瀬川は、古代からいひはやされた川なので、「古川」といつた。廢川を古川といふのとは異なる。

大意　初瀬川の古川のあたりにある二本杉、私はあの杉の年久しいやうに、年がたつて後、あの杉の竝んで向ひ合つて居るやうに、またもお目にかゝつて、對座致しませう。

評　諸註解き得ない。稻掛太平が、「上はまたといはむ序なり」とて、「二本杉」を二股杉と解したのは、中にもわるい。この二本杉は初瀬川附近で著名な物だつたので、譬喩に用ひたのであらう。本の三句を、再び末句の三句で歌ひかへしたその詠歎の味ひは頗る永い。その風調によつて想ふに、奈良時代の遺製であらう。作者が大和人であることは、勿論と思ふ。末の結句、躬恒集におもがはりせでとあるは、この特色を抹殺したもので、神意が索きてしまふ。

つらゆき

君がさすみかさの山のもみぢばの色、神無月しぐれの雨のそめるなりけり

釋 ○君がさす「御笠」にかゝる序。○みかさの山　羇旅「あまの原ふりさけ見れば」の條に既出。○そめる　染みてあるの約。滲みた意。

大意 三笠山の紅葉の色、これは大層見事であるが、何が染めたかと思へば、神無月の時雨の雨が染めたのであつたわい、人間業ではないはサ。

評 萬葉に、「君が着るみかさ」と續けたのは冠り笠である。これは「さす」とあるから、唐傘、大傘の類であらう。そはいづれにせよ、時雨の雨をかけ合はせたことは、萬葉集の、

大君の三笠の山のもみぢ葉はけふの時雨にちりかすぎなむ　（卷八）

と同巧である。末の結句、助辭がその大部分を占めたことは、輕くて更に力がない。五七七の體を成す自然の調に背いてゐる。

末の第二句、躬恒集に時雨のあめにとある。それなら、下の「そめるなりけり」に自他が打ち合ふが、時雨を主として、そむるといつた方が面白い。元本にもさうあるから、意釋はその意で解いておいた。

元本にはこの次に、

ます鏡底なる影にむかひゐてみる時こそ知らぬおきなに逢ふ心ちすれ

の一首がある。體が甚だとゝのはない。

誹諧歌

題しらず　よみ人しらず

梅のはな見にこそ來つれうぐひすの人く人くといとひしもをる

釋 ○誹諧歌　史記の註に、「滑稽俳諧也」とあつて、をかしいたはれ言を、俳諧といふ。唐の杜甫の詩にも俳諧體がある。こゝに誹諧と書いたのは、下の諧の字の偏によつて、上の俳の字の偏をも言偏に作つたもので、かういふ例は、熟語にはよくあることである。

大意 自分は梅の花を愛して、見にサ來たのである、されば、梅に寢ぐらを占めて居る鶯は喜ぶべき筈なのに、なぜか鶯が人が來る人が來ると鳴いて、自分の近寄るのを厭つてサまあ居るわ。

評 撰者等が、俳諧と認めた標準は、きはめて曖昧で、今より推することは頗る困難である。同じ構想、同じ敍述のものでも、一は本歌に入り、一は俳諧に入り、人をしてその定見のなさを疑はしめる。確たる認識力鑑賞力がないからといへばいはれるが、かういふ事は、時代の慣習と思潮とに支配される點もあるから、さう一概にはいへない。

素性法師

山ぶきの花色ごろもぬしやたれ問へど答へずくちなしにして

【釋】○山吹の花色ごろも　山吹の花の黄色をした衣をいふ。襲(カサネ)では表黄、裏黄又は青を山吹といふ。○くちなし口無しに、梔子(クチナシ)をよせた。梔子はその實の外殼が、口を開かないので、この名がある。黄色の染料とする。

大意　この山吹の花色衣は、主は誰れであらうか、いか程問へども、更に返事がないわ、をゝそれもその筈、山吹は口の無いといふ梔子色であるによつてサ。

いくばくの田をつくればか時鳥しでの田長(タヲサ)を朝な〳〵よぶ　　藤原敏行朝臣

【釋】○しでの田長(タヲサ)　催馬樂に、「雨やどり、笠やどり、宿りてまからむ、しで田長」とある。田長は田をつかさどる人で、卽ち農夫である。時鳥の鳴くのは、梅雨頃を盛りとして、農時に際したれば、その聲を賤(シツ)田長と聞きなし、それが轉つてはしで田長となつたのだらう。そのしでの音に就いて、死出の山を越えた冥土に、時鳥のあるやうに、僞經十王經に作つてあるので、死出田長の意にも取り成して、詠むこともある。十王經のことは、哀傷「なき人の宿に通はば時鳥」の條にいつてある。賤田長をこゝは姑く調について、「しでの」と、の文字を入れた。

大意　どれ程の田を作るのであればか、時鳥はあのやうにいそがしさうに、賤の田長を毎朝毎朝呼ぶことぞ。

七月六日たなばたの心をよめる　　藤原かねすけ

いつしかとまたく心をはぎにあげて天の川原をけふや渡らむ

【釋】○たなばたの心を　たなばたは棚機で、織女星のことをいふが、こゝはひろく二星にかけていつた。歌は牽牛星の心を詠んである。○またく　待つの延言。○はぎにあげて　宣長いふ、「人に物をかくと顯はし見することを、古の語に脛に擧ぐといふことのありしなるべし。土佐日記なるもその意なり」といへり。土佐日記に「ほやのつまのいずし鮨鮑をぞ、心にもあらぬ脛にあげて見せける」とある。

大意　今日は六日なれば、逢ふ日は明日であるが、いつか〳〵と待ちかねる心を見せて、高股立を取つて、今日渡らうか。

【評】「脛にあぐ」といふ詞が、當時の卑俚な語であつた上に、「またく」に股の響があるので、俳諧の意をもつのであらう。

題しらず　　凡河内躬恒

むつ言もまだつきなくにあけぬめりいづらは秋の長してふ夜は

【釋】○むつ言(ゴト)　睦び言で、男女の情語をいふ。○いづらは　「は」は歎辭。

大意　睦言もまだ澤山あるのに、はやこの秋の夜があけたやうだわ、一體どこにあるぞ、よく人のいふ秋の長いといふ夜はサ。

【評】逢ふ夜の短さを怨みかこつてゐる。二星の心を詠んだとも見られ、又作者の實情とも見られる。「いづらは」の語が眼目である。これら相當の佳吟で、更に俳諧の氣味でない。三句、高野切、元本にあけにけりとある。

あきの野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時　　僧正遍昭

大意　秋の野に嬌態(シナ)をして立つて居る女郎花、これを世の人は大層にいひはやすが、あゝ喧しいわ、その花もほんの一盛りのわづかの間のものぞ、といふが表面の意で、あすこに美しい女が居る〳〵といひはやすが、ああ喧しいわ、何の美人の色も、ほんの一時の間のものぞ、といふのが裏面の意。

評　諸註、女郎花の喧しいやうに解きなしたのは、筋が通らない。女郎花はなまめいてゐるだけで、喧しいのはそれを見はやす人達の事である。諷意は、朝には紅顔、夕には白骨の無常を說いて、好色家を警醒したのである。

四句、一本及び元本にあなことごとしとある。

秋くれば野べにたはるゝ女郎花いづれの人かつまで見るべき　　よみ人しらず

釋　○つまで　摘までに、抓(ツ)までを寄せた。

大意　秋になると野邊に色めいて居る女郎花を來て見る人は、どの人でも摘まずに見ようか、いや皆摘んで見るわ、丁度花の名によぶ女のじやらくらしたのには、誰も一寸手を出して、抓(ツメ)つて見るやうにサ。

結句、一本つてに見るべきとあるはわるい。元本にすぐべきとあるは本文にまさる。

○

秋霧のはれてくもればをみなへし花の姿ぞ見えかくれする

大意　霧が晴れたり曇つたりすると、女郎花の花の姿がサ、見えたり隱れたりするわ。

○

花と見て折らむとすれば女郎花うたゝあるさまの名にこそありけれ

釋　○うたゝある　うたてあると同じい。

大意　つい一とほりの花と思つて折らうとすれば、女郎花の女といふ名は、生憎な譯合のある名でサあつたわい、女にはどうも手がさしにくいて。

評　作者は法師でゝもあらう。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　在原のむね梁

秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきり〴〵す鳴く

釋　○つゞりさせ　綴り刺せ。今も蛬(コホロギ)の聲を「肩させ裾させ」と聞く。○きり〴〵す　昔のきり〴〵すは今の蛬(コホロギ)である。

大意　藤袴の袴が秋風で、大分綻びたらしいわ、その證據には、その綻をつゞくりさせといふ蛬が鳴くわ。

二句、一本綻びぬらむとある。

あす春立たむとしける日、隣の家の方より、風の雪をふきこしけるを見て、その隣へよみてつかはしける

きよはらの深やぶ

冬ながら春のとなりのちかければ中垣よりぞ花はちりける

大意 まだ冬なれど、もう明日春が立つ今日で、春の近隣であるによつて、冬と春との界目の中垣からサ、その春の花が散つて來たわい。

評 わが宿を卑下して冬、隣家を春に喩へたので、隣家の雪をも花に見立てた。初句、高野切に冬なれど、結句、六帖に花ぞ咲きけるとある。又、拾遺集戀四に再出した。

題しらず

よみ人しらず

石(イソ)の上(カミ)ふりにし戀の神さびてたゝるにわれはいぞ寢かねつる

釋 ○石の上　舊りにかゝる枕詞。夏「石の上ふるき都の」の條參看。○たゝる　祟る。

大意 あまりに年久しくなつた自分の戀は、性が入つて、祟りをする爲に、自分は夜も寢ることがサ、えう出來ぬわ。

評 すべて、年舊りた物の化けて怪を爲すといふことは、太古よりの迷信であつたらしい。久しい戀に、心が焦られて、いよ〳〵安眠もしないのを、戀の祟りとしたのは、面白い滑稽である。

結句、一本にいねぞかねつるとある。又、拾遺集戀四に再出したのにも、元本にも、ねぎぞかねつるとある。

○

枕よりあとより戀のせめくればせむかたなみぞ床なかにをる

釋 ○枕よりあとより　頭から脚から。神代紀に、頭邊脚邊(マクラベアトベ)とある。○なみ　無さに。

大意 夜寢て居ると、枕の方からも、脚の方からも、戀といふ奴めが、しきりに攻め立てゝくる故に、仕様がなさにサ、床の眞中にうづくまつて、ぢつと起きて居るわ。

評 萬葉に「戀の奴(ヤツコ)のつかみかゝりて」と詠んだ僑で、床中に蹲る態度は、その術なさ加減があらはれて眞實だが、敍述には全く一種の俳諧味を持つてゐる。

○

戀しきがかたもかたこそありと聞け立てれをれどもなき心ちする

釋 ○かたもかたこそ　舊註に兩說ある。いかに戀すとて、心の方角は方角であるものと聞くといふ說と、いかに戀すとて、その人の形は形にてあるものと聞くといふ說とである。姑く下句とのかけ合と、狂味の如何とを思つて、後說に從つた。○立てれ居れども　立てれども、居れどもの略。

大意 どのやうに戀をする人でも、形は窶れ細りながらもサ、あるものと聞くわ、それに自分は戀に心が空になつて、立つて居てもすわつて居ても、この身體の形がどうやら無い心持がする。

初二句、元本に戀しきも向ふ方こそ、下句床中にこそおきゐられけれとある。

○

ありぬやと心見がてらあひみねばたはぶれにくきまでぞ戀しき

釋 ○ありぬや　逢はでもありぬやの略。

大意 思ふ人に逢はずにも居遂げられるものかと、ためしがてらに逢はずに居れば、もう〳〵さやうの冗談事もして居られぬ程にサ戀しいわ。

評 ありぬやと試みるといふことが、狂味のあるのである。

○

耳無の山のくちなし得てしがなおもひの色の下ぞめにせむ

釋 ○耳無の山　大和三山の一。大和志に「大和國在二十市郡木原村上方一四面田野、孤峯森然、山中梔樹多矣、因又呼二梔子山一」とある。○おもひ　思ひ。緋を寄せた。

大意 あゝ耳無山の梔子が得たいものであるわ、それがあらば、世間の聞えを忍ぶ戀の思の緋色の下染にしようわ、さすれば、耳なしなれば人が聞かず、口なしなれば人がいはず、思を忍ぶには好都合であるによつてサ。

○

足引の山田のそぼつおのれさへ我をほしといふ憂はしきこと

釋 ○そぼつ　案子山をいふ。古言そほど。○おのれ　こゝは二人稱に用ひたので、罵つた語。

大意 山田の案山子を見るやうな汝さへ、自分を望んで逢ひたいといふ、さても厄介なことよ。

評 萬葉巻十一なる、左の歌その儘である。

山城の久世のわく子がほしといふ我を、あふさわに我をほしといふ山城の久世。

二三の句、元本に山田にたてるそほつさへとある。

富士のねのならぬおもひに燃えば燃え神だに消たぬ空しけぶりを

きのめのと

釋 ○ならぬ　成就せぬ。○おもひ　思ひに火をかけた。○燃えば燃え　下の「燃え」は命令格。○神だに　富士の神は、木花開耶姫命である。富士の火のことは、既に序文の中に釋してある。

大意 富士の山が出來ぬ戀の思の火で燃えるやうに、自分の出來ぬ戀の思の火も、燃えるなら燃えよサ、富士の山の神樣でさへも、昔から思の火から立つ烟にも立たぬ煙を、お消しなさらぬものをサ。

評 後撰集戀二に、平貞文、

われのみやもえて消えなむ夜と共におもひもならぬ富士のねのごと

紀のめのとのかへし、

富士の根のもえわたるともいかゞせむけちこそしらぬ水ならぬ身は

とあるが、別時の詠か。撰者は「富士のねのならぬ思」の構想を俳意と見たらしい。かやうの空想は詩歌の常である。

きのありとも

あひ見まくほしは數なくありながら人につきなみ惑ひこそすれ

釋 ○ほしは　欲しに、星を寄せた。○つきなみ　手著がなさにの意、「手著」は便宜である。月を寄せた。

大意　星があつても、月のない晩は道を惑ふやうに、逢つてほしい思は、數限りもなくありながらも、その人に逢ふ便宜がなさに、心もかきくれて惑ふことでサあるわ。

小野小町

人にあはむつきのなきには思ひおきて胸はしり火に心やけをり

釋 ○つき　便宜に、月を寄せた。○思ひおきて　思ひ起きに、熾火を寄せた。熾火は盛んにおこつた火。○胸はしり火　胸の走るに、走火をかけた。「胸の走」るは心の騷ぐこと。「走火」は火の外へ刎ね飛ぶをいふ。○第二句、一本、なきよはとあるがよろしい。「に」はよの誤寫である。○をり　一本けりとあるは非。

大意　思ふ人に逢はう便宜の無い夜は、そのことを思ひながら起きて、火の走るやうに胸が走つて、心が焦れて居るわ。

初二句、元本に人にあはてつきなき時はとある。

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原おきかぜ

春霞たなびく野べの若菜にもなり見てしがな人もつむやと

釋 ○つむや　摘むに抓むを寄せた。

大意　春霞の立つ野べの若菜にもなつて見たいものであるわ、自分のやうな者でも、もしや若菜の摘まれるやうに、思ふ人に抓めらるゝか、どうかと思へばサ。

二句、新撰萬葉にはたちいづる野べの、四句、一本になりもしてしがとある。

題しらず　よみ人しらず

思へどもなほうとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじと思へば

大意　自分はあの人を、隨分思つては居れども、やはり賴みがたくて、疎々しい心持がするわ、その故は、丁度春の霞がこゝの山へも、かしこの山へもかゝらぬ所はあるまいやうに、あの人が氣が多くて、かゝりあるかぬ所はあるまいと思ふによつてサ。

評 著想は、左の歌などと同じなのに、これのみ俳諧なのはいぶかしい。

時鳥ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから（夏）

かつ見れど疎くもあるかな月影のいたらぬ里もあらじと思へば（雜上）

蓋し「かゝらぬ山」のいひかけの取り成しが、俳味に墮して聞えたのだらう。

平貞文

春の野のしげき草葉の妻ごひにとびたつ雉のほろゝとぞ鳴く

釋 ○しげき草葉の妻戀に　草葉のしげき妻戀にといふべきを、調について倒裝した。春上「若草の妻もこもり」の續きとは違ふ。○ほろゝ　ほろうつなどもいつて、雉の羽音である。涙のおちる形容のほろ〳〵をかけた。

大意 自分は春の野の草葉のやうに、妻を戀ふる思がしげき爲に、その春の野に妻戀して飛び立つ雉子の羽音の、ほろゝといふやうに、ほろほろとサ泣くわ。

評 ほろゝの口合が俳諧である。それを心付かずして、雉子がほろゝと鳴くと思つて、後の歌などによく詠んであるが誤である。行基菩薩の詠といふに「山鳥のほろ〳〵となく」とあるが、あれは行基時代の口調ではない。必ず後人の假託である。

あきの野に妻なき鹿の年をへてなぞわが戀のかひよとぞなく　きのよしひと

釋 ○かひよ　鹿の鳴聲である。甲斐よをかけた。○なぞ　この語で句を切つて見る。

大意 秋の野で妻のない鹿が、何年も何年も、あのやうにかひよ〳〵と鳴くが、何で妻戀の甲斐があるぞ、鹿の料簡がわからぬわ。

評 六帖に、伊勢、

秋山に妻なき鹿の年をへてなぞやいきてのかひよとぞなく

とある。いきてのの一語、頗る深刻に聞えて勝つてゐる。

五句、一本にかひよとはとある。

蟬の羽のひとへに薄き夏衣(ゴロモ)なればよりなむ物にやはあらぬ　みつね

釋 ○ひとへ　一重に偏にをかけた。○なればよりなむ　馴れば紕(ヨ)りなむにて、着馴らせば萎えばみて皺づくをいふ。

大意 自分の思ふ人は、蟬の羽の衣のやうに、一向に薄い心なれど、こちらから實を盡して馴れたらば、着馴らすと夏衣の紕れるやうに、ゆく〳〵は自分に思ひ寄つてきさうな物ではないか、寄つて來ぬことはありさうもないものに思はれるわ。

隱沼(カクレヌ)のしたよりおふる根沼縄(ネヌナハ)の寢ぬ名はたゝじくるな厭ひそ　たゞみね

釋 ○隱沼のしたよりおふる根沼縄の　譬喩をかねた序。隱沼は草など茂つて水の見えぬ沼をいふ。根沼縄は蓴菜をいふ。○くる　來(ク)るに繰るをよせた。「繰る」は縄の縁語。○たゝじ　一本たてじは非。

大意 私がこのやうに通つて來ても、貴方がつれなくて、一所に寢てくれぬ故、根蓴(ネヌナハ)の名のやうに、寢ぬ名は立ちはすまいと思ふ、それ故、草隱れの沼の底から生える根蓴のやうに、隨分忍んで私のくることばかりは、厭

つて下さるな。

ことならば思はずとやはいひはてぬなぞ世の中の玉襷なる　よみ人しらず

釋 ○ことならば　春下「ことならば咲かずやはあらぬ」の條に既出。○玉襷　玉は美稱、襷（タスキ）は掛ける物なので、どちらつかずに引きかゝつた意の隱語に用ひた。

大意 このやうに逢つてくれぬとならば、いつそ何とも思はぬといひ切つてしまへばよい、なぜに二人の中が、どちらつかずに引き掛つて、玉襷であることぞ。

評 後にも、「大幣にして」と詠んだ隱喩を、俳諧の意としてある。

○

思ふてふ人の心のくまごとにたち隱れつゝ見るよしもがな

大意 自分を思ふと口でいふ人の心の隅々（スミ〴〵）へ、そつと這入つて、隱れ〳〵して、實か嘘（ウソ）かを見屆ける手だてがあつてほしいな。

○

思へども思はずとのみいふなればいなや思はじ思ふかひなし

釋 ○いなや　否や。

大意 これほど眞實に思ふけれど、それをあの人は疑つて、思つて居らぬとばかりいふのであるから、いや〳〵、これから、もう思ふまいぞ、とても思ふかひがないわ。「いなや」、六帖に今はとあり、元本にいさやとある。

○

われをのみおもふといはばあるべきをいでや心は大幣（オホヌサ）にして

釋 ○大幣にして　大幣は、戀四「大幣のひく手あまたになりぬれば」の條に既出。こゝは引く手あまたの隱語に用ひた。

大意 あの人が思ふ〳〵といふのも、自分ばかりを思ふのならば、それでよからうが、いやもうあの人の心は、あちらへもこちらへも靡く、引手あまたの大幣であつて、一向あてにならぬわい。

○

われを思ふ人を思はぬむくいにやわが思ふ人のわれを思はぬ

大意 自分を思つてくれる人を、思つてやらぬ報かして、自分が戀しく思ふ人が、自分を思つてくれぬわ。

評 眞淵は、「俳諧にあらず」と評した。けれど、「思ふ」の語を故意に疊用したり、思はぬ報を取り成したりなど、やゝ俳意はある。次の歌も、むくいを詠んでゐる。

○

思ひけむ人をぞともに思はましまさしや報(ムクイ)なかりけりやは　〔一本ふかやぶ〕

釋 ○まさしや　正しや。

大意　あの自分を思つてくれたであらう人をサ、こちからも思はうことであつたわ、あゝ爭はれぬもの、報といふものが無かつたことか、いや覿面にあつた、それは今自分の思ふ人が、自分を思つてくれぬわ。

作者の名、次のもこれも、一本云々は、奏覽の原本にあるまいことゝ思はれる。定家卿校正の時書き加へられたともいふ。このあたり皆「よみ人しらず」の歌であらう。

○

出でゆかむ人をとゞめむよしなきに隣のかたに鼻もひぬかな　〔一本よみ人しらず〕

釋 ○隣のかたに　隣の方にての意。○鼻もひぬ　鼻をひるとは、嚏(クサメ)をすること。

大意　今こちから出でゆかうとする人を、留めよう手だてがないによつて、人が嚏をすれば、出ることを忌む習があるから、かこつけて留めようと思へど、生憎近所隣で、嚏もせぬことよ。

評 奈良時代には、鼻ひれば待人來るといひ、又、人の思ふ時は嚏るともいつた。この頃は又、鼻ひれば、出て行くことを忌むといふ迷信のあつたと見える。抑も嚏を凶兆とすることは印度の慣習で、それが佛敎に伴はれて、支那を經て日本に入つたのである。

元本、初句いでてゆく、三句すべもなし、結句鼻もひなくにとある。

○

紅にそめしこゝろもたのまれず人をあくにはうつるてふなり

釋 ○あく　飽くに灰汁(アク)をかけた。紅は藁の灰汁にて洗へば、色が褪めるものとぞ。

大意　紅のやうに、深い色に染めこんだ人の心も、頼みにはならぬ、なぜなれば、あの紅も灰汁に漬ければ色が變るといふやうに、人を飽くといふ氣が出ると、つい心が變るといふことであるわ。

評 紅のやうに深く思つてゐますなど、人が自慢をしたので、その紅の深い色とても、あてにはならぬといひくたしたのである。

二句、六帖に染めしころもとある。

○

いとはるゝわが身は春の駒なれや野飼がてらに放ちすてたる

釋 ○駒なれや　駒なればやの意。○野飼がてら　顯註に「馬をも牛をも放ちて飼ふをば、野飼といふ。それに寄せて、人を思ひ放つをも、野かふといふなり」とある。景樹の說に「退きのきを延べてかふといふにて、退きがてらに遠ざかる譬なり」とある。後撰集に「みちのくの尾駮(ヲブチ)の駒も野飼ふには荒れこそまされなつくものかは」など、まことに退く意がありさうである。

大意　人に厭はれる自分の身は、春の駒かして、丁度春駒を野飼がてらに放しずてにしておくやうに、あの人が、

容氣せぬやうな顏をして、その身を退きがてら自分を見すてゝ、一向かまはぬわ。

〇

鶯のこぞのやどりのふるすとや我れには人のつれなかるらむ

釋 〇鶯のこぞのやどりの　「古巢」にかゝる序。〇ふるす　古巢に舊すをかけた。

大意 鶯の去年の宿を古巢といふやうに、あの人が自分を舊いものにして見捨てるといふので、それでかうも氣強くするのであらうか。

評 詩でも新人といひ故人といふ。見捨てることをふるすといふは、當時の通語である。

〇

さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやく霜夜をわが獨りぬる

釋 〇さかしらに　賢しらに。かしこだての意。〇さやく　さや〳〵と鳴ること。

大意 人に見捨てられても、ぬからぬ顏に、夏は人まねに、いつそ獨寢の方がよいなどいつて紛はしても見たが、このやうに笹の葉の、さや〳〵と鳴る寒い霜夜をも、自分が獨り寢ることよ、これはいかにも堪へやうがないわ。

評 深い感傷を含んだ作で面白い。たゞ第二句の俳意と、「人まね」の語とが、この歌をこの部に收めしめたものである。

平中興

あふ事の今ははつかになりぬれば夜深からではつきなかりけり

釋 〇はつか　僅に二十日を寄せた。〇つき　便宜に月を寄せた。

大意 何時も二十日になれば、夜がふけねば月がないが、自分もあの人に逢ふ事が、人目のうるさゝに、今ではわづかになつたによつて、たまに逢ふにも、人目の無い夜ふけでなくては、便宜がなくなつたわい。

結句、元本につきなかるべしとある。

左のおほいまうち君

もろこしの吉野の山にこもるとも後れむと思ふ我れならなくに

釋 〇もろこしの吉野の山　吉野山は山深く、世を厭ふ人などのよく籠る所なので、假令諸越のさうした深山に籠るともと、假に設けていつた。

大意 貴方が大和の吉野山は勿論、假令唐の吉野山の奥へ引き込まうとも、どこまでも慕つてこそゆけ、あとに殘つて居ようと思ふ自分ではないものをサ、それを心の淺いやうに思はれるのは口惜しいわ。

評 「もろこしの吉野の山」、この辭樣が奇矯なので、俳意と見なしたらしい。撰者達は餘りにまじめ過ぎる。戀五に見えた、伊勢の御が仲平朝臣に贈つた、「三輪の山いかにまち見む云々」の歌の返しとて、これを伊勢集に擧げたので、仲平の作とし、さて仲平は後にこそ左大臣にもなりたれ、延喜の頃は未だ微官だからと、「左のおほいまうち君」の署名を疑つた者のあるは、伊勢集に泥んでゐる。かの集は素よりしどけないもので、勅撰集

の如き正しいものでない。彼れによつて是れを云爲するのは、本末を顚倒してゐる。勿論「三輪の山」の返しでもない、仲平の作でもない、左大臣藤原時平の作である。

雲はれぬ淺間の山のあさましや人のこゝろを見てこそやまめ　　なかき

釋 ○雲はれぬ淺間の山の　譬喩をかねて、「あさまし」の序とした。淺間山は信濃國北佐久郡の噴火山。○人のおのれをさした。

大意 淺間山の噴き出す烟が、雲となつて晴れずにあるやうに、疑ひの晴れもせぬに、早くも退いてしまうとは、あまり怪しからぬ肝のつぶれたことよ、私の心をとくと見たうへでサ、止むなら止めたがよいわ。

評 淺間の烟の比喩と「あさ」の疊音など、俳諧とするのは贊成し難い。

なにはなる長柄の橋もつくるなり今はわが身を何にたとへむ　　伊勢

釋 ○長柄の橋も　雜上「よの中にふりぬる物は」の條に旣出。○つくる　造るの意。盡くるに解くは當らない。この事、序文中、「長柄の橋もつくるなりときく人は」の條に旣出。

大意 これまで舊い物のためしに引いた難波の長柄の橋も、新しく出來るのである、今はもう人に飽かれて、舊い物となつてしまつた自分の身を、何に譬へようぞ、何にも譬へる物も無くて、心の慰みやうも無いわ。

評 ひろい世界に自分ひとり男に舊るされてゐる者と心狹く考へて、くよ〳〵物案じした趣が面白い。これなど俳諧に收めるのは餘りに惜しい。

初句、金玉集に「つのくにの」とある。

まめなれど何ぞはよけく刈る萱の亂れてあれどあしけくもなし　　よみ人しらず

釋 ○まめ　眞實、或は眞面目などの意。○何ぞはよけく　よけくあらむの略。○刈る萱の　刈つた萱は亂れて見えるので、「亂れ」にかゝる序とした。刈萱として一種の草の名とするは、後世の訛誤である。

大意 自分は隨分實體であるけれど、それが何のよい事があらうぞ、現にあの人などは、自分をさし置いて、刈萱の亂れたやうに、あちこちに心を移して亂れて居るけれど、それでもさのみわるいやうな事もないわ。

評 「よけく」「あしけく」、對偶があまりに親貼に過ぎるが、卒直らしい點によい氣分がある。

何かその名のたつ事のをしからむしりて惑ふは我れひとりかは　　おきかぜ

大意 何のその、名の立つことが惜しからうぞ、惜しくはないわ、戀路のならひ、よくも無いと知りながら迷ふ

のは、自分ひとりかまあ、自分ばかりでは無い、皆さうであるわ。

評　これはひどく急所を突いたものだ。愚者も賢者も、戀の前には一切無差別だと喝破して、名の立つ位が何かと、自棄的に出たのはよく〳〵の戀路であらう。多分ある衝動を心に感じた結果らしい。

いとこなりける男によそへて、人のいひければ

よそながらわが身にいとのよるといへば只いつはりにすくばかりなり　そく

釋　○いとこなりける云々　從弟なる男に、情交（ワケ）のあるやうによそへて、世の人のいひ騷いだからの意。但、「けるは無用の辭である。元本に絲と名ありける男に云々とあり、顯註に、「この歌は、いとといふ男によそへて、人のいひければ、女のよめるなり」とあるのに從ふがよい。○いとのよる　絲といふ男の寄るに、絲の縒るを寄せた。○いつはり　僞に針を寄せた。○すく　着（ス）ぐること、好色を寄せた。

大意　この頃聞けば、よそながら絲といふ男が自分に寄り附いて居るといふから、絲の縒つたのは針にすげ通すばかりである如く、たゞ冗談に好いて見たばかりサ。

評　緣語のくさり仕立は論外であるが、絲だの針だのが作者の身分を語つてゐる。

題しらず　さぬき

ねぎ言をさのみ聞きけむ社こそはてはなげきの森となるらめ

釋　○ねぎ言　願言。○なげき　歎きに木をかけた。「なげきの」は歎がの意で、なげ木の森と續くのではない。

大意　多くの人が歎き願ふ詞を、さやうにお聞き入れなされたであらうと思ふ神の社はサ、しまひには、なげきといふ木の茂る森になるであらうわ、といふが表面の意で、人のいひ寄るのを、さやうに無暗（ムヤミ）と聞き入れて、誰れ彼れなしに逢つたであらう人がサ、しまひには歎きが繁くなるであらうわ、といふが裏面の意。

評　さて、その人は作者自身なのであらう。

元本に作者を安倍淸行娘とある。

大輔

なげき樵る山とし高くなりぬればつら杖のみぞまづつかれける

釋　○なげき　歎きに木をかけた。○つら杖　頰杖（ホヽ）。

大意　いろ〳〵の歎きが、山のやうにサ高く積つたから　何ぞ思ふと、頰杖ばかりサ突くやうになることではあるわい。

評　木を樵りつんで來て、山阪の高さに、道すがら杖を突く趣で仕立てた。

元本に作者を源扶娘とある。

よみ人しらず

なげきをばこりのみつめて足引の山のかひなくなりぬべらなり

釋 ○なげき　歎きに木をかけた。○足引の山の「かひ」にかゝる序。山には峽（カヒ）のあるので、詮（カヒ）（甲斐）にかけた。峽は山あひの地をいふ。

大意 あまりに木を樵り積むと、山の峽が埋つてなくなるやうに、自分は戀ゆゑに歎きばかりが積つて、その歎き甲斐がなくなつてしまひさうなわい。

○

人こふることを重荷と擔ひもてあふごなきこそ侘しかりけれ

釋 ○あふご　朸（アフコ）に逢ふ期（ゴ）をかけた。朸は荷ひ棒である。

大意 戀を重荷と擔つて居るから、それなら朸がある筈なのに、その朸といふ逢ふ期がないのがサ、難儀なことであつたわい。

○

よひの間にいでて入りぬる三日月のわれて物思ふ頃にもあるかな

釋 ○よひの間にいでて入りぬる三日月の　三日月は片破れなので、「われて」にかゝる序とした。○われて　わりなくの意。「わりなく」はことわりなくの略で、無理やりに、强ひてなどの意。

大意 宵の口に一寸出て這入つてしまふ三日月の、片破れといふやうに、わりなく無やみに、物思をするこの頃であることよ。

評 上句は序であつて、今日から見れば俳諧らしくもない。結構な歌である。只「三日月のわれて」のかゝりが、當時は奇異に感じた爲であらう。

○

そへにとてとすればかゝりかくすればあないひ知らずあふさきるさに

釋 ○そへにとて　當時の俗語と思ふ。契沖いふ、後撰集に、『けふそへに』とあるは副の意にて、けふさへにといふ詞なれば同じからず。古今著聞集第十六、法師の角力とる事をいへる條に、『そへにと答ふ』といふ詞見ゆ。それよといふ詞に近し」と。この說に從つておかう。○あふさきるさに　「あふさきるさ」は合（ア）ふさ離（キ）るさの義で、往くさ來さの意から轉つては、往き違ひ、かけ違ひなどの意にも用ひられる。諸註、皆いひ足らない。「に」はにての意。

大意 さうだと一つ思案をきめて爲（シ）て見ると、一方に差支へる、それならばと又その方へかゝつて爲て見ると、又こちらの一方に差支へる、あゝ何といつてよいやら、いひやうも知らぬわ、とかく世の中の事は、あちこち往きちがひのものであつてサ。

評 「かくすればとあり」とあるべきを、上にゆづつて略いた。人事は多くこれ塞翁が馬である。

○

世の中のうきたび毎に身を投げばふかき谷こそ淺くなりなめ

大意　世の中が憂く思はれる度毎に、世を厭つて、身を投げようなら、深い谷がサ、その死骸でつまつて、淺くなつてしまふであらうわ、このやうに憂い事の多い世の中なればサ。

評　滑稽突梯の想、暗に諷諭の意を寓してゐる。

在原もとかた

よの中はいかにくるしと思ふらむこゝらの人に恨みらるれば

大意　世の中そのものは、どんなにか苦しいと思ふであらうわ、かう澤山の人に、世の中が恨めしい〱と恨まれるからサ。

評　世の中を擬人しての一趣向、諷諭の意がある訓戒をもたらす。

四句、六帖によろづの人にとある。

よみ人しらず

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき

釋　○やさしき　羞かしいこと。

大意　一體自分はまあ、何をしてこのやうに年寄つたのであらう、何一つ仕出した事もなしに、寄つてしまつた年の思はくがサ、はづかしいわ。

評　頗る感慨の深い作で、遲暮の歎は全く同情に値する。「年の思はむ」の擬人は、やゝ尖奇の嫌がないではない。但「松のおもはむ事もはづかし」と詠んだ歌は正體の本歌と認め、「年のおもはむ」は俳諧に收めたのは、その理由がわからない。有象と無象との差別はあるが。

三句、朗詠に老いにけむ、結句、六帖、元本にこともやさしくとある。

おきかぜ

身はすてつ心をだにもはふらさじ遂にはいかゞなると知るべく

釋　○はふらさじ　「はふる」は放ち捨つるをいふ。物を擲つを、俗にはうるといふもこの語。零落の意にも用ひるが、こゝには當らない。

大意　とてもこの世の望は、思ふにかなはぬ故、この身は思ひ切つて無い物として捨てたわ、しかし、せめて心だけなりとも大切に持つて、捨鉢といふやうにふり捨てまいぞ、流石に捨てた身の行末が、どのやうになるかと見屆けられるやうにサ。

結句、家集、元本になると見るべくとある。

ちさと

白雪のともにわが身はふりぬれど心はきえぬものにぞありける

釋 ○白雪のともに　白雪と共にの意。

大意　雪の降ると一緒に、自分の身は老いふるびたが、流石に雪の消えるやうには、心は消えぬものでサ、やはり若い時に變らぬわい。

評 雪の降る冬を經て、又一年を加へた人の感想で、壯心は決して消磨しないと威張つた。
初句、元本に白雪とゝある。

題しらず　　よみ人しらず

梅の花さきての後のみなればやすきものとのみ人のいふらむ

釋 ○み　實に身をかけた。○すきもの　酸き物に好色者をかけた。

大意　梅の花が咲いて後になる實は、酸いものであるが、そのやうなこの身であればかして、自分を好色者だ好色者だとばかり、人がいふのであらう。

法皇、西川におはしましたりける日、猿山の峽に叫ぶといふことをよませ給うける　　みつね

わびしらにましらな鳴きそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

釋 ○法皇西川におはしまし云々　雜上「蘆たづの立てる川邊を」の條に既出。「猿山の峽に叫ぶ」は、猿叫ニ山峽一を書きくだしたので、鶴立洲と同じく詩題である。○わびしら　侘しげにといふに同じい。「ら」は形容の接尾語。○ましら　猿のこと。翻譯名義集に「摩斯吒、或、末迦吒、此云ニ獮猴一」とある。○かひ　詮（甲斐）に、峽をかけた。

大意　猿よ、そのやうに難儀さうに啼くなよ、今日は法皇樣の御幸があつて、この山のありがひのある日ではないことか、ほんにかひあるあり難い日であるぞよ。

評「わびしらに啼く」は、題の趣によつたのである。詩には猿聲を悲しいものに作り、宜都山川記の「巴東三峽猿鳴悲、猿鳴三聲涙沾レ裳」、白氏文集の「三聲猿後垂ニ鄕涙一」の類、屈指に遑がない。眞淵は、「これを意詞たはれたるところなくめでたし」とて、この部に入つたのを疑つてゐる。想ふに、わびしらの音を反復すべく、マシタの梵語をましらと轉じて、口合にしたものか。或は萬葉集に、既にましの助辭に猿の字を塡てゝあるから、早くより猿をマシとのみいつて居たのに、わざと「ら」の複數を添へて、疊音に仕立てたものであらう。この作者時にかやうの戲謔を弄する癖がある。比良の山を隱しては、「かくてのみわが思ひらのやまざらば」と、思ひらの新熟語を作つてゐる。「ましら」もこの儔であらう。又「山のかひよとぞなく」と詠んだのが、この部に入つてゐるのを思ふと、「山のかひある」のいひかけだけでも、當時は俳諧の意と見たことが知られる。
元本に初句ましはな鳴きそ、結句けふにはあらずやとある。

題しらず　　よみ人しらず

世を厭ひこの本ごとにたちよりてうつふし染の麻のきぬなり

釋 ○うつふし染　「うつふし」は俯臥しで、假寢のさまをいふ動詞。空五倍子をかけた。宣長が「全臥にて全剝の全なり、丸寢と同じ」としたのは從ひがたい。五倍子は、ぬるでの木に産する蟲の巣で、その中がうつろなので、空五倍子といふのである。これで黒色を染める。卽ち五倍子染である。○麻のきぬ　僧衣をいふ。

大意 この衣は、浮世を厭つて所定めずあるく僧の、どこでも行きかゝり次第、樹蔭樹蔭に立ち寄つて、假寢にうつ臥す、その空五倍子染の麻の黒衣であるわ。

評 五倍子染の僧衣を贈るとて詠んだものかとも思つてみたが、歌の趣は自身の麻衣を詠じたらしいから、作者は僧侶であらう。「うつぶし」のいひかけがやゝ異樣なので、この部に收められたと見える。大和物語には、上句「霜雪のふるやの中にひとり寢の」とあつて、遍昭の詠とした。但本文のを正しいと見るが至當である。

結句、六帖に苔のころもぞ、遍昭集に麻の袈裟なりとある。

この次に、元本に左の歌どもがある。

人の牛をつかひけるに死にければその牛のぬしの許によみて遣しける　源宗岳娘

わがのりし事をうしとや思ひけむ草葉にかゝる露のいのちを

○

いかにしてこれを隱さむくれなゐのやしほの衣まくりてにして　よみ人しらず

○

てる月をゆみ張としもいふことは山のはさしていればなりけり　みつね

古今和歌集巻第二十

大歌所御歌

おほなほびの歌

あたらしき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ

日本紀には、つかへまつらめ萬代までに

釋 ○大歌所　西宮抄に、「大歌所、在二圖書寮東一、新嘗時供奉、有二親王、大納言、非參議、六位別當、琴師、歌師十生一」とある。邦樂なる神樂、催馬樂、風俗等の諸物を掌る官人、歌人等を召し置かれる所である。それを習ひ傳ふるにもこゝで教へる。江家次第に、大歌、小歌の稱が見えた。大歌は公朝に用ひられるをいひ、世に專ら歌ふを小歌といふ。又謠ふには、新しく撰んでうたひ、その曲調をも作ることがある。大嘗會、新嘗會の時には、大歌所の人が奏樂する。雅樂寮の專ら唐風の舞樂を司るとは異なる。この巻の歌は皆こゝで歌はれたものなので御歌といふ。○おほなほび　紀記に、伊邪那岐神の、夜見の國より歸りまして、その禍を直さむとて成りませる神直毘、大直毘神のことが見える。卽ちその大直毘神の御祭の時にうたつた歌である。催馬樂の韓神の詞に、「おほなほみ」とあるも同じで、もとはこの神の祭の歌であつたらう。この神大直日とも書くので、

神を祭りはてゝ後の直會（ナホラヒ）の日とする說もあるが、諸ひ難い。○たのしきをつめ　樂しきを積むに、木を積むを寄せた。木を積むは年の正月十五日、百官悉く薪を奉る、これを御薪（ミカマギ）といふ。その數の定めは延喜式に見えた。積木のはじめは天武帝の五年正月に、神位以上進レ薪と紀にある。

大意　この新しい年の始に、かうやつてサ、今から千年の先までをかけて、樂しきといふ木を、お庭に積みませう。

【評】續日本紀、天平十四年正月に、天皇大安殿に出御ましまして、五節の舞等奏しをはりて、諸臣に宴を賜ふ時、六位以下の人々琴を彈いて、

新しき年のはじめにかくしこそ仕へまつらめよろづ代までに

と歌つたことが出てゐる。左註に「日本紀」とあるは誤つてゐる。又萬葉巻五に、

むつき立ち春のきたらばかくしこそ梅ををりつゝたぬしきをへめ

とある。この二歌を混一にして、更に「樂しきをつめ」の積木をよそへた趣向を加へて、時調に協ふやうに歌ひかへたものと思はれる。であるから、この集の歌として見る場合には、本文のまゝで解くがよい。契沖が萬葉の本文を執して、「古き上手の書けるへ。文字は、つ。に紛ひ易きより、後の人の寫し誤れるにて、へめなるべし」と唱へてから、先覺多くこれに從つてゐる。本文のまゝでよく聞えてゐる以上は、好んで平地に波瀾を起すのは面白くない。古筆物もへ。つ。の別が不分明である。この歌は催馬樂の呂の歌である。

この大歌所の歌どもの端詞、甚だしどけなくて、事行かぬふし多く、上なる巻々のにふさはない。思ふに、もとは端書がなくて、只歌章ばかりを書きつらねたものを、後人、樂府の本によつて書き入れたと思はれる。されば必ず詞書によつてのみ釋かうとするのは拘はつてゐる。

ふるきやまとまひの歌

しもとゆふかづらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかな

【釋】○ふるきやまとまひ　もとは大和の國振の舞であつたらう。大嘗會の己の日に、豐樂殿にてさま〳〵の舞ある中の一つである。また神社の祭にも演ぜられる。こゝに「ふるき」とあるは、大和舞の歌章中のふるき意である。舞にかけていふのではない。○しもとゆふ　楚結ふ。楚は若木の茂り立つたもの、これを刈つて、薪にするとて、藤葛で結ぶことがあるので、「葛」にかゝる枕詞とした。○かづらき山　大和國南葛城郡と、河内國南河内郡とに跨る山。河内では金剛山といふ。

大意　あの葛城山にふる雪の、ふらぬ間のないやうに、何時といふことなしに、君のことが心にかゝつて、忘るるひまのないことよ。

【評】三句までは序で、戀歌である。構想は天武帝の、

三吉野の耳我（ミミガ）の嶺（タケ）に、時なくぞ雪はふりける、ひまなくぞ雨はふりける、その雪の時のなきがごと、その雨のひまなきがごと、隈もおちず思ひつゝぞ來し、その山道を。（萬葉巻一）

と同じい。しかも詩形が小さいから、曲折合拍の妙を缺いてゐる。殊に結句が、力量に乏しい。平安朝となつては、頭大尾小の體の多いのは、七五調の結果であらうが、かやうな凡句輕句を以て結束するのでは、完作は到底得られない。されば同じ事でも、

うち渡す竹田の原になくたづのまなく時なくわが戀ふらくは（萬葉巻四）

の如く、とゝのへたいと思ふ。葛城山は大和の國では吉野につぐ高山で、京人の目からは雪勝なおそろしい山と感じてゐたのであらう。

あふみぶり

近江より朝立ちくればうねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜は

釋　○あふみぶり　古事記に夷振(ヒナブリ)、宮人振、天田振(アマダブリ)などあると同じく、管絃に合はせて奏した歌には、おのおの一定の曲節があつて、それを何振と名づける。なほ何節(ナニブシ)といふやうなものである。こゝに近江振といひ、次に水莖振、四極山振といつたのは、樂府で呼んだ名で、たゞその歌の詞を取つて、假にその節の名としたゞけのことである。近江振といつても、その國の風俗の歌曲ではない。○うねの野　近江國蒲生郡にあつて、いま蒲生野といふ。

大意　あふみから今朝はやく立つてくると、今うね野に、あれ鶴がサ鳴くは、さあ夜がもう明けたわ。

評　「近江より」は、うね野に相對的に使はれてゐるから、近江の國内のある一地方の名に相違ない。或説に「今うね野の三里ばかりに大見といふ所あり、昔の順路なり。假字は違へど聲の通へば、この誤りたるにや」とあるも捨て難く思はれる。卽ちそのあふみなる家を、夜深く立ち出た人の詠であらう。うね野あたりは、古へは大湖の水がひろがつてゐたので、人里は稀に、鳥雀の影は絶えて、鷺鶴などの涉水鳥ばかり、多く栖息してゐたらしい。曉行幾里、こゝに至つて、一聲の鶴唳に天が始めて白い。旅情がこゝにはじめて慰まれる。「あけぬこの夜は」一の喜氣に滿ちた調を聞き取らなければならぬ。又この倒裝の辭樣は、四句切れの、上の强い調に對抗して、千斤の力量がある。「この」の一語も、また容易に下せない語である。わびしさにその夜明を待ちに待つてゐた趣も見えるではないか、後人好んで、この結句を襲用したが、畢竟優孟の衣冠であることは、代々の撰集を見てもわかる。要するに高古で、神韻縹緲、一唱三嘆に値するものである。

みづぐきぶり

水莖の岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも

釋　○みづぐきぶり　水莖振。○水莖の岡　近江なり、筑前なりといふ説もあるが、宣長の「水莖は草木の瑞々(ミヅミヅ)しき莖の稚(ワカ)きの意にて、その稚はチカと通へば、岡の枕詞とせり」といふ説に從はう。○岡のやかた　岡の屋形。屋形は殿舍に比べて、備はらざる家だちをいふ。宣長は「岡の屋縣(ヤアガタ)の略にて、岡の屋は、山城宇治郡なる地名なり」と。關岡野洲良は「萬葉に岡の湊とある　筑前遠賀郡の岡の屋形をいふ」。○妹　こゝは妻をいふ。○あれ　我れの古言。○朝け　朝明(アサアケ)の略。○霜のふり　「降り」は降るの假體言。○はも　歎辭。

大意　この岡の家で、妻と自分と寢て夜の明けた今朝の、この霜の降りやうはまあ、一方ならぬことわ。

評　昨夜は二人して寢たので、かほど冷えた夜とも思はなかつたがの餘意がある。蓋し岡邊はおのづから風の當る寒い處なので、その朝霜とても雪の如くに繁かつたらう。たまたまこの屋形に相宿りした人、よべの鴛夢の暖かつたのに思ひ較べて、覺えず驚歎の語を洩したのである。「寢ての朝け」造語が頗る簡淨である。「霜のふりはも」の歇後の辭樣、想像の餘地が無窮で、情致の含蓄を多大ならしめる。

結句、古き一本に雪のふりはもとある。

しはつ山ぶり

しはつ山うち出でて見れば笠ゆひの島こぎかくる棚なし小舟

釋 ○しはつ山ぶり　四極山ぶり。この歌は萬葉集巻三、高市連黒人が覊旅歌八首の中の第三、四極山うち越え見れば笠縫の島こぎかくる棚なし小舟を歌ひひがめたもので、このまゝでは解き難い。姑く萬葉に據つて解釋しよう。○しはつ山　攝津國住吉より東の方喜連といふ所へ行く道の間に、岡山の卑い阪がある、それをいふ。喜連は呉の訛で、雄略紀、十四年正月呉人の參つた條に、「泊ニ住吉津一、是月爲ニ呉客一、通ニ磯齒津路一名ニ呉坂一」とある。○笠縫の島　今の大阪市東成區深江町であらう。昔は管田が澤山あつて、その質が他よりも勝れ、里人は笠を縫ふことを業としてゐた。この地やゝ高くてあたりは卑いから、古へは皆ひろい沼江で、この村ばかり島であつたと見える。よつて笠縫の島の名を負つたのであらう。○棚なし小舟　戀四「堀江こぐ棚なし小舟」の條に既出。

大意　四極山をずつと越えて見渡すと、あれあの笠ぬひ島の蔭へ、漕ぎ隱れて行くよ、棚無し小舟がサ。

評　作者は萬葉に據ると、高市連黒人である。この人また住吉で、

住の江のえな津に立ちて見渡せば武庫の泊ゆいづる舟人

と詠んだ。同時の作であらう。舟の出入こそあれ、いづれも眺望の敍景で、同趣同調のものである。抑も淀川の下流は縱横に分派して、今の大坂附近は多くは島嶼を成してゐたのだから、眺望は頗るよい處であつた。鼻の支へたやうなしはつの山路を越えてくると、眼界俄に豁然として、展開された一幅の活畫圖、萬頃の蒼波、幾處の蜑村島嶼が、歴々と指點される。かくてはかない棚なし小舟も、端なく詩人の一顧を得て、漕ぎ隱れるまでその行方の諦視されたのは幸である。靜中の動、景致が想ひやられる。

神あそびの歌

とり物のうた

かみがきのみむろの山の榊葉は神のみまへに茂りあひにけり

釋 ○神あそび　神慮を慰める爲に、神祭の時に奏する歌舞の遊をいふ。卽ち神樂である。○とり物　神祭の時舞ひはやすとて、手に採り持つ物である。榊、幣、杖、篠、弓、劍、鉾、杓、葛の九種がある。この採物に就いて、一々謠ひはやす歌章がある。これより以下の歌どもが卽ちそれである。○みむろ　橘守部いふ、「又みもろといふ、御杜の義。神籬をヒモロギと訓めるも同じ」と。面白い考とは思れるが、姑く舊說の如く御室と解いて、神の社殿の事とする。御室の山は卽ち社殿のある山の意。どこの社地の山でもいはれる。飛鳥の神岳、又は三輪山を、御諸山とさしていふとは別である。○榊　榊は和名鈔に龍眼木を訓み、新撰字鏡には、杜をも訓んである。眞淵は、「榮樹の意なれば、何にまれ常磐木の稱にて、特に樒をいへるならむ」といつた。荒木田久老は「樒か」といひ、田中道麻呂は「北國にて、ミシヤくキ、ビサゴ、濃尾附近にてチサカキ、ビサカキ、シラシヤケと稱ふる物といひ、宣長も、これを贊けて、「伊勢にてミサカキといへるに同じ。和名鈔に、柃、比左加木」とある物といひ、本居太平は、「今いふ榊の木なるべし」といつた。字鏡に、杜を佐加木と訓んである

ので思ふと、神社に神木として齋いたのは、大抵常磐木である。されば、字義は眞淵の說に從ふがよく、しかも樒とのみ定めたのはわるい。

大意　神のましますお社の山の榊の葉は、まことに仕合はせなことで、神樣のお前に茂り合つてゐるわい。

評　榊を讃歎したのである。これ卽ち間接に神威を讃歎した事になる。

初句、六帖に神垣やとある。

○

霜やたびおけど枯れせぬ榊葉のたち榮ゆべき神のきねはも

釋　○やたび　八度。數多きことを、八の數に換へていつた。○榊葉の　榊葉の如くの意。○神のきね　神樂歌祕抄にかむなぎとある。「きね」は、眞淵は、覡女の轉といひ、守部は禱部の轉といつた。後說の方巫覡を通じた說だから當つてゐる。宣長の木根ならむといひ、太平の城根ならむなどいふ說は從ひ難い。さて神樂には八處女とて、八人の巫女があつた。

大意　霜が幾たび置いても枯れぬ榊葉のやうに、行末立ち榮えさうな巫女であるわまあ。

評　八處女のいとうるはしいのが立ち舞ふのを見て、その行末を思ひやつて祝つたので、御前の榊を借りて序とした。かういへば、自然間接にその祭神を祝ぐことになる。以上二首は、榊をとつて歌ふのである。

二句、高野切におけどもかれぬ、「はも」六帖にかな、高野切かもとある。

○

まきもくのあなしの山の山人と人も見るがに山かづらせよ

釋　○まきもくのあなしの山　「まきもく」は卷向の轉音。卷向山は大和國磯城郡にある。大和志に「峰を弓月嶽といひ、南を檜原山、北を穴師山といふ」とある。○山人　山住の人をいふ。太平が、「西宮記、北山抄、江次第などに、神事の時、衞士を以て山人と爲して、事を執ること見えたり。こゝのもそれなるべし」といふ說は、この歌に與らない。○がに　かのやうにと譯す。がねの轉語。○山かづら　山住の人、日蔭（女蘿）を頭飾とすることがある。「かづら」は髮連の義で、髮飾に卷くをいふ。萬葉に「足曳の山下日影かづらける」、「足曳の山蘰の兒」、「足曳の山蘰かけ」の類がそれである。神事に從ふ者も、日蔭を冠などにかけた。又、組絲にしてかけるのにも、日蔭の名がある。紀記、天岩戸の段には眞栎を蘰として日蔭を手繦とすと見えた。それがうつつて、神事に日蔭を飾に付ける事となつたのである。

大意　神事を勤める人達よ、あれは卷向の穴師の山の山人であると、よその人も見るほどに、山蘰をしなさいよ。

評　山蘰をするようにとそれ程勸めるのは、卽ち神事をいそしめといふ諷意である。穴師あたりは今は樹木もなくなつて、からりとした山里であるが、萬葉あたりの歌を見ると昔は森林地帶であつた。されば、「まき向のあなしの山」に山深い土地の趣を思はせ、さうした地方の山賤の風俗を思ひ寄せて「山人と見るがに」といつた。この誇張とかの諷意と、「山」及び「人」といふ語を反復した、疊音の諧調と相俟つて、頗る詩味のうごくを覺える。さてこれは神樂の葛の歌である。

初句、神樂譜にわぎもこが、四句、同書に人もしるべく、六帖に人も見るがねとある。

○

み山には霰ふるらし外山(トヤマ)なるまさきのかづら色付きにけり

釋 ○外山　奥山に對して、端にある山をいふ。○まさきの葛　二說ある。一は、「薜荔(ヘキレイ)といふもので、本草綱目に、「四時凋まず、厚葉堅强なるものにて、花咲かずして實なるとある物なるべし」とあり、二は、「蔦の一種にて、其の葉は南天に似たるものにて黑みあり。冬のはじめに、古葉の紅葉して美しきものなり」とある。こゝに「正木のかづら色づきにけり」などあるによれば、常磐木ではないから、後說を可とする。されば名義も、常に綠色だから眞幸(マサキ)の意とする說は成り立たない。その莖を眞析(マサキ)に析いて、物に用ひるより出た名であらう。正木の借字であることは勿論である。

大意 奥山にはもう霰が降るらしいわ、なぜなれば、この外山にある正木の葛が色づいてきたわい。

評 外山の葛に、奥山の霰の排對である。かう外山に對へたのだから、「み山」もその本義より轉つて、奥山の意と聞きなされるのは、自然のことである。時雨ともいはず、霰を取り出したのは、殊にすさまじい山中の景氣を點出するに有効である。但こればかりの想像は、格別奇とするにも足りないが、氣韻が天成で、詞にすこしの塵垢がなく、及び難い高調である。神樂には、上のとおなじく葛に歌ふ。蓋し日蔭と眞析と竝べ歌ふのである。又、庭燎の時にもこれを歌ふ。紅葉の色を、燎の色によそへてゞあらう。

○

陸奥(ミチノク)のあだちの眞弓わがひかば末さへよりこしのびくに

釋 ○あだちの眞弓　あだちは今の岩代國安達郡である。延喜六年までは安積郡の一部で、安達郷であつた。こゝより良弓を貢したものであらう。萬葉には、あたゝら眞弓と詠んである。よつて思ふに、あたゝらの約つたあたらに、安達の字をあてたものか。達の字は、タルとよむから、タラにも通ふのである。さらばあたらの眞弓であらう。近藤芳樹も、安達の眞弓は、安達太郎(アタタラ)眞弓の唱へひがめなり」といつた。○末さへよりこ　「よりこ」は寄り來である。弓を引けば、本末が自分の身の方へ寄るものなので、寄せた。

大意 あの陸奥の安達の眞弓をひけば、本末がこちへ寄つて來るが、そのやうにあの思ふ人も、自分の引くまゝに、今は勿論末さへかけて靡いて寄れよ、人目に立たぬやうにサ。

評 初二句は序である。眞弓を借りての比喩と、「わがひかば」の辭樣とで、作者は男と知られる。執り馴れた弓によつて、その纒綿たる情思をつくして、その曲折に味ひがある。疎句を以て結束したのは、この卑俗に陷らぬ所以であらう。さて神樂では弓の歌である。二句、神樂譜天治本にあづさの眞弓、高野切、元本にあだしの眞弓、四句の「末さへ」を同譜にやうく、神樂歌祕抄には、やうやくとある。

○

わが門の板井のしみづ里遠み人し汲まねばみくさ生ひにけり

【釋】○板井　板を井筒とした井。○みくさ　水草。

大意　自分の門口の板井の清水は、里ばなれてあるので、人がサ汲まぬによつて、あゝ水草が生えてしまつたわい。

【評】眼前景致口頭語、平々敍し去つて、何となく風趣がある。但この歌を味ふ準備として、まづ往時の生活狀態を知る必要がある。井はこれ里を成すもとで、あの市井の語もこの意を表したものである。よい井戸があれば一里はうち寄つて汲んだもので、それ故門邊に井はわざと作つた。然るにこの寂しい一つ家の門井は水草が生えるまでに汲み手がない。折角の清水をとあたらしむ情が搖曳してゐる。神樂では、杓(ヒサゴ)の歌である。杓は水を汲む器だからであらう。

初句、六帖にわが宿の、結句、神樂譜に水さびにけり、同一本にみさびゐにけりとある。

ひるめの歌

さゝのくま檜のくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む

【釋】○ひるめ　天照大神を、紀に「大日孁貴(オホヒルメムチ)」と申すことが出てゐる。「ひるめ」とばかりでは、餘りに無禮で、體を得ない。けれど神樂譜にも、晝目歌の題目あれば、譜のまゝに書いたものと思はれる。藤原敎長が、大嘗會の米簸女(コメヒルメ)の歌なりといつたのは附會である。○さゝのくま　解し難い。この歌萬葉に、

左檜(サヒ)の隈檜(クマ)の隈川に馬とめて馬に水かへわれよそに見む（卷十二）

とあるを歌ひかへたものである。左檜の隈の「左」は接頭の美稱、「檜の隈川」は大和國高市郡檜隈鄕の小川で

大意　あの檜の隈川に駒をとめて、しばしその駒に水をお飼ひなされ、さらばその間もせめて、貴方の後影をなりとも見ようわ。

【評】初二句は、「檜の隈」を折り返して歌つたのを、辭樣が古體なので、後人その意を心得かねて、下の檜の隈に對して、上を篠の隈と思ひ誤つたらしい。旣に源氏物語葵の卷にも、「さゝの隈とも云々」と書いてある。

結句を、景樹が「聞えず」といつたのは、自分の聞き得ないのである。「影」を水に映つた影と思つたものか。これは、その後手(ウシロデ)の影である。混じてはいけない。後朝の空しめやかに袂をわかち、駒に扶け乘せられつゝ遠ざかり行く人の後影、歩一歩よりも小さくなつてゆく。惜しや名殘をしや、行手に流れる檜の隈川、あの人もし心あらば、そこにしばし駒に水飼つて、後影なりとも見せて下さいと誂へたのである。然し大きな距離があるのだから「しばし水かへ」といつた處で、先方に通ずる譯でもない。そんな尋常な道理などは、この熱情の前にはわからなくなる。否なくなつてしまふ。その痴意その情、實にいぢらしさに堪へない。更に氣分の上から見ると、「しばし」と限局したほど內輪につゝましやかな趣からは、結句も本文の通りがよい。われと力強い箇人的執着を表現することは無用である。萬葉の歌が傳誦の間に轉化されたに就いても、やはり時代の約束はのがれないで、平安朝の製作らしいものに變つてゆくのが面白い。

この歌必ず大日靈神の御祀に歌つたものならば、「影をだに見む」を、大神の御影をだに見たいと希つた意に擬へて歌つたものだらう。

結句、元本によそにだに見むとある。

かへしものの歌

青柳をかた絲によりてうぐひすの縫ふてふ笠はうめの花笠

釋 ○かへしもの　催馬樂に、呂の律になるを反聲（カヘリゴヱ）といふ。まづはじめに、「眞金ふく吉備の中山」などの呂歌をうたつて、その後、律にかへして、この青柳の歌をうたふので、この稱がある。これから以下は催馬樂の歌章である。○縫ふてふ笠　春上「鶯の笠にぬふてふ」の條に既出。○うめの花笠　梅の花を、笠に譬へていつた。

大意 青柳の絲を片絲に縒つて、それで鶯が縫ふといふ笠は、どんな笠かと思へば、梅の花笠であるわサ。

評 柳の條を、絲に譬へることは常套である。それを「片絲に縒る」といふは、風に片靡きする狀をながめての事であらう。「鶯の縫ふ」とは、今も彼方此方と筋違はしてあるくを、縫つて行くといふに同じく、鶯の枝から枝に木傳ひあるくをいふ。その縫ふといふ語の聯想から、笠は縫ふ物なので、この鳥は柳の絲して、梅の花笠を縫ふと巧みなした。「梅の花笠」は、花を飾つた笠或は派手な笠を、既に花笠といふ成語のある處から、それに「梅の」と冠らせたので、松の緑子と同一の辭樣で、作者の造語である。梅柳に鶯をあへしらひ、しかもこの笠縫の妙趣向さへ添へたので、すべて花やかに面白い。殊に陽氣な春の謠物として面白い。けれど「てふ」の語がどうも妥貼でない。この歌よりも以前に、鶯の縫ふと續けた古歌が必ずあつたので、それを承けたものと思はれる。はた又、もと縫ふなる笠はなどあつたのを、催馬樂に歌ふについて、調子にまかせて、「てふ」と歌ひかへたかといふ疑もある。さうした類例は謠物にまゝある。

○

まがねふく吉備の中山帶にせるほそたに川のおとのさやけさ

この歌は、承和（ソウワ）の御（オン）べのきびの國のうた。

釋 ○まがねふく　「ま」は美稱。「かね」は廣く金屬をさしていふ。舊註は鐵なりといひ、契沖は黃金なりといつたが當らない。「ふく」は、鞴（フイゴ）で鑛物を吹き分けるをいふ。「まがねふく」は吉備の枕詞に用ひてある。吉備の國には昔からおもに鐵を產する鑛山があつた。○吉備の中山　吉備は三備の總稱であるが、中山は備中國吉備郡眞金村にある。方角抄に、「備前備中の國境なり、吉備津の宮あり。山はさして高からず、松むら〳〵あり。今細谷川といふ水も、この山の腰なり」とある。○ほそたに川　細い谷川の意。川の名とするのは後世轉つたのである。卽ち木下長嘯子の九州紀行に、「細谷川のほとりに至りて、その水上にのぼりて見れば、小き池の中より、たえ〴〵いづる清水なりけり。水無月の頃にも絕ゆることなしとなむといへる。その谷川の廣さ、箪箕の長さばかりありけり」とあるは、それである。○左註にいふ承和は仁明帝の年號。御べは大嘗（オホニヘ）の轉訛である。續日本紀に、この御代の天長十年十一月の大嘗會に、「主基（スキ）の國備中、悠紀（ユキ）は近江」とある。その主基方の歌である。

大意 この吉備の中山が、山の腰に帶して居る一筋の紐と見える、細谷川の水の音のさわやかさよ。

評 萬葉集卷七、

おほ君の三笠の山の帶にせる細谷川のおとのさやけさ

の初二句をかへて、大嘗會の主基の備中國の歌としたのである。眼目は「帶にせる」の一句にある。山の腰といふよりの聯想らしい。昔の帶はその幅が狹くて、殆ど紐のやうな物であるから、細谷川をば帶と見るは自然

で、歌の姿も調も細くさやかである。

〇

これは、水のをの御べの美作國のうた。

みまさかや久米のさら山さら〳〵にわが名はたてじ萬代までに

〔釋〕〇みまさかや「や」は間投辭。〇久米のさら山　美作國久米郡佐良山村。もとの久米南條郡佐良莊にある山である。〇さら〳〵に　新にといふに近い。今の俗にいふとは意がかはつてゐる。〇左註の水のをは清和帝の御號。三代實錄に「貞觀元年十一月大嘗會、悠紀三河國、主基美作國」とある時で、卽ち主基方の歌である。

大意　美作の久米の皿山の名のやうに、今更に自分の戀するといふ名は立てまいぞ、それは何時までもサ。

〔評〕これも、古くさうした歌のあつたのを用ひられたらしい。すると上の「吉備の中山」のやうな具合に、初二句の序の如きは、或はこの場合にかなふやうに、歌ひかへたのかもはかり難い。四句までは戀歌のやうで、結句が全く殊つた趣である。四句は催馬樂に、わが名はたえじとある。これはわが名は萬代までもいひ繼がれようの意だから、戀歌ほどの不調和さはない。しかしもとはやはり戀歌であらう。「さら山さら〳〵に」のさわやかなの語響の反復は、この歌に頗る陽氣な快感をもたせる。催馬樂に謳はれたのも、さうした理由がその一因をなしてゐると思ふ。

〇

これは、元慶の御べの美濃のうた。

みののくに關のふぢ川たえずして君につかへむ萬代までに

〔釋〕〇關のふぢ川　美濃國不破郡の不破の關を流れる藤川。今、藤子川といふ。小島の口遊に「關の藤川は、その名もなつかしければ、言問ひ侍りし。名はこと〴〵しければど、さしもなき小川にて、萬代までの流ともわかれず。されど絕えぬためしはいと賴もしくて、云々」。〇左註の元慶は陽成帝の年號。三代實錄に「元慶元年十一月大嘗會、悠紀美濃國席田郡。主基備中國都宇郡」と見え、卽ち悠紀方の歌である。

大意　美濃の國の關の藤川の流の絕えずしてあるやうに、我等も君に仕へ奉らうわ、萬年までもサ。

〔評〕この御時のは席田郡であるのに、不破郡の關の藤川を詠んである。眞淵はこれを訝つて「席田郡にも關の藤川あるか」といつたのは、一往尤もである。地理的思想の缺如せる時代の歌人だから、或は詠みそこねがないとも測られないが、なほ思ふに、これは大やうに美濃の國の歌として詠んだのであらう。下句、平凡ではあるが古調である。上句は或は作りかへたものか。元慶はこの集撰者達の未生以前であるが、時代も近いし、況や大嘗會は頗る重い儀式だから、その作者が記錄にない筈がない。これらの點から見ても、その古歌の轉用であることが諾かれよう。

〇

これは、仁和の御べの伊勢のくにのうた。

君が代はかぎりもあらじ長濱のまさごの數はよみつくすとも

釋 ○長濱　伊勢國員辨（ヰナベ）郡。○よみ　數をよむは卽ち數へることである。○左註は三代實錄光孝帝の大嘗會に、「元慶八年十一月、悠紀伊勢國員辨郡、主基備前國和氣郡」と見え、これは悠紀方の歌である。

大意　君の御代は、何時までといふ限りもあるまい、名さへ長濱といふこの濱の眞砂の數は、たとひ數へつくすといふともサ。

評　序文にひいた「わか戀はよむともつきじありそみの」とある歌の下句は、これに同じい。又、賀部「わたつ海の濱の眞砂を數へつゝ」と、著想が同じである。あの歌から奪胎したのであらう。詞もうるはしく、聲調も滑らかとなつた。たゞその格調が卑くなつてくるのは、やむを得ない。「長濱」は固有名詞であるが、長の意がいよ〳〵眞砂の無數なことを象徵する。なほ賀の「わたつ海の」の條の評を參照されたい。

又、續後拾遺集に、仁和の御時の大嘗會の悠紀方伊勢國風俗歌「伊勢の海の渚を淸み云々」を擧げて、作者を大伴黑主とあるので、契沖は、これをも黑主の歌と定めた。

あふみのや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君が千年は

おほとものくろぬし

これは、今上の御べ（ン）のあふみの歌。

釋 ○あふみやのや「や」は間投の辭。○左註の今上は醍醐帝。その大嘗會は寬平九年十一月。この頃は、悠紀には、近江の國を用ひられる定例となつた。

大意　近江の國にまあ、鏡山といふ山が立てゝあるによつて、前以てサよく見えるわ、君が御代の千年で御座ることは。

評　鏡によつた著想は、雜上、鏡山いざたちよりて見て行かむ年へぬる身はおいやしぬると同じて、これはやゝ鏡を重く取りなして、山をたてたと擬態的にいつたのが面白い。鏡は立てゝ見るものだからである。作者は近江の國で歌詠むといはれた人なので、この風俗歌仕うまつつたものと見える。上の御べの歌ども皆作者の名がないのに、こればかりあるのは、全く當代の事ではあり、作者もたしかだからである。蓋しこの歌の外は皆古歌を取り繕つて仕立てたものらしいから、作者と名づくべき作者はないのである。

東　歌

みちのくうた

あぶ隈に霧たち渡り明けぬとも君をばやらじまてばすべなし

釋 ○東歌（アヅマ）　東國の歌の義。この東國は廣義の東國である。これも諺物に用ひられたのである。○あぶ隈　あぶくま川。阿武隈、阿福麻、逢隈の字をあつ。源を磐城に發し、岩代を横流して、陸前の亘理郡に至つて、海に入る。

大意　阿武隈川に霧が立ち渡つて、夜が明けたりとも、思ふ人をばやるまいぞ、やつてしまつて、又來るまでを待てば、その間が何とも仕方がないわ。

評　「霧たち渡りあけぬ」は夜明の景色で、川波の上などには、わけても霧の立ち渡るものである。男が女の家か

ちは、なるたけ曉に早く歸るのが、この時代の常習慣で、女の飽かぬきぬ〳〵の別をつらがる餘り、曉はさておき、あの逢隈の川に霧が白く見えるほどの朝になつても貴方は歸すまいといふ。この聞分ない無理解が、男に取つては又實にあり難い情合なのである。況や結句の「まてばすべなし」の單句、實に千鈞の力がある。戀に上氣せた女心の術なさが見え、その鼻聲にダ、を揑ねて甘へてゐる態度が目に見るやうで、爲に全首無窮の情味が涌いてくる。龍尾一たび掉へば鱗甲悉く竪つといふにちかい。四五の句ゝ韻を踏んで排對じたのは、諧調であるのみならず、その響が凄涼で、沈痛の感を搖曳せしめる効果がある。定家の密勘に、「凡此部歌、與二日月一懸、與二鬼神一爭レ奥、非二短慮所一レ及」と激稱したのは、流石に一隻眼を有つてゐる。

二句、今本にたちくもりとある。本文は一本の方に從つた。四句、六帖にせなをばやらじとある。東歌としては、東國の俗語たるせなを用ひる方が面白い。勢語にも、陸奥の女がせなと詠んだ歌がある。

○

みちのくはいづくはあれど鹽竈の浦こぐ舟の綱手かなしも

釋 ○いづく　いづこと同意に使つた。○綱手かなしも　綱手は、こゝでは曳舟の綱をいふ。「かなし」は、感哀の甚しさをいふ語で、こゝは面白さの感興をひくをいふ、悲しの意ではない。「も」は歎辭。

大意 奥州は、どこにも面白い所があるけれど、別して この 鹽竈の浦を漕ぐ舟の綱手を曳いてゆく景色が、面白いことであるはまあ。

評 思ひやつて見れば、誠に面白い景色である。しかし、その詩境の内容の敍寫を怠つて、輪廓をのみ擧げたのは慊らない。

六帖に、二句いづこはとある。又四句を籬が島のとあるはわるい。

○

わがせこを都にやりてしほがまの籬の島のまつぞこひしき

釋 ○籬の島　鹽竈の浦にある島嶼の一。○まつ　松に待つをかけた。

大意 わが夫を都へ出しやつて、何時戻られることかと、鹽竈の浦の籬が島の松といふ名の、待つて居ることがサ、さても〳〵戀しいことであるわ。

評 陸奥女の閨愁をのべたものである。三四の句は、「待つ」にかゝる序ながら、「都」との對照があつて、一別千里、兩地空しく相思ふ趣も見えるやうだ。殊に誘惑の多い都に大事な人を遣つた事は、甚しい不安で、餘計に待ち焦れる心持が見える。惜しいかな、「戀しき」は露骨で、又安當でない。されば、同想の同型なる萬葉巻十四、

わがせこをやまとへやりて驂刺足柄山の杉の木のまかに遠く遙る。「籬が島の松ぞ」の彫技の如きは、何でもない。

結句、六帖にまつは苦しもとある。

○

をぐろ崎みつのこじまの人ならば都の苞にいざといはましを

釋　○をぐろ崎　陸前國玉造郡川渡村に小黑崎といふ地がある。或はそれか。○みつのこじま　三つの小島。小黑崎を同上の地とすれば、そこの江合川の川中に同名の島があつたが、明治四十三年の洪水に流失した。

大意　あの小黑崎にある三つの小島が、もし人であるならば、京へのみやげに、さあ來いといつて連れようものを、人でない故それもならぬが、殘念であるわ。

評　この面白い景色を、こゝに遺して置くのは惜しいことよの餘意がある。この餘意を、諸註都人に見せたしとまで解いたのはいひ過ぎてゐる。小黑崎三つの小島、どんなにかいゝ景色であつたらう。島を土産にしようの著想、何といふ詩的であらう。「人ならば」は分別に住する嫌ひもあるが、人ならぬ故いざともいひ難いの意を反襯して、苞にも出來ぬ歎聲を深からしめる。すると却つてこれが主眼の句で、一首の性命は、全くこゝに係かつてゐる警語となる。作者は京人であるに違ひない。伊勢物語に、

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

の條で、田舍女の人らしくないので、連れても歸れないのを歎じた趣に作つたのは、例のこの物語の常套で、こゝの趣には不用なことである。

○

みさぶらひ御笠とまをせ宮城野の木の下露は雨にまされり

釋　○みさぶひ　御侍よの意。御侍は貴人の家來をいふ。○御笠とまをせ　御笠を召し給へと申せの意。○宮城野　戀四「宮城野のもとあらの小萩」の條に既出。

大意　御家來衆よ、それお笠をお召しなされと申し上げられよ、この宮城野の樹蔭の露は滋くて、雨よりもきつう御座るわ。

評　まことに宮城野は仙臺市の東のはづれの原野で、今も木茂き昔の俤の一部を殘してゐる。いにしへの木の下露は、いかにも滋かつたものだらう。鄙には珍しい狩衣姿の貴人、指貫のそば取り給ふもたゆげに、野を分けわびさせ給へるに、御笠もち、御馬曳きつれた侍共、萩の露ふみしだきつゝ出て來る光景は、宛たる一幅の畫ではないか。蓋し守の殿の御出遊であらう。この歌の口氣で推すると、作者はその御行列を拜みに出たみちく人であらう。「露は雨にまされり」といふは既に誇張なのを、更に御笠を取り出して、そを事實にしたのは、空中樓閣に金碧を粧成したものである。この妙不可思議力、何人か魅せられぬものがあらう。初二三句に、ミの頭韻を戴いたのは、故意か無心かは知らぬが、聲調の諧ふことは事實である。

○

もがみ川のぼればくだる稻舟のいなにはあらずこの月ばかり

釋　○もがみ川　羽前の大河で、最上郡に入つて、この名がある。下流は酒田の港に注いで酒田川と呼ぶ。○稻舟　刈稻を積んだ舟で、これは正税を國衙に運ぶ舟である。いにしへは、稻何束といつて、穗付のまゝその正税を納めた。○いな　否。○この月ばかり　下に待ての語が略かれてある。

大意　最上川をのぼるもあれば、くだるもある稻舟の名のやうに、否といふではない、しかし、この月中だけは

障があつて、逢はれませぬわ、お待ち下さい。

評 最上川は日本三急流の一と稱される。さうした河上を秋冬の交、正税の稻舟が追ひすがひ、國府まで上りくだるさま思ひやられる。さてそれを序とした。急流だから上れば忽ちくだるの意と見てもわるくないが、事狹くて、をかしくない。元來稻舟のいなを反復するのが主だから、いづれにしても「のぼればくだる」は輕く見るがよい。さてかう反復した序が「いなにはあらず」の意を強く表示し得て、相手方の心を取るに、十分の力がある。まづ一度肯諾の意を表して置いて、さて本題に入つて「この月ばかり」は否と表裏の落着を見せた紆餘曲折の妙、殆ど言語に絕してゐる。結句の造語頗る簡淨である。なほ思ふと、「この月」は婦人の月事を下に含んだものか。さらばこの障を過してのち逢はうの意となる。これは試にいふのみ。又、全首の語調が、いたく促迫してゐるのに注意されたい。音數の排列を案ずると、

初句(三二)、二句(四三)、三句(四一)、四句(四三)、五句(四三)

といふ組織で、句々促調でないのはない。この急き込んだ調子は、男にさらばなど怨みられて、あわてゝ辨疏した趣に聞きなされる。

○

君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山波もこえなむ

釋 ○あだし心　空々（アダ）しい心。○すゑの松山　冬「浦近くふりくる雪は」の條に旣出。なほ思ふに、陸前國桃生郡に、須江といふ山村がある、海岸を距ること一里半ばかり。以前陶物（スヱモノ）造りの居つた所で、もとは、すゑといつたのを、いつか假名の違つたのであらう。果してそこなら、波をいふにも由緣がある。

大意 貴方をさしおいて、他心（ホカ）を私が持つたら、その時こそこのすゑの松山を、浪も越える事がありませう。

評 間違つてもすゑの松山を波の越すことはないから、私が仇し心持つこともないと御承知下さいの餘意がある。「波も」は、人の越えるに對へた。すべて盟誓には、常住な事物を提擧して、不渝不變の意を立證することが常手段である。山厲河帶の語は勿論、日本紀に、新羅人の誓に「東の日西に入り、あれなれ川のさかしまに流る時まで渝らじ」といつたのも同じい。男の方から異心でもあるかのやうに疑つて來たのに對して、いえ決してそんな事はと、眞實をうち明けた貞潔の語で、すでに情の美に禁へぬうへに、「波もこえなむ」の婉語を加へた。「君を」と「わが」の相對は貼密過ぎるが、非常に切なる深い情愛を見せるには有力である。絕唱。

結句、元本にこしてむとあるはわるい。

さがみうた

小よろぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ波

釋 ○小よろぎの磯　雜上「玉だれの小瓶やいづら」の條に旣出。○たちならし　踏み平（ナラ）すこと。○磯菜　磯つきの海草をすべて稱する。○めざし　髮を切禿にした兒女の稱。髮が短くて目を刺すほどなのでいふ。籠の名とするのはわるい。○をれ　居れの命令格。折れの意では無い。

大意 小淘の磯に出て、あちこちとあるいて磯菜を摘む、あの子供を濡らすな、これ浪よ、さう磯へ立つて來ずに沖の方に居なさい。

評 海人の子供が磯わたりして、若布（ワカメ）など摘むさまの面白く、寄せて來ては碎け散る波に濡れなどする樣の、あぶなさうにも可愛さうにも見えるので、そちらに退き居れと、波に命令した擬人のあつかひ、凡想を超えたもので、いかにもやさしい情緒がほの見える。詩境また畫である。「磯」の重複などは問題にならない。

ひたちうた

筑波根（ツクバネ）のこのもかのもに蔭はあれど君が御蔭（ミカゲ）にます蔭はなし

釋 ○筑波根　雜下「つくばねの木の下毎に立ちぞよる」の條に既出。○このもかのも　此面彼面。あなたこなたといふと同意に用ひる。○御蔭　お惠の蔭の意。俗にいふオカゲに同じい。

大意 筑波山のこなたおもてにも、あなたおもてにも、木の蔭はおびたゞしくあるが、お惠のあつい君のお蔭にまさる蔭はないわ。

評 筑波山は關東の平野に特立して、四方からその山容を仰ぎ得られることは、なほ芙蓉峰の八面玲瓏たるに似てゐる。されば、彼れには彼方おもて此方おもてをいひ、此れには「このもかのも」をいつてゐる。景樹が、「女神男神とて、同じさまなる高根の立ち並びたれば、このもかのもといへり」と解いたのは、この實境を知らないからである。この山、奈良時代には鷲さへかゞないた木繁（コシゲ）き山で、今も樹木鬱蒼たる所なので、「蔭」を取り出したので、君の御蔭から、筑波の樹蔭を聯想し、この同音異意義の二語を全然混同して比較した沒理趣が、詩味の素を成してゐる。遂に「ます蔭はなし」の斷案を下すに至つて、いよ〳〵詩的である。「このもかのも」の疊音、「蔭の」語の三疊は、いよ〳〵諧調となつて、聲響またよろしい。

○

筑波根の峰のもみぢ葉おち積りしるもしらぬもなべてかなしも

大意 この筑波嶺の紅葉が、麓に落ち積つたのが、面白くてをしまれるやうに、誰れ彼れなしに、悉く親しく愛せられるはまあ。

評 上句は「かなしも」へかゝる序であるといふ宣長の說に從つておかう。但この歌のみでは、事相漠然たる感がする。しひて評しない。

かひうた

かひがねをさやにも見しがけゝれなく横ぼりふせるさやの中山

釋 ○かひがね　甲斐が嶺。甲州の山を稱する。○さやに　鮮かにの意。○しが　願望の辭。○けゝれ　こゝろの轉訛。東國の方言である。金槐集に、けゝれ木とよみ、甲斐人は、今も九日をケ、ヌカといつてゐる。○横ほりふせる　横たはり臥せるの意。これも東國の訛言であらう。○さやの中山　今、さよの中山といふ。遠江國小笠郡、日坂峠と金谷峠との間、もとの佐益（サヤ）郡のなからにあつたので、この名がある。

大意 故鄕の甲斐が嶺をば、ありありとあざやかに見たいわ、それに心もなく、あのやうに横たはり臥して、目の前をふさいで居る佐夜の中山であることよ。

評 都にのぼる甲斐人の、遠江まで來て、故鄕の方を振り返つて見たのか、それともまた都から歸つた甲斐人がこゝまで來て、故鄕を望んだのか、それはまあいづれでもよい。空谷の跫音、わづかに一片の山影を望んでも、望鄕の歎を醫するに足るは、そこが人情である。それを、佐夜の中山が横ほり臥して、恰も墻に向つて立つてゐるにひとしい。こゝに至つて、佐夜の中山を「けゝれなし」と罵らざるを得ない。舌だみた往時の甲斐人の風貌が眼に見えるやうだ。

三句、高野切にけゝらとある。四句、顯註に、一本横ほりくせる、又の一本横ぼりこせるとあると見えた。ともに「ふせる」の訛で、心をけゝれといふ類の甲斐の方言と思はれるから。元本横ほりこやるとある。

○

甲斐がねをねこし山こしふく風を人にもがもや言[コト]づてやらむ

釋 ○ねこし　嶺越し。「越し」はあなたへも此方にもかけていふ。萬葉集巻一に「山越の風を時じみぬる夜おちず」とあるは、こゝとは反對に此方に越すのである。○人にもがもや「がも」は願望の辭。「や」は歎辭。

大意 峰をも越し山をも越して、甲斐が嶺を吹いてゆく風を、どうぞ人にしたいものだわ、さらば、都へ言傳をしてやらうに。

評 京より下り居る地方官吏などの作か。日夜鄕愁に禁へず、さりとて音問の便りを出す傳[ツテ]さへなくてわび居る時、たまく山風が重疊した峰巒を吹きならしつゝゆくのを見て、風の便りを思ひ寄り、「人にもがもや」と歌ひあげた。郵便制度のある今日とちがひ、往時は音書の交通が非常な不便で、一々使を仕立てるか、或は幸便に托するかであつた。地方にもよりけりで、それが甲斐のやうな殊に不便な山國に入り込んでは、いよく思ふに任せぬ次第で、反比例に鄕愁は高まつてくる。向ふへゆくものなら風でも何でも言傳が賴みたい、如何にも迫つた心持が出てゐる。二句の漸層、つぎく吹き渡る山越しの風の趣が出て、甚だ妙である。上の「三つの小島の人ならば」と同工の點もあるが、彼れは一時の逸興、これは永久な沈痛の響で、情味の長い點においてはこれが勝り、尖奇でよく人頤を解くは、彼れに及ばない。

いせうた

をふの浦にかたえさしおほひなる梨のなりもならずも寢て語らはむ

釋 ○をふの浦　所在がたしかでない。顯註に、「志摩の國にあり。齋宮の御庄にて、梨を獻ずる所なり。伊勢志摩といひて、一つによめり」とあるに、姑く從ふ。○なりもならずも　成否の意で、嫁娶の定まるをなるといふ。梨の結實[ナル]をかけた。

大意 麻生[ヲフ]の浦に、片枝さし覆うてなる梨があるが、その梨のなるといふやうに、其方と自分も、表向の相談のなるならざるはともかくもまあ、一所に寢て話をしようわ。

評 地方的色彩と土俗的情調が動いて面白い。「寢て語らはむ」は、女の方で、貴方の思召はあり難いが、とてもこの緣は邪魔があつて成立の見込がありませんからなど、一應拒んだのを、貴女と私とさへ承知なら、そんな事は寢ての上の話と、一徹らしい男の氣持を現はしたものである。詞づかひは「なり」の三疊などで頗る調子がいゝ。上句は序であつて、「なり」にはかゝるが、「ず」にまではかゝらない。

冬の加茂のまつりのうた　　藤原敏行朝臣

ちはやぶる加茂のやしろの姫小松よろづ代ふとも色は變らじ

釋 ○冬の加茂のまつり　十一月の臨時祭をいふ。加茂は四月が例祭である。十一月の臨時の祭を始めたのは寛平元年で、左近中將藤原時平朝臣を御使として、藤原敏行に東遊の歌を詠ましめられた事が、寛平の御記に見えてゐる。大鏡にも、これについての傳說を載せた。下の未の日試樂、下の酉の日にこの祭がある。加茂は下上二社があつて、下社は鴨高野兩水の合流點糺にあり、上社は更に鴨川の上流一里弱の神山にある。平安時代以降、祭といへば加茂祭の事となつた程で、平安京第一の官祭として頗る盛儀を極めたものであつた。

大意 この御神威のあらたかな加茂の社の御前の姫小松は、このうへ萬年を經るにしても、色は變りはすまいわ。

評 かやうな御神德で護らせ給ふ君の御うへは、申すまでもないの餘意がある。眞淵のいふ、「歌は、いさゝかも隱れたる事なく、且滯りたる所なく、詞は、まどかなる玉を見るが如し。この卷の終に置かるべき歌なり。そのうへ、今上の御父帝の、神の御告にて始め給へる祭の歌にて、限りなき御よろこびの事なれば、この卷のとぢめにせらるゝなり」と評したのは適評である。

この歌寛平御記によると、東遊曲に歌つたとある。東遊の歌は從來用ひた求子やその他の歌が澤山あるが、特に新作の歌を、はじめての臨時祭の記念として作らしめられたと見える。作者敏行の名譽思ふべしである。二句、顯本、高野切、元本にかもの祭のとあるがよくない。

家々稱證本之本乍書入以墨滅歌今別書之

○これは、諸家藏の證本たるべき善本に書き入れられながら、墨で以て滅してあつた歌を抜書したのである。定家卿がこの校定本を作る時の所爲であるといふ。畢竟、證本といつてからが猶、まち〳〵で誤など多かつたに相違ない。まことに滅してよいのも見え、又滅してはどうかと思ふのも見える。「我妹子にあふ坂山のしのすすき」及び以下の歌どもは、必ず除くがよい。

○この部は釋のみを與へて、評語を多くははぶく事とした。

卷第十（物名）

ひぐらし　　つらゆき

杣人は宮木ひくらしあしひきの山のやまびこよびとよむなり

在郭公下空蟬上

釋 ○杣人　材木を樵る山を杣山といひ、樵る人を杣人といふ。○宮木　大宮を造るに用ひる木材の稱。

評 この歌は、本集中の或者に優ること數等。この人の作中でも、いゝ方であらう。

勝臣

かけりても何をかたまのきても見むからは焔となりにしものを

をかたまの木　友則下

釋 ○たま　魂。○から　亡骸（ナキガラ）。

くれのおも　　　つらゆき

こし時とこひつゝをれば夕ぐれのおも影にのみ見え渡るかな

忍草　利貞下

釋 ○くれのおも　和名鈔に、「懐香、一名懐芸、和名、久禮乃於毛（クレノオモ）」とある。○こし時　思ふ人の來し時。

おきのゐ　みやこじま　　　をののこまち

おきのゐて身をやくよりも悲しきはみやこ島べの別なりけり

からこと　清行下

釋 ○おきのゐ　○みやこじま　いづれも所在不明。伊勢物語に、「昔、みちのくにて云々、おきのゐみやこじまといふ所にて」とあつて、この歌がある。これは一處のやうに聞える。物名にかく詠むからは、おの〳〵別の處かも知れない。陸奥とあるも覺束ない。○おきのゐて　燠火（オキ）の著きゐて。○みやこ島べ　或は地名でなくて、都と島邊との意か。

意によつてついでると、誹諧の部に入るべき作である。

そめどの　あはだ　　　あやもち

うきめをばよそめとのみぞ遁れゆく雲のあはだつ山の麓に

此歌は、水の尾のみかどの、染殿より粟田へうつりたまうける時によめる。桂宮の下

釋 ○そめどの　染殿は拾芥抄に、「正親町北、京極西二町」とある。忠仁公藤原良房の第であつたのを、清和帝外宮とせられて、貞觀十八年に行幸があつた。○あはだ　京都の三條より、逢阪山の方へ出づる所に、粟田山がある。○あはだつ　淡々しく浮き立つこと。○左註は、三代實錄、元慶三年五月四日の條に、太上天皇（清和帝）清和院より粟田院へ移り給ふと見えた時の事で、水の尾のみかどは清和天皇の御事。清和院は染殿とおなじと。

巻第十一（戀一）

「奥山の菅の根しのぎふる雪」の下

けふ人をこふるこゝろは大井川ながるゝ水におとらざりけり

釋 ○大井川　山城のである。

三四句、宗于集に、飛鳥川流るゝみをにとある。みをとあるが「水」より印象が鮮明である。

わぎもこにあふ坂山のしの薄ほにはいでずもこひわたるかな

評 ○わぎもこにあふ坂山　逢ふに、相坂をかけた。上句は序である。萬葉卷十一、

わぎも子に相坂山のしのすゝき穗には咲き出ず戀ひ渡るかも

の訛つたものであらう。

卷第十三（戀三）

「こひしくば下にを思へ紫の」の下

犬がみのとこの山なるいさや川いさと答へよわが名もらすな

此歌は、ある人、「あめのみかど、淡海（アフミ）の采女にたまへる」と。

釋 ○犬がみのとこの山　近江國犬上郡鳥籠山。○いさや川　犬上川のこと。○いさ　不知（イサ）の意。○左註の「あめのみかど」は聖武帝を申す。舊註には天智とある。

評 上句は序で、もし人が問はばいさ知らずと答へよ、わが名を知らすなの意である。萬葉卷十一、詠者不詳、

狗上の鳥籠（トコ）の山なるいさや河いさとをきこせわが名のらすな

の訓みちがへ否時調に轉化したもので、意は違はない。上句は序であるが、恐らく近江人ことに犬上人の作であらう。左註は據のない浮說である。

かへし

うねべの奉れる

山しなの音羽の瀧のおとにだに人のしるべくわが戀ひめやも

釋 ○戀三に、「音羽の山の」とあるを、「瀧」とかへたるのみ。

卷第十四（戀四）

「思ふてふ言の葉のみや秋をへて」の下

そとほり姬のひとりゐ、みかどを戀ひ奉りて

わがせこが來べき宵（ヨヒ）なりさゝがにの蜘のふるまひかねてしるしも

釋 ○そとほり姬の云々　日本紀允恭紀に、天皇、衣通姬（ソトホシヒメ）を藤原の宮に住ませ給ひて、また〳〵行幸ありて、姬のおはすやうを伺ひませるを知らで、この御歌よませ給へると見えた。但、三句以下「さゝがねの蜘のおこなひこよひしるしも」とある。○ふるまひ　擧動。さて、「蜘の出てくるは、人の來る前兆」といふ諺によつての作である。この事、戀五「今しはと思ひしものをさゝがにの」の條にいつた。しば〳〵說明した如く、わが邦の結婚上の慣習として、男が女の許に通ふのがそのはじめであり、又普通であつた。こゝも帝のお出をお待して、蜘蛛の吉兆に衣通姬の鼠啼をなされたお作である。

「戀しとはたが名づけけむことならむ」の下

道しらばつみにも行かむ住のえの岸におふてふ戀わすれ草　　貫之

【釋】○戀わすれ草　諼草に、戀と冠せたのは、人忘草、憂さ忘草の類である。萬葉巻七、「いとまあらば拾ひてゆかむ住の江の岸によるとふ戀わすれ貝」を、すこし換へたのみで、この作者のしわざとも覺えない。

古今和歌集序

紀淑望

夫和歌者、託其根於心地、發其花於詞林者也、人之在世、不能無爲、思慮易遷、哀樂相變、感生於志、詠形於言、是以逸者其聲樂、怨者其吟悲、可以述懷、可以發憤、動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和歌、和歌有六義、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌、若夫春鶯之囀花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、各發歌謠、物皆有之、自然之理也、然而神世七代、時質人淳、情欲無分、和歌未作、逮于素戔嗚尊到出雲國、始有三十一字之詠、今反歌之作也、其後雖天神之孫、海童之女、莫不以和歌通情者、爰及人代、此風大興、長歌、短歌、旋頭、混本之類、雜體非一、源流漸繁、譬猶拂雲樹生自寸苗之煙、浮天浪起於一滴之露、至如難波津之什獻天皇、富緒川之篇報太子、或事關神異、或興入幽玄、但見上古之歌、多存古質之語、未爲耳目之翫、徒爲教戒之端、古天子每良辰美景、詔侍臣預宴莚者獻和歌、君臣之情、由斯可見、賢愚之性、於是相分、所以隨

民之欲、擇士之才也、自大津皇子之初作詩賦、詞人才子、慕風繼塵、移彼漢家之字、化我日域之俗、民業一改、和歌漸衰、然猶有先師柿本大夫者、高振神妙之思、獨歩古今之間、有山邊赤人者、並和歌仙也、其餘業和歌者、綿綿不絶、及彼時變澆漓、人貴奢淫、浮詞雲興、艷流泉涌、其實皆落、其花孤榮、至有好色之家、以之爲花鳥之使、乞食之客、以之爲活計之媒、故半爲婦人之右、難進丈夫之前、近代存古風者、纔二三人、然長短不同、論以可辨、花山僧正、尤得歌體、然其詞華而少實、如圖畫好女、徒動人情、在原中將之歌、其情有餘、其詞不足、如萎花雖少彩色而有薰香、文琳巧詠物、然其體近俗、如賈人之著鮮衣、宇治山僧喜撰、其詞華麗而首尾停滯、如望秋月遇曉雲、小野小町之歌、古衣通姫之流也、然艷而無氣力、如病婦之著花粉、大友黒主之歌、古猿丸大夫之次也、頗有逸興而體甚鄙、如田夫之息花前也、此外、氏姓流聞者、不可勝計、其大底、皆以艷爲基、不知歌之趣者也、俗人爭事榮利、不用詠和歌、悲哉、雖貴兼相將、富餘金錢、而骨未腐土中、名先滅於世上、適爲後世被知者、唯和歌之人而已、何

者、語近人耳、義慣神明也、昔　平城天子詔侍臣、令撰萬葉集、自爾以來、時歷十代、數過百年、其後、和歌棄不被採、雖風流如野宰相、輕情如在納言、而皆以他才聞、不以斯道顯、伏惟　陛下御宇、于今九載、仁流秋津洲之外、惠茂筑波山之陰、淵變爲瀨之聲、寂々閉口、砂長爲巖之頌、洋々滿耳、思繼既絶之風、欲興久廢之道、爰詔大內記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河內躬恒、右衞門府生壬生忠岑等、各獻家集並古來舊歌、曰續萬葉集、於是、重有詔、部類所奉之歌、勒而爲二十卷、名曰古今和歌集、臣等、詞少春花之艷、名竊秋夜之長、況乎、進恐時俗之嘲、退慙才藝之拙、適遇和歌之中興、以樂吾道之再昌、嗟呼、人麿既沒、和歌不在斯哉、于時、延喜五年歲次乙丑四月十八日、臣貫之等謹序。

（上文は、本朝文粋によつて是正した）

作者列傳

▽本傳は、すべて、作家の氏を捨てゝ、名によつて次第した。氏名なきものは、官名、或は稱呼を、もとのまゝに掲げた。

▽體裁の統一上、その事蹟の詳密に知られた人も、なほ簡約にしたがつた。

▽排列の次第は五十音圖の順によつた。

あ

あきみね　秋岑
美濃守紀壽岑の子、六位。

あさやす　朝康
文室康秀の子。延喜中、大舍人大允、大膳少進を歷任す。文室を文屋と書くは通用。

あつゆき　篤行
平氏。從五位上與我王の二子。寛平五年、文章生に補せられ、大和伊勢の掾より、國司を歷任して、筑前守兼大宰少貳に至り、延喜十年正月卒す。

あつゆき　淳行
伊香（イカゴ）子氏。傳は未詳。

あまねいこ　洽子
參議春澄善繩の女。貞觀の頃、正四位下典侍となる。

あやもち
傳未詳。

ありすけ　有輔
御春氏。延喜中、左衞門權少志、同權少尉となる。藤原敏行の家人にて、河内の人とぞ。貫之の集に、兼輔の兵衞佐が、加茂川の邊にて、この人の甲斐へゆく餞宴をせしこと見えたり。

ありすゑ　有季
文室氏。三代實錄貞觀五年三月の條に、「散位從五位上文屋有眞爲二下總守一」とあり。有眞は、訓アリマなるべし。さて、マの平假名、末の字の草なれば、有末と書けるを誤りて、更に有季としたるか。

ありつね　有常
正四位下紀名虎の子。性淸警にして、儀望あり。少時仁明帝に侍奉したりき。官從四位下周防權守にいたり、元慶元年正月卒す。年六十三。

ありとも　有友
又有朋。紀氏。仁明、文德、淸和、陽成の朝に仕へ、從五位下宮内少輔となり、元慶四年卒す。

い

いうせん　幽仙
右近將監藤原宗道の子、寛平七年律師となる。昌泰三年入滅す。仁和寺を建立して、別當たり。もと慈覺大師の弟子たりしにより、昌泰二年、延曆寺の別當になさる。

いせ　伊勢
伊勢守藤原繼蔭が女。七條后の宮人たる時、藤原仲平に通じ、又、宇多帝に寵愛せられ、寛平の末、皇子を誕すといふ。帝、位を退く時、伊勢また退きて、五條の里第に居り、敦慶親王等と通じて、女中務を生む。歌は當代女流の第一人なり。

いなば　因幡
因幡守基世王の女。基世王は、二品仲野親王の子なり。

いまみち　今道
布留氏。淸和、陽成、光孝、宇多の朝に歷任し、仁和元年造酒正に、昌泰元

年三河介に任ぜらる。

う

うつく　寵

（くらを見よ）

うりんゐんのみこ　雲林院親王

仁明帝の皇子常康親王これなり。母は紀名虎の女種子。仁壽元年出家、貞觀十一年五月薨ず。雲林院は、この親王、その別業をすて、遍昭に付囑して、寺とせしところなれば、この號あり。

お

おきかぜ　興風

參議藤原濱成の曾孫、院藤太と號す。延喜のはじめ治部少丞、上野大掾、下總權大掾、同十一年相模掾に任ぜらる。彈琴の師たり、管絃を能くす。

おと　乙

遠江介壬生益成の女。益成は、元慶仁和の代の人なり。

おほより　大頼

三代實錄、元慶元年の條に、石川朝臣箭口朝臣等奏して、先祖の蘇我氏の稱に返りて、並に宗岳朝臣を賜はること見えたり。さては、宗岳はソガと讀むべく、ムネヲカとは訓むべからず。大頼は算博士なり。

か

かげのりのおほきみ　景式王

四品惟條親王の後なり。寛平九年、從四位下に叙せらる。

かちおん　勝臣

藤原氏。元慶七年阿波權掾に任ぜらる。

かねすけ　兼輔

右近中將藤原利基の子にして、兼茂の弟。從三位中納言に任ぜられ、承平三年二月薨ず。年五十七。加茂川の堤に家居せしより、世に堤中納言と呼ばる。

かねみのおほきみ　兼覽王

仁明帝の孫、國康親王の御子。神祇伯宮內卿正四位下にいたる。承平二年卒す。

かねもち　兼茂

右近中將藤原利基の子。寛平中讃岐權掾より藏人となり、延喜のはじめ、左衞門佐侍從、同二十三年參議左衞門督にて卒す。

かんゐん　閑院

延喜頃の人にて、命婦なりとぞ。

かんゐんのごのみこ　閑院の五の皇女

嵯峨帝の妃均子內親王といふ說もあれど、歌體を案ずるに、今すこし時代下れりと覺し。傳詳ならず。

き

きせん　喜撰

又基泉とかく。眞言宗の僧にて、山城國乙訓郡の人とぞ。宇治山に迹を匿せり。世に喜撰式（金針とも）とて、歌の疵弊をいへる書あり。僞書ならむといふ。

きのめのと　紀乳母

名は全子。嵯峨帝の孫源澄の妻にして、陽成帝の御乳母となり、元慶六年從五位上に叙せらる。

きよき　潔興

宮道氏。昌泰元年內舍人となり、保明太子の帶刀たり。延喜七年貫之にかはりて、越前權少掾となる。

きよき　清樹

橘氏。三代實錄に、仁和二年二月從五位下彈正少弼、のち阿波守となり、昌泰二年三月卒す。

きよゆき　清行

大納言安倍安仁の子。承和三年、文章生に補せられ、清和帝の代左衞門權佐、陽成帝の代右中辨、光孝帝の代陸奥守、宇多帝の代從四位上讃岐守に任ぜられ、昌泰三年卒す。年七十六。

く

くそ

源作が女。

くにつね　國經

權中納言藤原長良の長子。基經の兄なり。荐に顯要を經て、寛平年中權中納言兼大宰權帥、延喜年中大納言となり、同八年六月薨ず。年八十一。

くら　內藏

本文、寵の字を書けるは誤。この事、羈旅の「朝なけに」の歌の條參看。傳は未詳。或はいふ、大納言源定の孫にして、大和守精の女と。

くろぬし　黑主

大友氏。近江國滋賀郡大友鄉の人にして、園城寺の地主なり。郡の大領となり。八位に叙せらる。延喜中、宇多法皇、屢石山寺に幸す。國司、その民を勞せむことを思ふ。法皇これを聞き、他國の奉邑の費を以て幸し給ひぬ。國司大に懼れ、亭を打出濱に造り、菊花を植ゑ、黑主をして侍せしむ。黑主「さざら波まなくも岸を洗ふめり渚清くは君とまれとか」の歌を獻ず。法皇大に喜び、物を賜ひて賞し給へり。仁和、昌泰の大嘗會の風俗歌を奉ず。

け

けいしん　敬信

（けうしんを見よ。）

けうしん　敬信

典侍藤原因香朝臣の母にて、尼となりし人。或は曰く、小野千古が母と。

けんげい　兼藝

伊勢少掾古次の二子と。或はいふ、大和城上郡の人と。

こ

ことなほ　言直

藤原氏。昌泰三年、因幡權掾、內竪頭に任ぜらる。

こまち　小町

小野氏。この人にかゝれる傳說は、大抵虛妄なり。出羽の郡司の娘といへるも據なし。この集、及び後撰集に、小町が姉、小町が孫なども見ゆれば、夫も、親屬もありけるなり。又小野貞樹と詠みかはしたる歌あれば、これも親屬にて、近江の小野より出でたる氏ならむか。時代は康秀、遍昭等と歌よみかはししに見れば、文德の頃の人にて、清和の御宇までもありし人にや。歌は、「今の京この方に及ぶ人なし。伊勢の御も名高けれど、小町には劣りたり」と、眞淵の評せるが如し。

こまちがあね　小町姉

傳未詳。

これたかのみこ　惟喬親王

文德天皇第一の皇子、母は紀靜子。貞觀十四年七月出家。法名算延。寬平九年二月薨ず。比叡山の麓小野に籠りましける故に、小野宮と申し奉る。

これもと　惟幹

藤原氏。六位陸奧掾。

これをか　惟岳

維凞と書く由、目錄に見ゆ。紀氏。無官の六位とぞ。

こんゐんのみぎのおほいまうちぎみ　近院右大臣

源能有。文德帝の皇子。寬平九年六月薨ず。年五十三。近院の家は、拾芥抄に「春日北、烏丸東號二松殿一」と見えたり。

さ

さきのおほきおほいまうちぎみ　前太政大臣

藤原良房、右大臣冬嗣の子、天安元年太政大臣に拜せらる。尋いで、從一位となる。貞觀十三年三宮に准じ、年官年爵を賜はる。十四年九月薨ず。年六十九。忠仁公と諡す。世に染殿の大臣と呼べり。

さだかた　定方

內大臣藤原高藤の二子。延喜のはじめ左近少將、近江介、延長二年、大納言より右大臣に任ぜらる。承平二年八月薨ず。年六十三。從一位を贈らる。三條右大臣と稱す。

さだき　貞樹

小野氏。石見王の子。嘉祥二年春宮少進となり、後、甲斐守に再任して、貞觀二年肥後守に進む。

さだぶん　貞文

又、定文。刑部卿茂世王の孫、左中將平好風の子。容姿美にして、平仲の艷名世に高し。左兵衞佐、三河權介となり、延長元年九月卒す。

さぬき　讃岐

讃岐守安倍淸行の女。

さね　實

參議左衞門督源舒の二男。寬平中藏人、左近衞少將を經て、昌泰二年信濃守となり。同三年卒す。

さんでうのまち　三條の町

從四位上紀靜子。名虎の女なり。文德帝の更衣となり、惟喬、惟條親王、及

び三內親王を生む。貞觀八年二月卒す。

し

しげかげ　滋蔭

小野氏。掃部頭にて、寬平八年卒す。

しげはる　滋春

在原業平の二子。大和物語に、在次君とかける人。

しようえん　勝延

笠氏。寬平中律師となり、昌泰元年少僧都となる。延喜元年二月入滅す。年七十五。紀氏にて、承均法師の兄なりといふ說もあり。

しようほう　聖寶

光仁帝第一の皇子春日親王の後、兵部大丞葛聲王これなり。出家の後、寬平六年權律師、延喜元年東大寺大別當となり、同二年僧正になさる。同九年七月入滅。年七十。或は曰く七十六。

しろめ　白女

大和物語に、源告（ツグル）が女にて、攝津江口の遊女なる由見えたり。これを、大江玉淵の女といへるは、大鏡などに、白女の歌を、玉淵の女の歌と竝べ擧げたるより、誤れるならむ。同書に「亭子院の、河尻におはしましゝに、しろといふ遊もの召して、御覽じなどさせ給ひて、遙に遠く侍ふよし、歌に仕うまつれと仰言ありければ、詠みて奉りける、「濱千鳥とびゆくかぎりあればこそ雲たつ山をあはとこそ見れ、いみじうめでさせ給ひ、物かづけさせ給ひき」と見えたり。

しんせい　眞靜

たゞし、淨は、吳音にジョウと讀まねば、法師名にかなはず。或は眞勢か。御導師に補せらる。河內國の人とぞ。

しんたい　神退

近江滋賀郡の人。文德實錄に、嘉祥三年五月、雨を禱らしめ給ふに、時に應じて雨ふる。その日、諸神の爲に、七十人を僧となし。おの〱、神の字を冠らしめて、名となさせ給ふこと見えたり。この法師も、その一人なるべし。

す

すがね　菅根

右兵衞督藤原良尙の子。元慶に文章生に補せられ、昌泰に文章博士となる。菅原道眞の左遷の時、これを救はむとて、宇多法皇の參內せられしに、菅根、藏人頭にてこれを奏上せざりし科によりて罪せられしが、直に本官に復し、官參議にいたる。延喜八年七月卒す。年五十四。從三位を贈らる。

すがはらのあそん　菅原朝臣

菅原道眞なり。かく氏姓をのみかけるは、異體なり。左遷の厄に遭ひて、延喜三年二月、太宰府にて薨ず。年五十九。その後、延長元年本官に追復し、正二位を贈らる。この集の頃は、未だその恩赦を得ざりしころなれば、かくは書けるか。傳は人の遍く知るところ

なれば略く。

せ

せきを　關雄

刑部卿藤原眞夏の五子。天長二年文章生の試に及第す。よく文を屬し、性閑適を好み、東山の舊居に籠れるを以て、東山進士と呼ばる。その舊居は後の禪林寺、今の永觀堂の地なり。承和中、淳和上皇の徵により、遂に出で仕ふ。累遷治部少輔兼齋院別當となり、仁壽三年二月卒す。年四十九。關雄、また琴を鼓するを好み、又草書を能くす。

そ

そうく　承均

元慶の頃の僧。或抄に、貫之の甥といへり。

そせい　素性

遍昭在俗の時の子にして、名を弘延といひ、淸和の御時の殿上人なり。大和物語に、遍昭のことをいひて、「世にいますかりける時の子どもありけり。太郎は、左近將監とけて、殿上してありけり。かく世にいますかりときく時だにとて、母もやりたりければ、いきたりけるに、法師の子は法師なるぞよきとて、これも法師になしてけり」と見えたり。石上の良因院に住せしに、宇多上皇、宮瀧遊覽のついで、住所の名をとりて、良因朝臣と召され、和歌を獻ぜしめられき。延喜中、屢御屛風に書し、又歌を獻じたり。

そとほりひめ　衣通姬

允恭帝の妃にして、忍坂大中姬皇后の妹なり。名は弟姬。その容姿艷妙にして、光、衣を徹ししより、世人「ソトホシノイラツメ」と稱せり。

た

たいすけ　大輔

但馬守源弼が女。また（オホスケ）とも訓む。

たかむら　篁

參議小野岑守の子。弱き時、父の任に從ひて、陸奧にありて、弓馬を事としたりき。京に歸りて後、學問に志し、遂に文章生より出でて、數多の官を經て、太宰少貳となりしが、遣唐使の時、大使と爭ひ、言不敬にわたり、流人となりしを、その三年目召還せられて、本位に復り、すゝみて參議左大辨にいたり、仁壽二年十月薨ず。詩を善くして、樂天とその歸を同じうすといはれ、野相公の名、世に喿し。然れども、性狷介にして人と容れず、爲に野狂の名を得たり。狂と篁と韻相通ずるなり。

たかよ　高世

參議菅野眞道の子。弘仁十一年周防守に任ぜらる。

ただおん　直臣

菅野氏。三代實錄元慶三年十一月の條に、中宮大進菅野朝臣直臣に、從五位下を授くること見えたり。

ただふさ　忠房

藤原氏。寬平中遣唐使判官となり、延喜のはじめ、大和守に任ぜらる。延長六年卒す。貫之の知人。吹笛の上手にて、胡蝶樂を作ると。

ただみね　忠岑

壬生氏。初め、藤原定國の隨身たり。後左近衞番長、右衞門府生、御厨子所預、攝津大目に累遷して、六位に敍せらる。歌道は貫之の門下といふ。この集撰者の一人なり。

ただゆき　忠行

藤原氏。仁和三年土佐掾となり、累進して、寬平中從五位下に敍せられ、昌泰三年遠江守、延喜五年若狹守となる。

ち

ちさと　千里

參議大江音人の子。延喜三年兵部大掾となる。姓名相配して意義を成せり。

つ

つねみ　經覽

阿保氏。昌泰年中右少吏兼算博士となり、累進主稅頭となりて、延喜十二年正月卒す。延喜六年の日本紀竟宴の歌の作者なり。

つらき　列樹

春道氏。延喜十年文章生に補し、同二十年壹岐守となり、未だ發向せずして卒す。この人氏名相配して意義をなせり。

つらゆき　貫之

紀氏。この集の序に御書所預、次いで內膳典膳、少內記、大內記、加賀、美濃の介、大監物、右京亮をへて、延長八年土佐守、天慶三年玄蕃頭、同八年木工權頭、同九年卒す。寬平后宮歌合の時を、その若盛と見る時は、七十餘ばかりの齡ならむ。萬葉集の後を承けて、それに勝るばかり、秩序整然たるこの集を撰びて、後世撰集の模範を示したるは、全くこの人の力なり。然れども、流石に他にも撰者のあることなれば、まゝ心ゆかずやありけむ、天慶中、更に「新撰和歌」を撰すといはる。而して、この集の序、竝に大堰河行幸序、及び土佐日記は、その國文の妙手たることを證せり。書道、また奧妙に達し、その假字書は、實に入神の筆なり。

と

としさだ　利貞

紀氏。貞觀の末少內記、元慶のはじめ大內記、同五年阿波介にて卒す。

としはる　利春

高向氏。寬平二年刑部丞に任ぜられ、延喜、延長の間、武藏、甲斐の國守を歷任せり。

としゆき　敏行

陸奧出羽按察使藤原富士麻呂の子。淸

和帝の代に出仕して、宇多帝の朝、近衞中將、藏人頭を經て、從四位上右兵衞督にいたり、昌泰四年卒す。或はいふ、延喜七年卒すと。書道の名手。

とものり　友則

紀氏。土佐掾となり、少内記にすゝむ。延喜の初大内記に轉じ、六位に叙せらる。この集の撰者の棟梁たり。但、いまだ撰了せざるうちに卒去せしものと見えて、哀傷の部に、その悼歌見えたり。

な

なかき　中興

平氏。忠望王の二子、實は右大辨秀長の一男と。昌泰に藏人となる。それより、荐に國守を歷任して、延喜十九年左衞門佐、二十二年美濃權守に任ぜらる。

なかひら　仲平

關白藤原基經の子。昌泰の末藏人頭たり。承平七年左大臣となり。天慶五年正二位にのぼる。八年薙髮して靜寬といひ、尋いで薨ず。年七十一。世に枇杷大臣と稱す。

なかまろ　仲麻呂

中務大輔安倍昭守の子。靈龜二年年十六、遣唐留學生となり、唐にありて、力學、大に得るところあり。名を朝(又晁)衡と改め、祕書監に進み、衞尉卿を兼ね、頗る重用せらる。勝寶年中、遣唐大使藤原清河來る。共に歸らむことを請ひ、明州に至る。王維、包佶等贈るに、詩を以てせり。仲麻呂、月を望みて「天の原ふりさけ見れば」の歌を詠じ、漢譯して示したるに、衆嘆賞せざる者なし。乃ち別れて海に航し、颶風に遇ひて、安南に漂著す。唐人以爲く、仲麻呂溺死せりと。李白、詩を作りて慟哭す。こゝに於て、仲麻呂、再び唐に還り、左散騎常侍、安南都護に任じ、光祿太夫、御史中丞、北海郡開國公に至り、三千戸を食む。寶龜元年正月年七十を以て卒す。代宗の代、潞州大都督を贈る。承和三年、遣唐使に因つて、正二位を贈らるといふ。

ながもり　長盛

橘氏。延喜中五位長門守に至る。文章博士直幹の父。

なざね　名實

矢田部氏。元慶八年文章生に補せられ、累進、六位の大内記となりて、昌泰三年卒す。

なほいこ　直子

藤原氏。貞觀の末こ從五位下、延喜のはじめ正四位下に叙せらる。典侍。

ならのみかど　平城の帝

桓武天皇の第一の皇子。延曆四年立太子。大同元年五月即位、同四年四月讓位、弘仁元年出家、天長元年七月崩ず。御年五十一。

なりひら　業平

阿保親王の第五子。兄等と共に、在原朝臣を賜はる。貞觀中右馬頭に任ぜられ、又渤海國の使を勞す。元慶中右近衞中將に進み、尋いで相模美濃守を兼ね、同四年五月卒す。年五十六。世に在五の君、在中將と稱す。二條后の入内前、これと通じ、相携へて逃亡し、髮を斷たれて放たれしは、世に有名なる傳說なり。國史に「體貌閑麗、放縱不レ拘、略有二才學一、善作二和歌一」と見えたり。蓋し、和歌は人麻呂以後一人なり。後人、加茂の岩本に祠を立てて、その靈を祀る。業平又膂力あり。嘗て宇多帝の未だ微なりし時、共に殿上に相撲ひ、帝を御椅子に投げかけて、その勾欄を折りしとぞ。

なりひらのはゝのみこ　業平の母の親王

桓武帝第七の皇女伊登内親王、阿保親王に適き、行平、業平を生む。貞觀三年九月薨ず。

に

にでう　二條

大納言源定の女とも、又、定の孫宿の女ともいへり。

にでうのきさき　二條后

贈太政大臣藤原長良の女にして、名は高子。清和帝の女御となり、陽成帝を生めり。元慶元年に立后、その後、東光寺の僧善祐と奸し、寬平八年に后位を停められしが、朱雀帝の天慶六年に、本位を復せられぬ。また入内前、在原業平に通ぜし傳說あり。

にんなのみかど　仁和の帝

光孝天皇。御名は時康。仁明帝第三の皇子なり。文德、淸和、陽成の三朝に歷仕して、一品式部卿に任ぜらる。陽成帝位を遜るゝや、藤原基經、帝を迎へて、これを立つ。在位三年にして崩ず。御年五十八。世に小松の御門と申す。

の

のちかげ　後蔭

中納言藤原有穗(又有種)の二子。延喜十九年從四位下備前權守。

のぼる　登

仁明帝の皇子なりしが、母三國の町の過失によりて、出家して深寂と號す。貞觀八年還俗して、貞朝臣を賜はる。寬平五年紀伊權守、同六年正五位下に至る。

は

はるかぜ　春風

小野氏。累世の將家にして、元慶年中鎭守府將軍兼相模介に任ぜられ、藤原保則とはかりて、奧羽の叛賊を平ぐ。寬平二年右近衞少將陸奧權守となる。その檢非違使たりし時、參議源光が、禁色を着せしをせめて、服用せざらしめ、論者の偉とするところとなれり。

ひ

ひがしさんでうのひだりのおほいまうちぎみ　東三條左大臣

源常(トキハ)。嵯峨帝の皇子にして、正二位左大臣となり、齊衡元年六月薨ず。年四十三。性雅量寬弘、宰相の才能、尤も

備はれりといふ。

ひだりのおほいまうちぎみ　左大臣

藤原時平。昭宣公基經の太郎なり。仁和二年、殿上にて元服を加へられ、續いて、顯要を經て、昌泰二年左大臣に任ぜられ、後正二位に至る。延喜九年四月薨ず。年三十九。正一位太政大臣を贈らる。本院大臣と稱す。

ひでをか　秀崇

良岑氏。元慶三年文章生に補せられ、寛平八年正月伯耆守に任ぜらる。

ひとざね　人眞

酒井氏。寛平中薩摩掾、延喜十四年土佐守に任ぜられ、同十七年四月卒す。

ひやうゑ　兵衞

右兵衞督藤原高經の女。大和物語に「忠房が許に侍りける兵衞」とある人なるべし。さては、藤原忠房が家人なり。「業平朝臣家に侍りける女」といへる詞書に准へて、忠房の妹かといへる説もあれど非なり。又、後撰集、拾遺集に見えたる藤原兼茂の女なる兵衞は、別人ならむ。

へ

へんぜう　遍照

（むねさだを看よ）。遍昭と書くは通用なり。

ほ

ほどこす　惠

大納言源弘の孫。延喜四年主殿助に任ぜらる。延長六年丹波守に任ぜられ、同九年卒す。

ま

まさずみ　當純

右大臣源能有の五子。寛平昌泰の間、大皇太后宮少進、大藏少輔、縫殿頭を經て、延喜元年攝津守、同三年少納言に任ぜらる。

み

みくにのまち　三國の町

三國氏、町は名。仁明帝の更衣、貞朝臣登の母。三代實録に、登朝臣は母の過により僧となると見ゆ。

みちのく　陸奥

從五位下橘葛直の女。

みつね　躬恒

凡河内（オホシカフチ）氏。寛平中甲斐權少目となり、延喜の朝に召されて御書所に候し、御厨子所預にうつり、和泉の大掾となる。歌道の名手として、貫之と雄を爭ひ、論者、その軒輊すべからざるをいへり。この集の撰者の一人なり。

みねを　岑雄

上野（カミツケ）氏。承和の頃の人とぞ。

む

むねさだ　宗貞

大納言良岑安世の男。仁明帝の世、藏人頭にて、寵幸を得たり。帝崩ぜらるや、出家して遍照と號す。今昔物語に、良岑少將は、文徳帝の太子の時、おぼしめしに協はず、仍て仁明帝の崩後、出家したる由見えたり。さる事もやありけむかし。元慶、仁和の間僧正に任ぜらる。光孝帝、特にその七十賀を、仁壽殿にて行はせ給ひ、又、食邑百戸を給ひ、輦車宮門に出入するを許し給ひぬ。寛平二年正月入滅す。年七十六。花山の元慶寺の座主たるが故に、花山の僧正と稱す。

むねはり　棟梁

在原業平の一男。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕へて、東宮舍人より、筑前守にいたり、昌泰元年卒す。この人の名、古くムネヤナと訓めるは非なり。棟梁之材などといふ義に取りたるにて、ムネとハリとなり。ヤナは、魚を捕る具にて、棟には熟せず。

むねやな　棟梁

（むねはりを見よ）

むねゆき　宗于

光孝帝の皇子是忠親王の子。寛平六年源朝臣を賜はる。延喜の頃、荐に國司を歷任し、從四位下右京大夫に至りて、天慶三年卒す。

も

もちゆき　茂行

又望行。紀氏。承和の頃の人にて、六位とぞ。

もとかた　元方

筑前守在原棟梁の子。その妹大納言藤原國經の妻たるによりて國經の猶子となれりとぞ。

もとのり　元矩

又元規。平の中興の男。延喜元年左衞門少尉、同六年藏人、同八年從五位下に叙せられ、幾くもなくして卒す。奥儀抄には、藏人右衞門尉基範とあり。

や

やすひで　康秀

文室氏。字を文琳といふ。貞觀二年刑部中判事、後三河掾にうつり、元慶元年山城大掾、同三年縫殿助となる。春上の詞書の趣に從へば、この頃、六十前後なりしならむ。

ゆ

ゆきひら　行平

平城帝の長子阿保親王の子。天長三年、父親王の奏によりて、仲平、業平の兄弟と共に、在原朝臣を賜はる。仁明より宇多まで六朝に歷仕して、正三位中納言兼按察使となる。寛平五年卒す。年七十六。國史、その經濟の才に長じて、且風流の聞えあることをいへり。

よ

よしか　良香

桑原秋成の子。弘仁中、氏を都と改む。良香、はじめ、名を言道といひし

を、渤海國の使を掌りし時、「姓名相配、其義乃美」とて、奏して、今の名に改めたり。貞觀二年文章生に補せられ、累進して、文章博士從五位下兼大內記越前權掾となり、元慶三年二月卒す。年三十六。その詩作、警句多し。「氣霽風梳㆓新柳髪㆒冰消波洗㆓舊苔鬚㆒」の類これなり。

よしかぜ　良風
一に好風、右近衞少將兼陸奥守藤原滋實の子。寬平延喜の間、左兵衞右衞門の尉を歷任し、春宮の帶刀たり。のち出羽城介に至る。

よしき　美材
小野篁の孫。寬平中文章生に補せられ後、諸官を經て、筑前守兼太宰少貳となり、延喜十年正月卒す。或は、延喜二年卒すともいふ。

よしな　良名
物部氏。六位の人とぞ。

よしひと　淑人
中納言紀長谷雄の二子。延喜九年左近將監、天曆二年河內守に至る。

よしもち　淑望
中納言紀長谷雄の子。或はいふ、貫之の猶子と。この集の漢文の序を撰ぶ。寬平八年文章生、のち大學頭、東宮學士を經、信濃權守を兼ぬ。延喜十九年卒す。

よるかのあそん　因香朝臣
藤原高藤の女とぞ。貞觀中從五位に叙せられ、寬平九年十一月從四位下掌侍となる。後典侍になされたるならむ。母は厄敬信なり。

よろづを　萬男
難波氏。傳未詳。

を

をむね　雄宗
下野氏。傳未詳。

語釋索引

▽この索引は、卷中の語釋を檢する爲に作つた。

▽解釋の短くてすむものは、わざと重複の記載を憚らなかつたから、索引には只その語の最初に出た頁數をのみ掲げた。

▽解釋の必要上重出させたものは、頁數も重記した。

▽長い詞書はその初頭の數語を掲げて檢索の便とした。

▽全體に成るべく簡約に抄出する方針を執つたから、この索引以外、本文にはなほ多分の語釋のあることを記憶せられたい。

あ

哀傷歌　八一三
あかしの浦　四八〇
あかずとや　二三五
あがた見　九〇九
曉の鴫のはねがき云々　七六四
あかでも人に　四七〇
あかなくに　二〇三
あかれやはせぬ　一四七
秋風にかきなす琴　六一九
秋霧の　四五四
秋たつ日　二四七
秋ならで　三〇六
秋のくる方　九六六
秋の夜の　八三
秋の夜をしむ　二六七
あき果てぬとか　三七五
あき人　七五
あきらけい子のみこ　八六六
あくがれ　一八二
あくたに　五〇七
あけたてば　五九〇
あさかの沼　六九七
淺香山の言の葉　五七
朝け　一〇〇九
あさぢ　七三五
淺ぢふの　五六〇
朝露のおきてし　四四三
朝露のおく手　八二五
朝な朝な　一〇三
朝なけに　四四五
朝な夕な　七〇二
麻のきぬ　一〇〇四
朝ぼらけ　三九八
淺間の山　九九四
淺みこそ　六四六
淺みどり　一一六
あし垣の　五六一
あし鴨　五八三
あしたづの　五六八
あしひきの　一四五
あすか川　四〇六
飛鳥川の瀬になる　八二
あすはあふみ　四三八
あだ　六二・一四八・三〇四
あだし心　一〇二八
あだちの眞弓　一〇一五
あだ波　七三二
あだ人　八〇七
あたり　一七二
あぢきなく　一一三
あぢきなし　五一九
梓弓　一〇八
あづま　四四一
東歌　一〇三三
東路　六三五
あづまの方へ云々　四八三
誂へつくる　一八四
あとはか　三九五
迹をとゞむ　九五四
あならめに常なる　五〇二
あはだ　一〇三七
あばらなる板敷　七五三
あはれ　一三一・一三五・三一四
あはれてふ　二一七
あひおひのやうに　六四
あひくるみ　五一九
あひ知りて　四四七
相しれりける人の漸く云々　七八五
あひみむ　一八二
あぶ隈　一〇三三
あふご　九九七
あふ事なぎに　六五五
あふ事のなぎさ　六五四
あふ坂　四四三
あふさきるさ　九九八
あふひ　五〇六
あふみぶり　一〇〇八
逢ふ夜はこよひ　二五四
あへず　三三三
あへなくに　二八五
あま　三七〇
あま雲の　七八一
あまきる　四〇〇
あま衣　八八八
あまたたび　四九〇
あまたにやらじ　二一七
あまつ星　三三九
天の川といふ處　四九三
天の川原　二五一
蜑の刈藻に　九〇六
あまのと　二八九
あまの原　四七三
あま彦の　九二五
天地のひらけ　五三
あやな　二〇三
あやなく　三〇四
あやなし　一三九
あやめ草　五三九
あら鋤き返し　八〇二
あらたまの　四〇四
あらたまる　一四四
あらを田　八〇二
在明の月　三九八
在明のつれなく　六五二
ありかず　四一一
ありきあらずは　四三〇
ありそ海　八〇三
ありて　一五九
ありなめど　一八二
あれ　一〇〇九

あわたづ　五六八
あわ雪　五九四
あをやぎ　一一五
青やぎの絲　八六五

い

いかゞさき　五三〇
いがき　三三三
いかに散れとか　一七三
伊香保の沼　九六六
いきうし　四五六
いさ　一三〇
いざ　一五一
いさゝめに　五一八
いさや川　一〇三八
いさよひ　七〇七
石はしる　一四一
石間ゆく　七〇一
石山　三三八
いし井　四七〇
いせのあま　九七〇
磯菜　一〇三九
石の上の竝松が云々　八五一
石の上ふるき都　三三四
いその上ふるの中道　六九九
徒に　一九四
板間あらみ　九六三
至り至らぬ里　一七九
板井　一〇一六
一本大友黒主　一七四
いつはとは　二六五
いづみ川　四七九
和泉の國に侍りける　八九〇
いで　五六三
絲すぢ　三〇〇
いとせめて　五九八
いとど深草　九三四
いとなかる　七九四
絲による　四八九
いとのよる　九九六
いとはやも　二八五
絲よりかくる　一一五
絲をみなへし　五〇九
いなおほせ鳥　二八四
いな葉のそよと　六一八
いなばの山　四三三
稲舟　一〇二七
いにし　二八六
犬がみのとこの山　一〇三八
いねがて　二九六
命やは　六四〇
いはがき　三五三
いは切り通し　五四九
いはし水　五八六
岩躑躅　五五一
岩波　五三二
いはね　四一七
岩のかけ道　九一七
いははしる　一四一
いはひ歌　六〇
いはひつる　四三三
いはほ　三九〇
家路　一六〇
家づと　一四二
家居しをれば　一〇三
今　四三三
今しはと　七七三
今はとて　二六〇
今はの心つくからに　六六四
今は野山し近ければ　九六七
今もかも　二〇二
妹　五四三
妹背の山　八一〇
妹とわがぬる　二四三
いやしきも　八六九
いやはかな　六六八
いれ紐　五八八
いろ〳〵ことに　三三一
色なしと　八五一
色にはいでじ　一八七
色みえで　七九〇
色をも香をも　一三六
いをねぬ　七六九

う

うき草　五八六・九三六
うきね　五七八
うきふし　六〇七
うき目　一六五
鶯の笠にぬふてふ　一三四
うぐひすの氷れる涙　九一
鶯の谷よりいづる　一〇一
うけ　五六四
うけく　九一九
うけず　五五六
右近のうまば云々　五三五
うしろの屛風　四一八
うしろめたく　三〇九
歌合　九九
右大將藤原朝臣　四二四
うたゝある　九七九
歌奉れと　一一〇
うたて　一三五
歌の心　七三
歌の事とゞまれる　八四
歌のひりじ　六九
うちつけ　二三九
うちつけにこし　五一三
宇治のはし姫　七〇六
うちはへて　二五八
うちはへてくるし　五六五
うちも寢ななむ　六六〇
宇治山　七六
うづき　二一七
うつし心　七二四

うつせみ　五一五
うつせみの　一六一
うつせみは　八一五
うつゝ　六〇二
うつふし染　一〇〇四
うづらと鳴きて　九三五
移りにけりな　一九四
うつろはむ　一五七
移ろひ　一三三
うつろへる花　一八七
移ろふ　三〇六
うとまれぬ　二三六
うねの野　一〇〇八
釆女の戯　五七
うばたまの　五一六
うひにぞ見つる　五〇八
うべ　三三一
うへのきぬ　八四九
うへのをのこ　二四八
馬のはなむけ　四三八
梅の花を折りてと　一三八
うもれ木の　六一
うらびれ　二九二
恨みはて　一八五
うらめづらしき　二四九
雲林院　一六三
雲林院のみこ　一八一
うるふ月　一四七
うれ　八七一
うゑしうゑば　三三七
右衞門の府生　八〇

え

えぞしらぬ　四四六
えぶの身　九六〇

お

老かくるやと　一三四
おいらく　四一六
おきからさきて　五三一
おきつしら波　四三七
おきつの濱　八九〇
おきてば　四一三
沖にをれ　一〇三九
隱岐の國に流され云々　四七七
おきのゐ　一〇三六
おき火　五三五
おきふしよるは　六三三
おきへ　五八二
おきまどはせる　三四九
おく山　二九一
おして　一〇八
おしてるや　八七三
おしなみ　三八五
おちにき　三〇一
音羽川　七五六
音羽山　三三一
おなじ御時上の侍
にて云々　八八〇
おのかきぬ〳〵　六六四
おひぬ物ゆゑ　三〇六
大あらきの森　八七二
大歌所　一〇〇五
大江のちふる　四五八
大かたの　二六三
おほ方は　八六一
大川のへ　七一四
大澤の池　三四七
おほせて　一九一
おぼつかなく　一一八
おほなほび　一〇〇五
大幣にして　九八九
大幣の　七三〇
大原野　八五二
おぼほれむ　九六七
大御遊　八八一
大御酒　四六三
大御酒のおろし　八五七
大堰　三七八
おもひ　八二三
思ひ出づる常磐の山　三三七
おもひきゆ　三九四
思ひくらし　七七一
思ひたはれむ　三一六
思ひつらねて　二八九
おもひ出　一三五
思ひ寐　六三五
思ひやる　五七五
思ひやれども　五四六
思ふどち　二〇六
思ふものから　三三六
思ほえず　一七〇
おもほゆれ　一三一
親のまもりける云々　七四九
おりかく　三八一
おろかなる　六〇一
御書の所の預　八〇
御ぶくぬぎ　八三九
御べ　一〇一九
御屛風　四一八

か

かうぶり給はり　八三九
鏡山　八七六
かゞり火　五八〇
かきくらし　四六八
かきつばた　四八三
隱してよ　二五三
かくなわに　九六〇
かくれが　九一七
隱れ沼の　六八三
蔭　四二三
かけたる　三七一

かけて來つ　二八三
かけてのみやは　七八二
影となりにき　六四七
影となる　五七九
かざさむ　三四〇
かざし　四三〇
かざす　一三四
かさとりの山　三三三
笠にぬふ　一三四
笠ぬひの島　一〇一〇
笠ゆひの島　一〇一〇
かしつる絲　二五八
かずかく　五七四
數かく(我ぞ)　七六四
春日野　一〇四
春日野の祭に云々　五三七
春日の山　四三一
かすみの衣　一三一
風のたより　一〇〇
鹿春山　四七九
風をいたみ　七三三
かぞへ歌　六〇
かた　三四二
片絲　五四・
片絲のより〳〵に　七一
片戀　五八八
方たがへ　八五九
かたの　五三三
かたへ　二四五
かたみ　一三四
かたもかたこそ　九八一
片岡のあしたの原　三三四
かぢ　二五二
かつ　一六一
かづくてふ　七〇二
かづけども　五〇三
かつ見る　六九八
かつら　五〇六
かつらに侍り　九三〇
かづらき山　一〇〇七
かつらの宮　五二四
門させりてへ　九三七
がに　一〇一三
香に匂ふ　一三〇
かにはざくら　五〇三
かねて　三三五
兼覽王に始めて　四六六
賀の歌　四〇九
かのかたに　五三一
かの女に代りて　六四六
川せうえう　二四八
かはたけ　五一七
かはづ　三三・二〇五
かはと見ながら　六八二
かはなぐさ　五一六
河原のおほいまうち君云々　八三一
かひ　一四五
かひ　一〇〇三
かひがね　一〇三一
甲斐の國にあひしりて云々　八四二
かひのさう官　八〇
かひよ　九八六
返し　一四九
かへしもの　一〇一八
かへる〴〵も　八七九
歸る雁を　一三〇
歸るさま　四五七
かへる山　四三九
神あそび　一〇一一
神だにけたぬ　九八三
かみな月　三三五
神なびの　三三五
神なびの森　四五六
神なび山　三三六
神のきね　一〇一三
神のまに〳〵　四九五
かみやがは　五三三
神代の事も　八五三
龜のをの山　四一七
がも　一〇三三
鴨の川原　二四八
かもの社　五四四
蚊遣火　五五五
かよひ路　二四五
から歌　五一
からくれなゐ　三六四
から紅のふり　二二七
から琴　五一九
唐ごろも　四四三
から衣きつゝ　四八四
唐衣ひもゆふぐれ　五五八
からさき　五二一
からに　二六三
唐錦　八四六
からはぎ　五一五
からはきごとに　五一五
唐物の使　四五三
からもゝ　五〇四
雁がね　二七〇
雁かへる　一一九
かりくらし　四九三
かり菰の　五四三
狩ごろも　六三四
雁の聲云々　一一九
かりほ　三七三
かれいひ　四九二
かれにし人　四〇四
かれぬと　三八二
香を尋ねて　一二八
かんなりの壺　二六七

き

消えあへぬ　九三
消えがてに　一五三
きえかへり　六〇五
消えずはありとも　一四九
きえでうき身　七八六
消えなくに　一〇七
きかくに　七九九
聞きわかむ　九八
菊合　三四二
聞えつがなむ　九五六
きさいの宮　九九
后の宮(貞保の)　四一八
北へゆく雁　四八七
北山　一八一
きちかう　五一〇
來ても見なくに　一五二
來にけり　八七
紀の利貞が云々　九三二
紀のむねさだが云々　四四六
吉備の中山　一〇一九
君が爲　一〇九
君しのぶ草　二七七
清瀧　八九九
きり〴〵す　二七四
きりけむ　四一五
羈旅　四七三
來ゐる　九二

く

くゝる　三六五
草葉の妻戀に　九八六
草まくら　四四五
葛　三三三
葛の葉のうらみ　八〇七
藥けがせる　九六六
くだち　八七一
くたに　五〇七
くねる　六四
久米のさら山　一〇二〇
雲のうへ　三三九
雲の通ひ路　八五五
雲のはたてに　五四二
くもる　一三二
雲ゐ　四二五
雲ゐはるかに　五四〇
藏人所のをのこども　三一〇
藏人頭　八二九
くらぶ山　一三七
くるとあくと　一三三
車の下すだれ　五三六
吳竹のよゝに　七一
くれなゐ　五五二
くれのおも　一〇三六
寛平の御時　九九
寛平の御時御屏風に歌かゝせ云々　七九二
寛平の御時に上の侍に云々　八五六
寛平の御時にもろこしの云々　九五〇

け

けけれ　一〇三一
けなくに　八六六
けに　七二八
けにごし　五一三
けぬ　二九七
けふみかの原　四七九
けらしも　一四五

こ

こがくれて　五四八
こきいれて　三七五
こきたれて　六六五
こきまぜて　一四三
苔の袂　八二九
心地そこなひて云々　一六七
心ちそこなへりけるころ　七八四
こゝのがさね　九六七
こゝら　一九一
心あてに　三四九
心あまりて　七四
心あらば　二二五
心づから　一七三
心づくし　二六一
心のあきに　八〇五
心のあれて　七四七
心のうら　七一五
心の闇　六七二
心のゆきて　四二五
心ひとつ　三〇五
心も知らず　一三〇
心をおきつ白波　五三三
こし時　一〇三六
越路　四八九
五節のあしたに云々　八五五
五節の舞姫　八五四
こぞ　八七
木高く　四五二
木傳へば　一九一
五條の后の宮云々　七五三
こてふに　七〇八
こと〴〵に　三三一
事ぞともなく　六六二
ことづてむ　三三〇
ことゝはむ　四八六
ことなしぶ　六九三
ことならば　一六九
言のしげけむ　七一六
言の葉　五一
ことは　四六八
こともかけなくに　七九三
言やつてまし　一一九
ことわざ　五二
このたびは　四九五
この月ばかり　一〇二七

木の芽もはる　九七
このもかのも　一〇三〇
こば　二一八
戀歌　五三九
こひ／＼て　二五四
戀しきことに　七四一
こまなべて　一九三
こめや　七七二
こもれり　一〇四
こよろぎの磯　八五七
こりずまに　六五八
是貞のみこ　二六五
惟喬のみこの狩しけ
る供に云々　八六四
惟喬のみこの父の侍
り云々　八三六
惟喬のみこのともに
云々　四九二
惟喬のみこの許にまか
り通ひけるを云々　九三二
ころもかせ山　四七九
衣片敷き　七〇六
衣かりがね　二八七
ころも手　一〇九
衣はるさめ　一一三

さ

齋宮　六七〇
宰相　八五一
西大寺　一一六
さらび　五〇八
榊　一〇一一
榊葉の　一〇一三
さかしらに　九九二
咲かずやはあらぬ　一六九
嵯峨野　三一〇
さかゆく　八七〇
さがりごけ　五一六
さきのおほきおほい
まうち君　九三・一三九
前のおほきおほいま
うち君云々　八一四
櫻あさ　八七二
櫻色　一五二
櫻をうゑて云々　八三二
さくるものかは　七一五
酒たらべ　一三七
咲ける咲かざる　一七九
左近將監　九三五
さゝ　五一八
さゝがに　五〇九・七七三
さゝのくま　一〇一六
さゞれ石の巖となる　八二
さしでの磯　四一一
貞辰のみこ　四一七
貞保のみこ云々　四一八
五月待つ(時鳥)　二一七
五月待つ(橘)　二一九
さつき山　六一五
さ苗　二五〇
さ苗とる　二五〇
さひのくま　一〇一六
雜歌　八四五
雜體　九六〇
さぶらひにて云々　三三七
さへ　一〇八
佐保山　三三五
さみだれに　三三一
寒からし　二七六
さむしろ　七〇六
さやかに　二四七
さやけさ　二九三
さやにも見しが　一〇三一
さやの中山　六三五
さよ　六七三
さよ中　二七〇
さら／＼に　一〇二〇
更科やをばすて山　八六〇
さらぬ別　八七七
舍利會　四六一

し

しかぞすむ　九四三
志賀の山越　一九六
志賀の山越にて石井
の許に云々　四七〇
志賀より云々　一九九
しかもかくすか　一八〇
しかもせぬ　七三八
しがらみ　三七一
しがらみふせて　二九三
敷島　七一三
しきたへの　五五九
鴫のはねかきを　六六
式部卿のみこ閑院の
五のみこに云々　八二八
しくめる　九一四
時雨と　四六五
時雨にふり　七七九
した消えに　六〇六
下照姫に云々　五四
下にもゆる　五八〇
したにを思へ　六七七
したの帶の　四七二
下紐　五六二
したゆく水　五五一
下ゆふ紐　六七八
七條の后うせ給ひ　九七〇
七條の中宮　九三〇
しづく　八二七
しづ心　一六九
しづの苧環　八六九
してしが　二〇六
しでの田長　九七六
死出の山　七八四
しぬべし　一六〇
しのゝめ　二三四
しのばむ　三五七

しのぶ草　二七七
しのぶもぢずり　七三三
師走　四〇三
しはつ山　一〇一〇
しはつ山ぶり　一〇一〇
潮合　八八六
しほ貝　九六三
鹽釜といふ處のさま
を　八三四
しほの山さしでの磯　四一一
鹽やき衣　七五三
島隱れゆく　四八〇
しまぬ　三四一
しみはつく　六八五
しもぞ　一一五
しもついづも寺云々　六〇〇
しもとゆふ　一〇〇七
霜のたて露のぬき　三六二
霜のふり　一〇〇九
白川　六八七
白雲の道　一一九
知らずとを　六五七
しらつゆ　一一六
しらなみ　一二五
白眞弓　六一三
白雪に　二六九
白雪の共に　一〇〇一
白山　四五一
しるく　一三七
しるし　一五〇
知る人　八八六
しるべ　一〇〇
しろたへ　一一〇
しろ妙の袖　三四六
しをに　五一一

す

菅の根しのぎ　五九五
菅原や伏見の里　九四一
すがる　四三五
過ぎがてに　二〇一
すきもの　一〇〇二
すぐしてし　一八三
すくばかり　九九六
すげて　八九六
朱雀院　三〇五
朱雀院の云々　四九五
朱雀院の帝布引の云
云　九〇〇
すさむ　一三七
すさめず　八七二
洲濱　三四三
住まず　七四三
墨染　八一六
すみながし　五三五
住の江　六三・四二六
住吉　八八三
住みわびぬとよ　二三〇
すもゝ　五〇三
末さへよりこ　一〇一五
末つむ花　五五二
するじ　二四三
するの松山　三九二・一〇二八

せ

せうえう　二四八
せうそこ　六三三
せきなとゞめそ　四三七
關のふぢ川　一〇二一
關守　六六〇
せゞの埋木　六七五
旋頭歌　九七三
せにかはり　九四八
せめきけむ　八八一
仙宮に云々　三四五
前栽　三三七

そ

ぞう　九〇九
宗岳の大頼が云々　九三九
そこともえはぬ　二〇六
そこひ　七三二
そとほり姫　七七
そぼち　四六八
そぼつ　九八三
そへ歌　六〇
そへにとて　九九八
杣人　一〇三五
背かれなくに　九〇七
そめどの　一〇三七
染殿の后　一三九
そめるなり　四九七
ぞも　三一二
空に立つ　六九五
空もとゞろに　三三六
それわれら　八三

た

題しらず　八九
大內記　八〇
大納言藤原國經の朝
臣云々　八五〇
たえて　一四〇
たがあきに　三〇六
高砂　六三・八八五
たかさごの　二九四
高師の濱　八九〇
高み　一三七
たがみそぎ　九五三
たき　一四一
たぎつ心　五四八
たぎつ瀬　三八六
瀧にそふ　四六三

たきまさり　八三七
たぐふ　三二一
たぐへ　一〇〇
竹のよ　九三一
田子の浦　五四六
ただごと歌　六〇
たゞぢ　六〇二
たゞにのるべき　九七二
たゝまく　八四六
立ち返り　三〇一
たちならし　一〇三九
たちぬはぬ衣きし人　九〇〇
たちはきの陣　一七二
たちばなの小嶋のさき　二〇二
たぢまの國の湯　四九一
たちよるばかり云々　一三三
立ち別れいなば　四三三
たづき　一一八
たつこと安き　三一三
たつた川　三五六
たつたの山　二九〇
立田姫　三六七
立田山　九五二
たつみ　九四三
立てれをれ　九八一
たとへ歌　六〇
たどり　二五五
棚無し小舟　七三九
棚橋　七四五
たなばた　一五三
たなばたつめ　二五三
たなびく　一五七
たなびく雲　八三
谷風　九九
たのしきをつめ　一〇〇六
たのみ　八〇六
旅ならなくに　三〇三
旅なる　二一九
旅寢　一六〇
玉かづら　七三三
玉くしげ　四九二
手枕　七六一
玉襷なる　九八八
玉だれの小がめ　八五七
玉づさ　二八三
玉づ島　八八八
玉なれや　三〇〇
玉にぬかむ　二九七
玉にもぬける　一一六
玉の緒　五四一
玉の緒ばかり　六〇八
玉枠の　七四四
玉藻　三八二
たまればかてに　五九四
たみのの島　八八八
手向山　四九五
田村の御時に事にあたりて云々　九二四
田村の御時に女房の侍にて云々　九〇二
田村のみかど　八六六
田村の帝の御時に云云　八六六
ためし　四三〇
たもと　三一四
袂より離れて　五〇一
たゆく　六五一
たより　五三九
たらちねの　四三七
垂れこめて　一六七
たれしかも　一四五
たわゝ　一九八

ち

中將のみやすん所　一九〇
中納言昇の朝臣云々　七四六
近きまもり　九六六
契り　二五六
千種　一八五
ちゞに　二七一
千鳥　四一三
血の涙　七一四
ちはやぶる　三六四
ちはやぶる宇治　八八一
ちまき　五三六
貞觀の御時　三三七
貞觀の御時萬葉集は云々　九五四
帳のかたびら　八三九
ちらずは　一八二
ちりかゝる　一三二
ちりかひくもれ　四一六
散りかふ　一九七
散りぬべみ　三五三
ちりのまがひ　一六〇
塵の身　九四七
塵ひぢ　五六
散るぞ愛でたき　一五九

つ

ついでによめる　二六七・三三七
束ね緒　五五七
つき　九八四
月おもしろし　八六三
月草　三一七
つきなみ　九八四
月の桂　二七二
月やあらぬ云々　七五四
月夜よし夜よし　七〇八
月渡る　二七〇
筑波ね　九二八
つくるなり　九九四
つけて　五二
つごもり　四〇三
つごもり方　二〇九

つごもりの日　三七八
つつ　八九
つゞら　七一六
つゞりさせてふ　九七九
つゞりの袖　四九七
綱手かなしも　一〇二四
津の國　六三三
津の國の長柄　八七〇
つひに行く道　八四二
つま　一〇四
つましあれば　四八四
つまで　九七八
妻のおとうと　八四九
摘みてむ　一〇六
露じも　二九九
露ながら　三四〇
露のあだ物　六四〇
つゆも　三三二
つらき　二五六
つら杖　九九七
釣繩　五六五
つれなく　六五二
つれもなく　六八四

て

亭子院　一五四
亭子院の歌合　一五四
亭子院の御屏風に　三七二

と

東宮　九四
春宮のうまれ給へる　四三一
東宮の雅院　一六八
東宮のさぶらひ　九五〇
春宮のたちはきの陣　一七二
東宮のみやすん所　九四
とがめ　五六三
時なりける　九三九
ときは　一一三
ときはの山　三三七
とけて　一三五
常夏　二四三
年月をわたり　五五
としといひて　八七三
年に一たび　二五六
年にまれなる　一四九
年の内に　八七
年の緒　二五八
とつぎ　七二
とゞめてば　一二四
とゞろ　二三六
とはにあひみむ　七一三
とひがたみ　七一九
とぶ火の　一〇五
とまり　三七八
留るものとは　九七〇
とめくれば　二〇九
とめて　一四五
外山　一〇一四
とよみ　二九二
鳥の跡　八五
とり物　一〇一一
とわたる　八四五

な

内侍のかみ　四二四
長き思　二七四
長きをかこてれば　八三
流せる　三七〇
中空にのみ　五四〇
中務のみこの家の云云　八九四
長月　三七八
なか〳〵に　六二五
なか〳〵に　六九九
ながなく　三三六
鳴かぬ限　九九
長濱　一〇二一
なかひらの朝臣云々　七七八
ながむる　三〇九
ながめ　一九四
ながめふる屋のつま　七七〇
ながらに　一八五
ながらの橋　八〇九・八七〇
長柄の橋もつくる　六八
ながるゝ川を　一三一
流れて　五五一・八〇九
流なり　七七
流れひるまを　六八六
流れもあへぬ　三七一
長岡　八七七
なぎ　七五九
渚の院　一四〇
なき人の宿に云々　八三七
なきわたる　二四〇
啼く鹿の　八三
なげ　一八一
なげき樵る　九九七
なごり　一七四
なずらへ歌　六〇
なぞ　三〇六
夏引の手引の絲　七一七
なつやま　三三五
名取川　六五六
なに　一六七
名におふ宮　九五四
なにかは　二四一
名にしおはゞ　四八六
何そはありて　四五〇
名に立つ　一四九
難波　六三三
難波津の歌　五七

難波の御津　六七四
名にめでて　三〇一
縄たぎ　九三三
なべに　二八〇
なほ　二三六
涙川　五六六
なみに思はゞ　七一四
波の花　三三三
な焼きそ　一〇四
なよ竹　九五〇
ならなくに　一九二
ならぬ思　九八三
奈良の石の上寺　三三三
奈良の御時　六八
ならのみかど　一七五
奈良のみやこ　一七五
ならはしもの　五七一
業平朝臣紀有常の女に云々　七八一
業平朝臣のいせの國に云々　六六九
業平朝臣の家に侍りける女云々　六四四
業平朝臣の母のみこ云々　八七七
なりもならずも　一〇三三
なればより　九八七
名をむつましみ　三〇三

に

にがたけ　五一七
にざりける　二八〇
西川　八九三
西の對　七五三
二條の后　九〇
二條の后の云々　八五二
庭もはたれに　九六三
にほ鳥　六八四
にほはす　三一一
にほふ春べ　一二七
仁和寺　三五一
仁和の云々　一九〇
仁和の御時云々　四一四
仁和のみかど　一〇九
仁和のみ門――布留の瀧云々　四六三
仁和の御門の――御をば　四一四

ぬ

ぬぎかけ　三一一
ぬきをうすみ　一一一
ぬさ　三六八
ぬさとくだく　四四八
ぬさもとりあへず　四九五
布引の瀧　八九六
ぬるゝ顏　七六〇
濡衣きせて　四六九
ぬれてを　二九九

ね

ねごし　一〇三三
ねたく　五四四
ねにあらはれて　六九二
ねぬ繩　九八七
閨　七〇九
ねを　三三九

の

野飼がてら　九九一
のちまき　五二六
のどけし　一四〇
野中の清水　八六八
野中の水を汲み　六六
野火　七八六
野守　一〇五
野ら　三一八

は

誹諧歌　九七五
はう官に云々　九五〇
羽風　一九一
はかなきこと　六一
はかなくも　二一一
はぎにあげて　九七七
百和香　五三四
はしに　九二一
橋に渡せばや　二五三
橋姫　七〇六
はじめをはり云々　七六
橋守　八八二
ばせをば　五一八
はた　三二三
はたて　五四二
はちす葉　二四一
はつかに　五三七
初雁　二八二
はつこゑ　三三三
はつ霜　三四九
はつせ川　九七三
初瀬に云々　一三〇
はつ花染　七三二
はつるゝ絲　八二四
はてのうければ　一五九
花がたみ　七五九
花かつみ　六九七
花櫻　一六一
花薄穂にいづる　三一三
花ぞめの　七八九
花たちばな　二一九

花にさして　一六六
花の鏡となる水　一三三
花の木　一七八・一九二
花の所　一六三
花の紐とく　三一六
花のまぎれ　四六二
花見がてら　一五三
花もにほはぬ　一〇二
鼻もひぬ　九九〇
花を翫ぶ　六二
はねうちかはし　二六九
はゝそ　三三六
はひまつはれよ　二〇〇
はぶき　二一七
はふらさじ　一〇〇一
濱の眞砂　八二
ばや　二一八
はやき心　六八三
はやくいひてし　七八八
はやく住みける所　二四〇
はやくぞ人を　五〇三
はやす　一三七
春かけて　九二
春くはゝれる　一四七
春しりそむる　一三六
はるに知られぬ花　三八九
春の色　一七九
春の歌とてよめる　一七六
春のきる　一一
春の心　一四〇
はるのはつ花　九九
春の花の　八三
春のみやま　九二八
春の物とて　六四四
春のゆくへ　一六七
はる〴〵きぬる　四八四
春べ　一三七
はるやとき　九八
はれぬおもひ　四五四
はをはじめ云々　五三六

ひ

比叡に云々　一七三
ひえの山なる音羽の瀧　九〇一
ひかりのどけき春の日に　一七一
ひき野　七一六
ひく手　七二〇
蜩　二八〇
ひさかたの　一七一
久方のなかにおひたる里　九三〇
ひぢて　八八
ひづ　三一八
ひづち　三七五
人がら　六六三
一さかり　一六五
ひとしほ　一一三
人だのめ　四五八
一つおもひ　五九〇
ひとつ心ぞ　九六六
人なき床　八〇一
人にもがもや　一〇三三
人に若菜賜ひける　一〇九
人の國　四四〇
ひとの心　五一
人の業し　六〇〇
人はいさ　一三〇
人ま　一三三
ひとまつ山　三三九
人め　三八二
人目つゝみ　六八二
一目見し　一六六
人めもる　五九四
人もすさめぬ　一三七
人目をもる　六八〇
人やりの道　四五六
ひとりある人　二九六
人わすれ草　八九二
人をあく　九九一
人を忍びにあひしりて云々　七四一
人を別れ　四四二
ひなのわかれ　九三三
ひの隈川　一〇一六
姫松　八八二
ひるめ　一〇一六
ひをりの日　五三五
ひんがしの五條わたりに云々　六五九

ふ

ふかき心　五八五
深草の帝の御時に云云　八二八
深草山　八一五
深くそめてし　九三
吹あげにたてる　三七四
吹あげの濱　三七三
吹きあへぬ　一七〇
ふきとふき　八〇五
富士の山の烟もたゝず　六八
ふすぶる　五五五
ふたみの浦　四九一
ふぢ衣　三七四
藤ごろも　八二四
淵瀬　五五〇
ふぢなみ　二〇一・二一五
藤ばかま　三一一
藤原のきみとし　四四四

藤原のこれをかが云云 四五七
藤原の高經 八三三
藤原の利基云々 八三五
藤原の敏行朝臣の業平朝臣の云々 七一九
藤原敏行朝臣のみまかりける云々 八一七
藤原の後蔭が云々 四五三
藤原三善 四三三
舟をしぞ思ふ 四八一
ふみしだく 五二一
冬ごもり 三八九
冬の加茂の祭 一〇三四
ふり出 三三七
ふりおける 九五五
ふりさけ見れば 四七三
ふりしきて 三八八
ふりにし 三一八
ふりはへて 一一〇
ふりゆく 一一七
ふる枝にさける 二九五
ふるからをの 八六七
ふるごと 九五五
ふるさと 一三〇
故里 一九三
ふるさと人 一六三
降るだにあるを 一七二
ふる年に春立ちける日 八〇七
布留の瀧 三一八
ふる人 七三八
ふるまひ 一〇三九
文室の康秀が云々 九〇九

へ

べみ 三五二
べらなり 一一

ほ

ほいにはあらで 七五三
法皇西川に云々 八九三
法皇西川に云々 一〇〇二
ほがら〳〵と 六六四
綻びにける 一一五
ほそたに川 一〇一九
ほだし 九一〇
螢よりけに 六〇四
ほつえ 五五四
ほに出だす 六一
穂にいでて 三一四
ほにこそ 五九三
ほの〴〵と 四八〇
ほり植ゑじ 一七八
堀江 七三九
堀河のおほいまうち君 四一六
堀河の太政大臣云々 八一五
ほろゝ 九八六

ま

まうち君 九三
まうで 一五三
まうでたりけるに 一九八
まがき 三一八
籬が島 一〇三五
まがねふく 一〇一九
まがひせば 四〇二
まかり 六三三
まかりまうし 四四六
まかれりける時 三九一
まきの板戸 七〇七
まきもくの穴師の山 一〇一三
枕定めむ 五六九
枕よりあとより 九八一
まこも 六三〇
まさ木の葛 八五・一〇一四
まさご 四一一
まさで 八三四
まし 一〇一
ましら 一〇〇三
まじりなむ 一八一
増鏡 四〇七
まだ 二四三
まだき 三〇六
またく心 九七七
まだしき程 二一八
待たずしも 七〇八
待ちみて 一六六
松の葉の 八五
松のみどり 一一三
まつほど久に 七七七
まつ蟲 二七七
松山の波をかけ 六六
まどほ 七六三
まどろめば 六六八
まとゐ 八四六
まに〳〵 二〇九・四九五
まひ 九七二
前の棚橋 七四五
まめ 九九五
まめなる處 六一
稀なる色 九六〇
萬葉集 七一

み

見え 一六五
見えなゝむ 四五九
みかきもり 九六六

みがくれて 六〇六
み影 八二七
御蔭 一〇三〇
御笠と申せ 一〇二六
三笠の山 四七三
みかの原 四七九
みかは水 一六八
右のおほいまうち君云々 七四二
みくさ 一〇一六
御國忌 八二八
みこ此歌を云々 四九四
みこの宮のたちはき 九二八
みさぶらひ 一〇二六
見し 三四一
見しごとも 九四九
みそぎ 五五六
身ぞふり 四六五
みたらし川 五五六
道にあへりける云々 四七一
みちのくにへ 四四九
道もさりあへず 一九六
水莖の岡 一〇〇九
みづぐきぶり 一〇〇九
見つゝわがこし 一七三
水の秋 三七一
みつのあま 九三六
みつのこじま 一〇二六
水のしら波 七〇一
見てのみや 一四二
見てを 三七三
みながら 八四九
みなせ川 六三四
みな月 二四五
みなへしり 五〇九
源のさねが云々 四五四
みなれ 七五六
みなわ 六二一
身におはず 七五
峰にも尾にも 一三八
見はやさむ 一三七
見まく 六四八・八八八
見まれ見ずまれ 七〇〇
耳無の山 九八二
みむろ 一〇一一
御室の山 三五六
宮木 一〇三五
宮城野 七一〇
みやこじま 一〇三六
みやこ鳥 四八五
御息所 九四
宮づかへ 三五三
宮仕つかうまつらず 九二八
みやはなる 五三三
み山 一〇七
み山がくれ 一九九
み雪 三八四
見ゆとは見えじ 七〇〇
み吉野 八九
見らむ 九二
みるめ 五八一
みるめの浦 六八六
見るものからや 七〇三
三輪の山 七七八
三輪山 一八〇
みを 八六三
身をしる雨 七一九
みをつぐし 六〇七
みをはやながら 九五七
身をわけて 七八三

む

むかしの香に匂ふ 一三〇
昔の手 八三九
むかしへ 二四〇
武藏野 八四九
武藏の國と下つふさ云々 四八四
むすびし水 八八
むすぼほれ 六七八
むつ言 九七七
空しきから 六〇九
むなしき空 五四六
胸はしり火 九八四
むらさきのねずりの衣 六七七
むら鳥の 六九三

め

目かれぬ 一三三
めざし 一〇二九
めでたき 一五九
めどにけづり花 五一三
めならぶ 七五九
目にみぬ人 五三四
女の親の思にて云々 八二六
めもはるに 六三二

も

もがな 四一四
もがみ川 一〇二七
もくづ 七五〇
もこそ 一八七
もじある 八四
藻鹽たれつゝ 九二四
もて出なむ 三七五
本あらのこはぎ 七一〇
もとする 六三六
本康のみこ 四一九
もとゆひ 七〇九
ものうかる 一〇二
ものうく 二〇八

物思　一三九
ものから　三二六
ものにもが　五八八
物とはなしに　三二一
物のたうび　六二三
物の名　四四九
物へまかりけるに　三〇九
ものゆゑに　一八五・六四八
物をいひつきて　四七一
もみぢつゝ　二六四
もみぢぬ　四〇五
もみぢをしむ　三六七
もゝ草　三一六
百しきを　九五七
もゝちどり　一一七
もや　一六六
もる山　三三一
もろこし　四七三
もろこしの吉野　九九三

や

やさしき　一〇〇〇
八十島かけて　四七七
やたび　一〇一三
八橋　四八三
宿　二七九
宿の梅ぞも　一三一
やどりして　一九八
やなぎか　一一六
やぶし　八五一
八重に　四七九
八重葎して　九三七
山おろしの風　三五七
やまがき　五〇五
山風に櫻吹卷き　四六一
山かづら　一〇一三
山崎　四五四
やまざくら　一三八
山里　二九〇
やまし　五一五
山下風　四三一
山した水の　八二
山科の　六八九
山たちばな　六八九
山田もる　三七三
やまと歌　五一
やまと撫子　三一四
山にのぼりて　四六〇
山のほうし　九二〇
山彦　三三八
山人　一〇一三
山姫　九〇〇
山ぶき　二〇二
山吹の花色衣　九七六
山べ　一四七
山ほとゝぎす　二二五
山わけ衣　八九九
闇のうつゝ　六七二
やよつ光　九六七
やよひ　一四七
彌生のついたち云々　六四三
彌生ばかりに云々　六二一
やよや待て　三三〇

ゆ

ゆきかひぢ　八四三
ゆきかふ　二四五
雪け　三八七
雪のふりけるを　九七
ゆきのまに〳〵　四五八
ゆきぶり　一一九
ゆくへ知らねば　九四六
ゆたのたゆたに　五六三
夕蔭　三一四
ゆふさりつかた　四五九
夕されば　三八四
ゆふだすき　五四四
夕づく夜　三七八
夕づく夜さすや　五四七
ゆふつけ鳥　五八五
ゆへる　八八七
ゆめ　六七七

よ

横ぼりふせる　一〇三一
よき　一七二
よききぬ　七五
吉野　八九
よし野川　二〇四
よし野の瀧　八九八
よしみねのつねなり　四三三
よそに　一三五
夜たゞ　三三七
四つの時こゝの返り　七八
淀　五五〇
よどかは　五三三
世と共に　六一一
よどのわかども　七六三
世にふる　一九四
世の常ならば　一八三
世の中を　六〇七
よはひ　四一三
よひ　二六五
宵ながら　二四二
よひ〳〵　六三四
よぶこ鳥　一一八
よみて入れ　九四五
よみ人しらず　八九
よめる　八七
夜やくらき　二三二
よるの衣　五九八
よるの袂　六一六
よるの錦　三六七
よるはすがら　五七七

よるべなみ　六四七
よろづ代かねて　八八四
世をうぐひす　七九〇
世をうぢ山　九四三
世をうみべた　六九〇
世を試みむ　七五七
夜をさむみ　二八七
世をやつくさむ　八八五

り

りうたむ　五一一
龍門　八九九
諒闇　八二七
綾綺殿　三三七

わ

わかえ　九六七
若草のつま　一〇四
わかず　三九〇
わがせこ　一一三
若菜　一〇六
わがならむ　九四六
わが身のから衣　七九七
わが身を　三七八
わが身をうらと　六五一
わきて　三三七
わくらばに　九二四
忘れがたみ　七二八
わすれ草　七六七
わたつみ　八八七
わたの原　四七七
わたり河　八一三
渡りはてねば　二五五
わびし　二九〇
わびしき　九五
わびしらに　五一七
わび人　三六三
わりなき　七〇三
われかはあやな　五九四
われから　七九五
われて　九九八
われとはなしに　二四〇
我にあらねばや　五七五
われも散りなむ　一六五
われをふるせる　八〇七

ゐ

井手　二〇五

を

尾　一三八
をかたまの木　五〇五
岡のやかた　一〇〇九
をぐらの山　三七九
をぐろ崎　一〇二六
筬をあらみ　七六二
をさ〳〵しく　九六七
をしげにもあるか　一五一
をしほの山　八五三
をち　四四九
をちかた人　九七二
をちこち　一一八
男山　三〇二
男山の昔　六四
小野　三六八
をのこ　二三七
斧の柄のくちし　九四九
小野の篠原　五六〇
小野千古が　四三七
をのへ　二九四
をばな　五一三
をふ　八七二
をふの浦　一〇三三
女郎花　三〇一
をみなへしあはせ　三〇五・五一〇
をりければ　九三
折りてなりけり　一三五
をりはへて　二三九
をれるばかり　三〇一
女を見て　七四

類句索引

▽この索引は、古今集の歌の上句、或は下句のみを知れる場合にその全體をもとめ、又は、その部立、作者、詞書等をもとむる便に供する爲である。

▽この索引は、古今集の歌につきて、その評釋を檢する便に供するものである。

▽この索引は、短歌にては、その初句と四句とを摘み、旋頭歌にては、その前句及び後句の初句を摘みて、これを五十音順に排列し、一々、本書『評釋』の頁數を記した。

▽同一の句二つ以上ある時は、更にその次の句を、五十音順に擧げ、上に接續の記號――を附し、下に、頁數を記した。

▽古今集中、長歌五首のみは、便宜上畧いたがなほ、その反歌は收めた。

あ

あかざりし　九五〇
あかずして
―つきのかくるる　八六四
―わかるるそでの　四六七
―わかるるなみだ　四六三
あかずちりぬる　七九一
あかずとやなく　二三五
あかずもきみを　六七三
あかずわかるる　四四二
あかつきの　七六四
あかつきばかり　六五二
あかでこそ　七二八
あかでもひとに　四七〇
あかなくに　八六四
あかぬいろかは　一三五
あかぬこころに　四三三
あきかぜに
―あふたのみこそ　八〇六
―あへずちりぬる　三五八
―かきなすことの　六一九
―こゑをほにあげ　二八九
―はつかりがねぞ　二八三
―ほころびぬらし　九七九
―やまのこのはも　七二六
あきかぜの
―ふきあげにたてる　三四二
―ふきうらがへす　八〇六
―ふきとふきぬる　八〇五
―ふきにしひより　二五一
―ふきにしひより　三二八
―みにさむければ　五九九
あきかぜは　七八三
あききぬと　二四七
あきぎりにのみ　三〇八
あきぎりの
―ともにたちいでて　四五四
―はるるときなき　六一五
―はれてくもれば　九七九
あきぎりは　三三六
あきくるかりは　五二五
あきくるよひは　二六五
あきくれど
―いろもかはらぬ　四三〇
―つきのかつらの　五三三
あきくれば　九七八
あきちかう　五一〇
あきといへば　八〇七
あきならで
―あふことかたき　三〇六
―おくしらつゆは　七六一
あきなれば　六一六
あきにはあへず　三三三
あきのきく　三四八
あきのこのはの
―ちればなりけり　三六一
―ぬさとちるらめ　三六七
あきのこのはを　三三九
あきのしぐれと　四六五
あきのたの
―いねてふことも　七九三
―ほにこそひとを　五九三
―ほのうへをてらす　五九三
あきのつき　三六〇
あきのつゆ　三三一
あきのつゆさへ　五九一
あきののに
―おくしらつゆは　三〇〇
―ささわけしあさの　六五〇
―つまなきしかの　九八六
―なまめきたてる　九七八
―ひとまつむしの　二七九
―みだれてさける　六一七
―みちもまどひぬ　二七八
―やどりはすべし　三〇三
あきののの
―くさのたもとか　三一四
―をばなにまじり　五五三
あきのやま　三六八
あきのゆふべは　五九二
あきのよの
―あくるもしらず　二七五
―つきのひかりし　二七三
―つゆをばつゆと　三三〇
あきのよは　二七六
あきのよも　六六二
あきのわかれは　四五三
あきはいろいろの　三一五
あきはかぎりと
―おもひしりぬる　三七七
―みむひとのため　三七五
あきはぎに　二九二
あきはきぬ

—いまやまがきの　五〇五
—もみぢはやどに　三五八
あきはぎの
—したばいろづく　二九六
—はなさきにけり　二九四
—はなをばあめに　四六四
—ふるえにさける　二九五
あきはぎも　二七五
あきはぎを　二九三
あきはふかくも　三三六
あきよりさきの　七八三
あきをおきて　三五一
あけたてば　五九〇
あけぬとて
—いまはのこころ　六六四
—かへるみちには　六六五
あさきせにこそ　七三一
あさぢふの　五六〇
あさつゆの　八二五
あさつゆを　五〇九
あさなあさな　五六七
あさなけに　四四四
あさぼらけ　三九八
あさみこそ　六四六
あさみどり　一一六
あしがもの　五八三
あしたづの
—たてるかはべを　八九三
—ひとりおくれて　九五六
あしたづのねに　七七七
あしたのとこぞ　六一三
あしたのはらは　三二四
あしひきの
—やましたみづの　五四八
—やまたちはなれ　五〇四
—やまだのそほつ　九八二
—やまのまにまに　九一八
—やまべにいまは　八二六
—やまべにをれば　五三三
—やまほととぎす　三二九
—やまほととぎす　五五四
あしべより　八〇四
あすかがは
—ふちはせになる　七〇四
—ふちにもあらぬ　九四八
あすさへふらば　一〇八
あすしらぬ　八三三
あだなりと　一四八
あだなるものと　五〇八
あだにはならぬ　五三六
あたらしき　一〇〇五
あぢきなし　五一九
あづさゆみ
—いそべのこまつ　八八四
—おしてはるさめ　一〇八
—はるたちしより　二〇七
—はるのやまべを　一九六
—ひきののつづら　七一六
—ひけばもとする　六三六
あづまぢの　六三五
あとはかもなく　三九五
あないひしらず　九九九
あなうのはなの　九一六
あなうめに　五〇二
あなかしがまし　九七八
あなこひし　七一一
あなたおもてぞ　八六四
あなたおもても　八五九
あはずして　六五二
あはずばなにを　五四一
あはでこしよぞ　六五〇
あはですぐせる　六三七
あはぬよの　六四九
あはれあならと　八七五
あはれてふ
—ことこそうたて　九一〇
—ことだになくば　五五七
—ことのはごとに　九二一
—ことをあまたに　二一七
あはれとはおもふ　八八一
あはれとも　七九四
あはれとやいはむ　九一三
あひくるみをば　五一九
あひにあひて　七六〇
あひみずば　六九八
あひみぬさきに　四六六
あひみぬも　七九七
あひみねば　七六三
あひみまく　九八四
あひみむことは　一八二
あふからも　五〇四
あぶくまに　一〇二三
あふことなぎに　六五五
あふことの
—いまははつかに　九九三
—なぎさにしよる　六五四

—もはらたえぬる　七九九
あふことは
—くもゐはるかに　五四〇
—たまのをばかり　六九三
あふことを　八〇九
あふごなきこそ　九九七
あふさかの
—あらしのかぜは　九四六
—せきしまさしき　四四二
—せきにながるる　五八六
—ゆふつけどりに　七四六
—ゆふつけどりも　五八五
あふにしかへば　六四〇
あふひとがらの　六六三
あふまでの
—かたみとてこそ　七五〇
—かたみもわれは　七四九
あふみのや　一〇二三
あふみより　一〇〇八
あふをかぎりと　六三七
あまぎるゆきの　四〇〇
あまぐもの　七八〇
あまつかぜ　八五四
あまつそらなる　五四二
あまつほしとぞ　三三九
あまとぞわれは　八九一
あまのがは
—あさせしらなみ　二五五
—くものみをにて　八六三
—もみぢをはしに　二五三
あまのがはらに
—おひぬものゆゑ　三〇六
—たたぬひはなし　二五一
—われはきにけり　四九三
あまのかはらを　九七六
あまのかる　七九五
あまのかるもに　九〇六
あまのすむ　七三六
あまのすむてふ　八〇二
あまのとわたる　二八九
あまのながせる　三七〇
あまのなはたぎ　九二三
あまのはら
—ふみとどろかし　七一五
—ふりさけみれば　四七三
あまびこの　九二五
あめとふるとも　三七二
あめにより　八九二
あめふれど　三三二
あめふれば　三三四
あめもなみだも　六六五
あめもふらなむ　七七四
あやなくあだの　三〇四
あやなくけふや　五三五
あやなくて　六五六
あやめもしらぬ　五三九
あらたまの　四〇四
あらたまれども　一一七
あらをたを　八〇二
ありあけの　六五二
ありあけのつきを　七〇八
ありしよりけに　七二八
ありそうみの　八〇三
ありてよのなか　一五九
ありとはきけど　五一五
ありとみて　五一三
ありとやここに　一三一
ありなばひとに　一六四
ありぬやと　九八二
ありはてぬ　九二七
あるをみるだに　八三三
あれたるやどに　三〇九
あれどもきみを　五四六
あれにけり　九四四
あわゆきの　五九四
あわをかたまの　五〇五
あをやぎの　一一五
あをやぎを　一〇一八

い

いかがさきちる　五三〇
いかがつらしと　五〇六
いかならむ　九一八
いかにせむとか　六七五
いかにせよとか　五三三
いかにちれとか　一七二
いかにねしよか　五六九
いかにふけばか　七七六
いきうしといひて　四五六
いくそばくわが　五二四
いくばくの　九七六
いくよかへしと　八八三
いくよしも　九〇六
いけにすむ　六九二

いけのそこにも　三四七
いざけふは　一八〇
いざここに　九四一
いざこころみむ　五七一
いざさくら　一六四
いささめに　五一八
いざとこたへよ　一〇三八
いざやどかりて　一五一
いしはしる　一四一
いせのあまの　七〇一
いせのうみに　五六四
いせのうみの　五六五
いそのかみ
—ふりにしこひの　九八〇
—ふるからをのの　八六七
—ふるきみやこの　三三三
—ふるのなかみち　六九九
いそのなみわけ　八五六
いたくなわびそ　一三七
いたづらに
—すぐるつきひは　四一八
—ゆきてはきぬる　六四八
いたらぬさとも　八六二
いつかちとせを　三四五
いつかはゆきの　九四〇
いづくにか　九一五
いづくをみつの　九三七
いづこをしのぶ　八〇〇
いつしかと　九七六
いつしかとのみ　二六〇
いつとても　五九二
いつともわかぬ　五四七
いつのひとまに　一三三
いつのまに　三一〇
いつはとは　二六五
いつはりと　七二五
いつはりの
—なきよなりせば　七二五
—なみだなりせば　六一三
いつまでか　一八二
いつまでわがみ　五五五
いづらはあきの　九七七
いづれのひとか　九七八
いづれみやこの　四八八
いづれをうめと　四〇三
いづれをさきに　八三二
いづれをみちと　四六九
いでひとは　七二四
いでやこころは　九八九
いでゆかむ　九九〇
いでわれを　五六三
いとかくかたき　七六七
いとせめて　五九八
いとどふかくさ　九三四
いとによる　四八九
いとはるる　九九一
いとはれてのみ　七五八
いとはやも　二八五
いなおほせどりの　三七三
いなにはあらず　一〇二七
いなばそよぎて　二五〇
いなばのそよと　六一八
いなばのつゆに　三七四
いなやおもはじ　九八八
いにしへに
—ありきあらずは　四二〇
—なほたちかへる　七四一
いにしへの
—しづのをだまき　八六九
—のなかのしみづ　八六八
いぬがみの　一〇三八
いぬるよの　六六八
いのちだに　四五四
いのちとて　五一七
いのちにも　六三五
いのちやは　六四〇
いはでこころに　五八六
いはねばこそあれ　五五一
いはのかけみち　九一七
いはふこころは　四三四
いはほとなりて　四〇九
いはほにもさく　三九〇
いはまゆく　七〇一
いまいくか　五〇三
いまいくかありて　一〇五
いまこそあれ　八七〇
いまこむと
—いひしばかりに　七〇八
—いひてわかれし　七七一
いまさらに
—とふべきひとも　九三七
—なにおひづらむ　九二〇
—やまへかへるな　二二九
いましはと　七七二
いまぞしる　九三二
いまぞなくなる　二八六

いまぞのやまを　五〇九
いまはおもひぞ　七八五
いまはかぎりの
—いろとみつれば　三三四
—かどでなりけり　八四二
いまはこじと　七七三
いまはとて
かへすことのは　七四三
—きみがかれなば　七九一
—わがみしぐれに　七七九
—わかるるときは　二六〇
いまははや　六三八
いまはわがみを　九九四
いまひとしほの　一一三
いまもかも　二〇二
いまもなかなむ　二一七
いまよりは
—つぎてふらなむ　三八五
—うゑてだにみじ　三一三
いもしるらめや　五四三
いもとわがぬる　二四三
いやとほざかる　八〇四
いやはかなにも　六六八
いよいよみまく　八七七
いりにしひとの　三九三
いるがごとくも　二〇七
いろかはる　三五〇
いろこそみえね　一三九
いろさへにこそ　三五二
いろどるきぎも　二八五
いろなしと　八五〇
いろにはいでじ　一八七
いろにはいでじと　五五八
いろにやこひむ　五五三
いろはかはらず　一七五
いろみえで　七九〇
いろもかはらぬ　七〇五
いろもかも
—おなじむかしに　一四四
—むかしのこさに　八三三
いろもなき　七三七
いろよりも　一三一
いろをもかをも　一三六

う

うきぐさの　五八六
うきごとあれや　九三八
うきごとしげく　九二七
うきごとを　二八九
うきたるこひも　六二三
うきておもひの　五六七
うきながら　八〇九
うきふしごとに　九二一
うきふししげき　九二〇
うきめのみ　七六〇
うきめをば　一〇三七
うきめをみつの　九三六
うきよには　九二七
うきよのなかに　二四〇
うきよのなかは　九一八
うきよのなかを　八三五
うぐひすさそふ　一〇〇
うぐひすだにも　九八
うぐひすとのみ　四九九
うぐひすの
—かさにぬふてふ　一三四
—こぞのやどりの　九九二
—たによりいづる　一〇一
—なくのべごとに　一八八
うすくやひとの　七二七
うたたあるさまの　九七九
うたたねに　五九八
うたてにほひの　一三五
うちいづるなみや　九九
うちつけに
—こしとやはなの　五一三
—さびしくもあるか　八三一
うちわたす　九七一
うちわびて　五八七
うつしこころは　七三四
うつせみの
—からはぎごとに　五一五
—よにもにたるか　一六一
—よのひとごとの　七二七
うつせみのよぞ　八一七
うつせみは　八一五
うつつあるものと　八一九
うつつにだにも　五一六
うつつには　六八〇
うつつにひとめ　六八一
うつふしぞめの　一〇〇四
うつりがこくも　八五九
うつりもゆくか　七七九
うつろはむとは　七三七

うつろはむとや　一五七
うつろひやすき　七六八
うつろひゆくを　二六四
うつろふあきに　三四一
うつろふいろに　一七八
うつろふからに　三五一
うつろふことも　七八九
うつろふはなに　一八八
うばたまの
—ゆめになにかは　五一六
—わがくろかみや　五三三
うべやまかぜを　三三一
うめがえに　九二
うめがかを　一三四
うめのかの　四〇二
うめのはな
—さきてののちの　一〇〇二
—それともみえず　四〇〇
—たちよるばかり　一三三
—にほふはるべは　一三七
—みにこそきつれ　九七五
うらこぐふねの　一〇二四
うらさびしくも　八三四
うらちかく　三九二
うらみてのみぞ　六五四
うらみても　八〇一
うらみてもなほ　八〇六
うらみむとのみ　七三六
うらめづらしき　二四九
うれしきを　八四七
うゑけむきみが　二〇三
うゑけむひとの　八三三
うゑしうゑば　三三七
うゑしとき　三四一
うゑていにし　七七五

え

えぞしらぬ　四四六
えだもたわわに　二九八
えだよりも　一六八

お

おいずばけふに　八八〇
おいせぬあきの　三四〇
おいにけらしな　九〇一
おいぬとて　八八〇
おいぬれば　八七七
おいらくの　八七四
おきつなみ　八九〇
おきてしゆけば　四四三
おきてわかれし　六六六
おきのゐて　一〇三六
おきひむときや　五三五
おきふしよるは　六三二
おきへにも　五八二
おきまどはせる　三四九
おきもせず　六四三
おきゐてものを　九五〇
おくしらつゆの　五一三
おくとはなげき　五四四
おくやまに　二九一
おくやまの
—いはがきもみぢ　三五三
—すがのねしのぎ　五九五
おくれむとおもふ　九九三
おけるくさばも　五一〇
おしてるや　八七三
おそくいづる　八五九
おちたぎつ　九〇一
おちてもみづの　一六八
おつとはみれど　九〇三
おつるもみぢの　三六〇
おとにききつつ　五四〇
おとにぞひとを　六九八
おとにのみ　五三一
おとにはたてじ　五四九
おとにもひとの　七六五
おとにやあきを　三三三
おとはやま
—おとにききつつ　五三三
—けさこえくれば　三二一
—こだかくなきて　四五三
おなじえを　三三七
おなじこころに　五八八
おなじひとにや　七三九
おのがきぬぎぬ　六六三
おのがすむのの　三〇七
おのがものから　七四三
おほあらきの　八七二
おほかたの　二六三
おほかたは
—つきをもめでじ　八六一

—わがなもみなと　六九〇
おほかるのべに　三一〇
おほぞらの　三八三
おほそらは　七四八
おほぞらを　八六六
おぼつかなくも　一一八
おほぬさと　七三一
おほぬさの　七二〇
おほはらや　八五三
おもかげにのみ　一〇三六
おもはぬかたに　七二三
おもはぬなかぞ　七六九
おもはぬひとを　五七四
おもはむひとに　四四九
おもひいづる
—ときはのやまの　三二七
—ときはのやまの　五五一
おもひいづるぞ　六六七
おもひいでて　七四二
おもひきや　九三三
おもひくらしの　七七一
おもひけむ　九九〇
おもひしこころ　七三二
おもひしらずも
—とくるひもかな　七九七
—まどふてふかな　五〇七
おもひせく　九〇三
おもひそめてむ　七〇四
おもひたちぬる　四四四
おもひたはれむ　三一六
おもひつきせぬ　九〇七
おもひつつ　五九七
おもひのいろの　九八二
おもひのみこそ　五三六
おもひはかけじ　三三六
おもひはなれぬ　九一〇
おもひみだれて　五六八
おもひやる
—こしのしらやま　九四一
—さかひはるかに　五七五
おもひやれども　五四六
おもふてふ
—ことのはのみや　七〇五
—ひとのこころの　九八八
おもふてふこと　五七二
おもふどち
—はるのやまべに　二〇六
ひとりひとりが　六七九
—まとゐせるよは　八四六
おもふとも
—かれなむことを　七九一
—こふともあはむ　五六二
おもふなかをば　七一五
おもふには　五五八
おもふはやまの　二八〇
おもふひとこそ　九一九
おもふより　七三五
おもへどえこそ　七三〇
おもへども
—おもはずとのみ　九八八
—なほうとまれぬ　九八五
—ひとめづつみの　六八二
—みをしわけねば　四四一
おろかなる　六〇一

か

かがみにみゆる　八〇一
かがみのかげに　五三三
かがみやま　八七六
かからぬやまの　九八五
かがりびに　五七九
かがりびの　五八〇
かかれるえだに　九二
かきくらし
—ことはふらなむ　四六八
—ふるしらゆきの　六〇六
かきくらす　六七二
かきほにさける　七一一
かぎりなき
—おもひのままに　六八〇
—きみがためにと　八四八
—くもゐのよそに　四三六
かぎりなく　四六八
かくこそはみめ　七〇一
かくこひむ　七一四
かくしつつ
—とにもかくにも　四一三
—よをやつくさむ　八八五
かくてもへぬる　七九五
かくばかり
—あふひのまれに　五〇六
—をしとおもふよを　二六七
かくるとすれど　六九二
かくれぬの　九八七

かけておもはぬ　六二四
かけてねにのみ　八三七
かけてのみやは　七八二
かげばかりのみ　七六六
かげみしみづぞ　三八三
かけりても　一〇三五
かげろふの　七三八
かさへなつかし　二〇三
かしらのゆきと　九四
かずかずに
―おもひおもはず　七一九
―われをわすれぬ　八三九
かすがのに　四二四
かすがのの
―とぶひののもり　一〇五
―ゆきまをわけて　五三七
―わかなつみにや　一一〇
かすがのは　一〇四
かずさへみゆる　二六九
かずはたらでぞ　四八七
かすみたち　九七
かすみたつ　一八七
かぜぞたよりの　五三二
かぜのうへに　九四七
かぜのおとにぞ　二四七
かぜのまにまに　七八〇
かぜはこころに　一七三
かぜふくごとに
―うきしづむたま　五〇二
―ものおもひぞつく　六三三
かぜふけど　九〇二
かぜふけば
―おきつしらなみ　九五一
―おつるもみぢば　三七二
―なみうつきしの　六九一
―みねにわかるる　六三九
かぜよりほかに　二八一
かぜをまつごと　七一〇
かぞふれば　八七三
かたいとを　五四一
かたちこそ　八五八
かたへすずしき　二四五
かたみこそ　七五〇
かぢにあたる　五三〇
かづけども　五〇二
かつこえて　四五七
かつみながらに　四四〇
かつみるひとに　六九七
かつみれど　八六二
かなしきものと　二六三
かねてうつろふ　三三五
かねてぞみゆる　一〇二三
かねてより　六五五
かのかたに　五三一
かはかぜさむし　四七九
かはかぜの　二四八
かはづなく　二〇五
かはとみながら　六八二
かはのせに　六〇六
かひがねを
―さやにもみしが　一〇三一
―ねごしやまごし　一〇三三
かへすがへすぞ
―つゆはそめける　五一六
―ひとはこひしき　五六八
かへすははなの　四六三
かへるがへるも　八七九
かへるさまには　四五七
かへるみちにし　三一〇
かへるやま
―ありとはきけど　四三九
―なにそはありて　四五〇
かみがきの　一〇一一
かみぞしるらむ　四二一
かみだにけたぬ　九八三
かみなづき
―しぐれにぬるる　八二三
―しぐれのあめの　九七四
―しぐれふりおけ　九五四
―しぐれもいまだ　三二五
かみなひの
―みむろのやまを　三六六
―やまをすぎゆく　三六九
かみのみまへに　一〇一一
かみはうけずぞ　五五六
かみよのことも　八五二
かめのをの　四一七
かよへるそでの　六一一
からくもわれは　八七三
からくれなゐに
―うつろひにけり　六三八
―みづくくるとは　三六四
からくれなゐの　三二七
からごろも
―きつつなれにし　四八三
―たつひはきかじ　四四三

―なればみにこそ　七八二
―ひもゆふぐれに　五六八
からはほのほと　一〇三五
かりくらし　四九三
かりごもの　五四三
かりそめの　八四二
かりてほす　九〇四
かりにだにやは　九三五
かりにのみこそ　七六〇
かりのくる　九〇七
かりのなみだや　三三〇
かれなであまの　六五一
かれにしひとは　四〇三
かれはてむ　七〇四
かれゆくきみに　七一八
かれるたに　三七五
かをたづねてぞ　一三八
かをだににほへ　四〇一
かをだにぬすめ　一七六

き

きえあへぬゆきの　九三
きえかへりてぞ　六〇五
きえずはありとも　一四九
きえてものおもふ　六〇六
きえぬものから　八八六
きえはつる　四八九
きぎのこのはの　三六五
きこゆるそらに　二七〇
きしにおふてふ　一〇四〇
きしのひめまつ　八八二
きたへゆく　四八七
きてもとまらぬ　四五〇
きにもあらず　九三一
きのふけふとは　八四一
きのふこそ　二五〇
きのふといひ　四〇六
きのふのふちぞ　九〇五
きみがうゑし　八三五
きみがおもひ　九三九
きみがかたみと　四六七
きみがこころに　七六六
きみがこころは　五八九
きみがこぬよは　七六四
きみがさす　九七四
きみがため　一〇九
きみがちとせの
―ありかずにせむ　四二一
―かざしとぞみる　四一九
きみがなも　六七四
きみがみかげに　一〇三〇
きみがみかげの　八二七
きみがみよをば　四一一
きみがやちよに　四一三
きみがゆききを　七四六
きみがゆく　四五八
きみがよに　九六五
きみがよは　一〇二一
きみがよまでの　八一四
きみがわかれし　八三三
きみがわかれを　四五二
きみこずば　七〇九
きみこふる
―なみだしなくば　六一〇
―なみだのとこに　六〇七
きみしのぶ　二七七
きみといへば　六九九
きみならで　一三六
きみにこひつつ　五五四
きみにつかへむ　一〇二一
きみにより　六九四
きみまさで　八三四
きみやこし　六七〇
きみやこむ　七〇七
きみわたりなば　二五二
きみをおきて　一〇二八
きみをおもひ　八八九
きみをのみ
―おもひこしぢの　九四〇
―おもひねにねし　六三五
きみをばまして　四六四
きみをばやらじ　一〇三三
きよたきの　八九九
きりぎりす　二七四
きりたちて　三三四
きりたちわたり　二五四

く

くさのはつかに　五三七
くさのまくらに　四九〇
くさはみながら　八四八
くさふかき　八二八

くさむらごとに　二七六
くさもきも　三二三
くちしところぞ　九四九
くべきほど　五〇〇
くもかくせども　八六六
くものあなたは　三九六
くものあはだつ　一〇三七
くものいづこに　二四二
くものうへまで　九五六
くものふるまひ　一〇三九
くもはれぬ　九九四
くももなく　七五八
くもりひの　七三七
くもるときなく　四三一
くもゐにのみも　六一九
くもゐにも　四四七
くらせるよひは　五七六
くらぶのやまも　二七三
くるあきごとに　三一一
くるしきものと　五八七
くるしとのみや　五六五
くるとあくと　一三三
くるるかと　三三五
くれなばなげの　一八〇
くれなゐに　九九一
くれなゐの
―いろにはいでじ　六八三
―はつはなぞめの　七三三
―ふりでつつなく　六三七
くれなゐふかき　三六四

け

けさきなき　三一一
けさなくこゑの　二八二
けさはしも　六六七
けさはつかりの　七七五
けさふくかぜに　二八四
けぬがうへに　三九九
けぬとかいはむ　五九五
けふこずは　一四九
けふこそさくら　一五〇
けふのみと　三一三
けふはひとこそ　八三三
けふはまちみて　一六六
けふひとを　一〇三七
けふよりは　二六〇
けぶりたち　五一八
けふわかれ　四三八

こ

こえぬまは　六三一
こがくれたりと　九六五
こきちらす　八九六
こけのたもとよ　八二九
ここぞとまりと　八九四
ここらのとしを　四二六
ここらのひとに　一〇〇〇
こころあてに　三四九
こころありとや　七三〇
こころがへ　五八七
こころから　四九九
こころこそ　七八九
こころざし　九三
こころしあきの　七三五
こころぞともに　五三七
こころづがらや　一七一
こころづくしの　二六一
こころにしみて　四四九
こころのあきに　八〇五
こころのうらぞ　七一四
こころのゆきて　四三五
こころばかりは　四三七
こころはきえぬ　一〇〇一
こころはきみが　六四七
こころばせをば　五一八
こころははなに　八五八
こころひとつを
―さだめかねつる　五六四
―たれによすらむ　三〇五
こころぼそくも　四八九
こころよわくも　七九七
こころをいづち　六〇九
こころをきみに　四四一
こころをぞ　七〇三
こころをぬさと　四四八
こころをひとに　五三九
こしときと　一〇三六
こじまのさきの　二〇二
こしをにほひぞ　五一一
こずゑはるかに　三一一
こぞとやいはむ　八七
こぞのなつ　二三六

こたへするまで　五七三
こたへぬやまは　五八七
こづたへば　一九一
こてふににたり　七〇八
ことしげくとも　七一七
ことしのみちる　一九二
ことしはいたく　八七三
ことしばかりは　八一六
ことしより　一三六
ことぞともなく　六六二
ことなしぶとも　六九三
ことならば
―おもはずとやは　九八八
―きみとまるべく　四六二
―ことのはさへも　八三六
―さかずやはあらぬ　一六九
ことにいでて　六三四
ことのはさへに　七七九
こぬひとたのむ　七六三
こぬひとを　七七六
このかはに　三八七
このさとに　一六〇
このしたつゆは　一〇二六
このたびは　四九五
このはにふれる　九一九
このひともとは　一八四
このまより　二六一
こひこひて
―あふよはこよひ　二五四
―まれにこよひぞ　六六一
こひしかるべき　五〇二
こひしきが　九八一
こひしきごとに　七四一
こひしきときの　一三五
こひしきに
―いのちをかふる　五七〇
―わびてたましひ　六〇九
こひしくば
―したにをおもへ　六七七
―みてもしのばむ　三五七
こひしとは　七一三
こひしなば　六三一
こひしねと　五七七
こひすれば　五七九
こひせじと　五五六
こひのみだれの　五五七
こひわたるまに　八〇九
こひわびて　六〇二
こひをしこひば　五六六
こふれども　七六八
こほれるなみだ　九〇
こまなべて　一九三
こまのあしをれ　七四五
こまもすさめず　八七二
こむといふなる　四一六
こむよにも　五七二
こめやとは　七七二
こよひこむ　二五九
こよろぎの　一〇二九
こりずまに　六五八
こりぬこころを　六三八
これなむそれと　五〇一
ころもにかかり　七七二
ころものそでの　八二六
ころもへずして　七一三
こゑうちそふる　四三六
こゑきくときぞ　二九一
こゑするかたに　二七八
こゑたえず　二一〇
こゑのうちにや　三七八
こゑのかぎりは　二三九
こゑばかりこそ　二三三
こゑはして　二二八
こゑふりたてて　二三五
こゑをだに　八四〇

さ

さかさまに　八七五
さかしらに　九九二
さかゆくときも　八七〇
さきそめし
―ときよりのちは　九二三
―やどしかはれば　三五三
さきだたぬ　八二一
さきてとくちる　九三九
さくとみしまに　一六一
さくはなは　一八五
さくらいろに　一五二
さくらちる　一六三
さくらばな
―さきにけらしも　一四五
―ちらばちらなむ　一六一
―ちりかひくもれ　四一六
―ちりぬるかぜの　一七四

ーとくちりぬとも　一七〇
ーはるくははれる　一四七
さけるさかざる　一七九
ささのくま　一〇一六
ささのはに
ーおくしもよりも　六〇五
ーおくはつしもの　六八五
ーふりつむゆきの　八七一
さすがにめには　七八〇
さそふみづあらば　九〇九
さつきこば　二一八
さつきまつ
ーはなたちばなの　二一九
ーやまほととぎす　二一七
さつきやま　六一五
さてもやうきと　七五七
さとはあれて　三一八
さとびとの　七一八
さとをばかれず　九三二
さほのやまべを　三三五
さほやまの
ーははそのいろは　三三六
ーははそのもみぢ　三五二
さみだれに　三三一
さみだれの　二三六
さむしろに　七〇六
さやくしもよを　九九二
さよなかと　二七〇
さよふけて
ーあまのとわたる　六七三
ーなかばたけゆく　五一七
さらばなべてや　八五五
さりとてひとに　五七九

し

しかのなくねに　二九〇
しかもつれなく　八七五
しかりとて　九〇七
しきしまの　七一三
しきたへの　六二六
しぐれつつ　八〇五
しぐれのあめを　三八一
しげきのべとも　八三五
しげきわがこひ　六三二
しげさまされど　六〇三
したにかよひて
ーこひしきものを　六三四
ーこひはしぬとも　六八三
したにながれて　六三三
したにのみ　六八八
したのおびの　四七二
したばのこらず　三三一
したはれて　四五七
したゆふひもの　六七八
しづごころなく　一七〇
しでのたをさを　九七六
しでのやま　七八四
しにはやすくぞ　五七〇
しぬとぞただに　七一三
しぬるいのち　六〇八
しののめの
ーほがらほがらと　六六三
ーわかれををしみ　六六五
しのびにそでは　六一三
しのぶれど　六六一
しのぶれば　五七二
しばしみづかへ　一〇一六
しはつやま　一〇一〇
しひてゆく　四六九
しほのやま　四一一
しまがくれゆく　四八〇
しまこぎかくる　一〇一〇
しみはつくとも　六八五
しもとゆふ　一〇〇七
しものたて　三六三
しもやたび　一〇一三
しらかはの　六八七
しらくもに　二六九
しらくもの
ーこなたかなたに　四四八
ーたえずたなびく　九一三
ーやへにかさなる　四四九
しらずやひとを　五八三
しらたまと　六二八
しらつゆの　三三九
しらつゆも　三三一
しらつゆを　五〇九
しらなみに　三七〇
しらなみの　五三三
しらやまの　四八九
しらゆきの
ーところもわかず　三九〇
ーともにわがみは　一〇〇一
ーふりしくときは　四三一

ーふりてつもれる　三九四
ーやへふりしける　八七九
しりてまどふは　九九五
しりにけむ　九一四
しるしなき　一九二
しるしらぬ　五三六
しるといへば　六九五
しるもしらぬも　一〇三一

す

すがるなく　四三五
すぎがてにのみ　二〇一
すきものとのみ　一〇〇二
すぐるよはひや　八七五
すすきおしなみ　三八五
すまのあまの
ーしほやきごろも　七六二
ーしほやくけぶり　七三三
すみけむひとの　九四四
すみぞめの　八二六
すみのえの
ーきしによるなみ　六〇二
ーまつほどひさに　七七七
ーまつをあきかぜ　四二六
すみよしと　八九二
すみよしの　八八三
すむひとさへや　三九四
すむわれさへぞ　三六八
すめばすみぬる　九一三
するがなる　五四六
すゑさへよりこ　一〇一五
すゑつむはなの　五五二
すゑのまつやま
ーこすかとぞみる　三九二
ーなみもこえなむ　一〇二八

せ

せきのこなたに　五三三
せにかはりゆく　九四八
せみのこゑ　七二七
せみのはの
ーひとへにうすき　九八七
ーよるのころもは　八五九
せむかたなみぞ　九八一
せをせけば　八二〇

そ

そこともいはぬ　二〇六
そこにかよふと　六八四
そこのかげさへ　二〇四
そこひなき　七三一
そでかとのみぞ　三四六
そでのみぬれて　六四五
そではかわかじ　四六八
そでひぢて　八八
そでふりはへて　一一〇
そのそこに　九七一
そへにとて　九九九
そまびとは　一〇三五
それかあらぬか　二三六
それをだに　七九九
そをだにのちの　七二八

た

たえずなみだの　八二六
たえずゆく　七三〇
たえてつれなき　六二九
たえてみだれむ　六八八
たえぬこころの　七二三
たがあきに　三〇六
たがさとに　七二三
たがそでふれし　一三一
たがたまづさを　二八三
たがために　八九八
たがための　三三五
たがぬぎかけし　三一二
たがまことをか　七二五
たがみそぎ　九五三
たぎつこころを　五四八
たぎつせに　六二三
たぎつせの
ーなかにもよどは　五五〇
ーはやきこころを　六八三
たきのおとには　六七六
たきのしらたま　四一七
ただいつはりに　九九六
ただここにしも　七二三
たたまくをしき　八四六

たたるにわれは　九八〇
ただわびひとの　八二三
たちいでてきみが　九五六
たちかくすらむ　一四四
たちかくれつつ　九八八
たちかへり　五三三
たちさかゆべき　一〇一三
たちどまり　三七二
たちなばみゆき　三九九
たちなむのちは　四三九
たちぬはぬ　八九九
たちわかれ　四三三
たちわかれなば　四三九
たちゐのそらも　六一五
たつことやすき　二一三
たづぞなくなる　一〇〇八
たつたがは
—にしきおりかく　三八一
—もみぢばながる　三五五
—もみぢみだれて　三五四
たつたがはにぞ　三六九
たつたのやまに　九五三
たつたのやまの　一九〇
たつたひめ　三六七
たづぬるひとも　七七八
たづねくればぞ　八八九
たつのとはやく　八三八
たてれをれども　九八一
たなばたつめの　二五三
たなばたに　二五八
たなびくやまの　一八六
たにかぜに　九九
たねしあれば　五六六
たのむかげなく　三六三
たのめこし　七四三
たのめしことぞ　六三八
たのめつつ　六三八
たはぶれにくき　九八二
たびゆくひとを　四三五
たまかづら
—いまはたゆとや　七六五
—はふきあまたに　七三三
たまくしげ　六六七
たまだれの　八五六
たまにもぬける　一一六
たまのゆくへを　五一五
たまのをばかり　六〇八
たまぼこの　七四四
たみののしまに　八八八
たむけには　四九七
たもとのみこそ　六二七
たもとゆたかに　八四七
たもとより　五〇一
たよりにも　五三九
たらちねの　四三七
たれかことごと　四〇二
たれかはるを　一八五
たれかまさると　三三九
たれかわらびと　五一八
たれこめて　一六七
たれしかも　一四四
たれにおほせて　一九一
たれによそへて　六七九
たれみよと　八三八
たれをかも　八八五
たれをまつむし　二七九
たをりてもこむ　一四一

ち

ちぎりけむ　二五六
ちぐさにものを　六一七
ちぢのいろに　七三五
ちとせのかげに　四二三
ちとせのさかも　四一五
ちとせのためし　四二〇
ちとせをかねて　一〇〇五
ちどりなく　四二九
ちのなみだ　八一四
ちはやぶる
—うぢのはしもり　八八一
—かみなひやまの　三二六
—かみのいがきに　三三三
—かみのきりけむ　四一五
—かみよもきかず　三六四
—かものやしろの　五四四
—かものやしろの　一〇三四
ちよもとなげく　八七九
ちらぬかげさへ　三七二
ちらねども　三三四
ちりかかるをや　一三二
ちりかふはなに　一九七
ちりなむのちぞ　一五三
ちりならぬなの　六九五
ちりぬとも　一三五

ちりぬれば
—こふれどしるし　一五〇
—のちはあくたに　五〇七
ちりのまがひに　一六〇
ちりをだに　二四三
ちるといふことは　一三六
ちるとみて　一三五
ちるはなごとに
—たぐふこころか　三一一
—ぬきてとどめむ　一九五
ちるはなの　一八九
ちるはなを　一九四
ちるまをだにも　一六七
ちるををしまぬ　一七四

つ

つきかげに　六三〇
つきぐさに　三一七
つきふきかへせ　五一七
つきみれば　二七一
つきやあらぬ　七五三
つきよには
—こぬひとまたる　七七四
—それともみえず　一三八
つきよよし　七〇八
つくばねの
—このもかのもに　一〇三〇
—このもとごとに　九〇八
—みねのもみぢば　一〇三一
つつめども　六〇〇
つづりさせてふ　九七九
つねなきものと　六三一
つねよりことに　六二〇
つのくにの
—なにはおもはず　七一三
—なにはのあしの　六三三
つひにはいかが　一〇〇一
つひにもみぢぬ　四〇五
つひにゆく　八四一
つひによるせは　七三一
つひにわがみを　七八七
つまこふる　三〇七
つまもこもれり　一〇四
つもればひとの　八六一
つゆながら　三四〇
つゆならぬ　六一三
つゆをなど　八四一
つらきひとより　七八四
つらづゑのみぞ　九九七
つらぬきかくる　三〇〇
つるかめも　四二三
つれづれの　六四五
つれなきひとの　七九二
つれなきひとも　六三〇
つれなきひとを
—まつとせしまに　七七〇
—むかしとおもはむ　五七二
つれなさを　七九七
つれもなき
—ひとをこふとて　五七三
—ひとをやねたく　五四四
つれもなく　七八三

て

てごとにをりて　一四二
てもふれで　六三三
てるひのくれし　八二八
てるひのひかり　三五三

と

ときしもあれ　八三三
ときしもわかぬ　八四八
ときすぎて　七八五
ときぞともなく　六一四
ときはなる　一一三
としごとに
—あふとはすれど　二五七
—もみぢばながす　三七八
としにひとたび　二五六
としにまれなる　一四八
としのうちに　八七
としのおもはむ　一〇〇〇
としのをながく　二五八
としふるひとぞ　一四四
としふれば　一三八
としへぬるみは　八七六
としをへて
—きえぬおもひは　六二六
—すみこしさとを　九三四
—はなのかがみと　一三三

—またもあひみむ　九七三
とどむべき　三一一
とどめあへず　八七五
とどめおきてば　四一三
となりのかたに　九九〇
とはにあひみむ　七一三
とびたつきじの　九八六
とぶとりの　五八五
とぶらひきませ　九四二
とへどこたへず　九七五
とめむとめじは　四六〇
とりとむる　八七五
とりよりさきに　六六五
とわたるふねの　八四五

な

なかがきよりぞ　九八〇
ながきおもひは　二七四
ながくやひとを　六五二
ながしとも　六六三
なかぞらにのみ　五四〇
なかぬかぎりは　九八
ながらのはしと　八七〇
ながるるみづに　一〇三七
ながるるみづの　八二一
ながれいづる　五三五
ながれてこひむ　五五一
ながれてしたに　五八〇
ながれてとだに　八〇九
ながれてなほも　七八六
ながれては　八一〇
ながれてはやき　四〇六
ながれてふかき　七三一
ながれてよに　六八七
ながれもあへぬ　三七一
なきこそわたれ
—あきのうけれぱ　九〇四
—あきのよなよな　二八九
なきこふる　六七九
なきつるはなを　一八四
なきてわたると　七四二
なきとこにねむ　八四〇
なきとむる　二〇八
なきなぞとだに　七九八
なきなとりては　六五五
なきひとの　八三七
なきわたる　二九六
なくなみだ　八一三
なくなるこゑの　五〇〇
なくなるこゑは　一〇三
なくねそらなる　六一五
なくひとこゑに　三三四
なくゆふかげの　三一四
なくゆふぐれは　七七二
なげかむためと　八〇一
なげきくはる　九四五
なげきこる　九九七
なげきをば　九九八
なけどもいまだ　九二
なしとこたへて　八七四
なぞいろにいでて　三〇六
なぞよのなかの　九八八
なぞわがこひの　九八六
なつぐさの　五三三
なつとあきと　二四五
なつなれば　五五五
なつのよの　二三四
なつのよは　二四二
なつひきの　七一七
なつむしの　五九〇
なつむしを　六二九
なつやまに
—こひしきひとや　三三五
—なくほととぎす　二三五
などいひしらぬ　六六四
などかこころに　五九三
などかなみだの　七九四
などかほにいでて　五九四
などかわがみの　九一七
などほととぎす　三三三
なとりがは　六七五
などわがこひの　五五〇
なにおふみやの　九五四
なにかその　九九五
なにかはつゆを　二四一
なにかわかれの　四五四
なにこそきみを　八九〇
なにしおはば　四八五
なにしかひとを　六三五
なににふかめて　七六三
なにはかくれぬ　八九二
なにはがた
—うらむべきまも　九三七
—おふるたまもを　八九一
—しほみちくらし　八八八

なにはなる　九九四
なにひとか　三一一
なにめでて　三〇一
なにやまびめの　八九九
なにをうしとか
—ひとのかるらむ　七九三
よただなくらむ　二三六
なにをさくらに　一五八
なにをして　一〇〇〇
なびくあさぢの　七三五
なべてくさばの　八〇五
なほうきときは　九三〇
なほうとまれぬ　二三六
なみだがは
—なにみなかみを　五六五
—まくらながるる　五七八
なみだせきあへず　六九〇
なみだにうかぶ　七三〇
なみだのかはに
—うきてもゆらむ　五七九
—うゑましものを　五八一
なみだのたまの　八二四
なみだのみこそ　六一六
なみぢはあとも　五三一
なみとともにや　二四八
なみにおもはば　七一四
なみのうつ　五〇一
なみのおと　五一九
なみのさわぎに　九一四
なみのはな　五三一
なみのはなにぞ　三三二
なみのをすげて　八九五
なみもてゆへる　八八七
なよたけの　九五〇
ならのみやこも　九四五
なりみてしがな　九八四
なりもならずも　一〇三三
なるるをひとは　七五八
なればよりなむ　九八七
なをむつましみ　三〇三

に

にしきたちきる　三六六
にしこそあきの　三三七
にはもまがきも　三一八
にほひもあへず　五一四

ぬ

ぬぎかへがてら　六七九
ぬきみだる　八九七
ぬさとたむけて　三七九
ぬしさだまらぬ　三三三
ぬししらぬ　三一三
ぬしなきやどは　八三一
ぬしなくて　九〇一
ぬしやたれ　八五五
ぬばたまの　六七二
ぬふてふかさは　一〇一八
ぬるがうちに　八一九
ぬるよのかずぞ　二五七
ぬれぎぬきせて　四六八
ぬれつつぞ　二一三
ぬれてののちは　三一七
ぬれてほす　三四五
ぬれてをゆかむ　二九九
ぬれにしそでと　六一三

ね

ねぎごとを　九九七
ねずりのころも　六七七
ねてあかすらむ　二六七
ねてのあさけの　一〇〇九
ねてもみゆ　八一七
ねにあらはれて　六九一
ねになきて　六一三
ねになきぬべき　五五四
ねぬなはたたじ　九八七
ねをこそなかめ　七九五

の

のがひがてらに　九九一
のこりなく　一五九
のちまきの　五二六
のとならば　九三五
のなるくさきぞ　八四九
のにもやまにも

―たちみちにけり　六九四
―まどふべらなれ　九一五
のはなければや　五二一
のべちかく　一〇三
のべのみどりぞ　一一三

は

はかなきものは　八四〇
はかなきよをも　八一九
はかなくて　六一三
はかなくひとの　六一九
はぎがはな　二九九
はぎのしたばも　二八七
はぎのつゆ　二九七
はしにわがみは　九三一
はちすばの　二四一
はつかりの
―なきこそわたれ　七九四
―はつかにこゑを　五四〇
はつせがは　九七三
はてはなげきの　九九七
はてはものらく　二〇八
はなかあらぬか　三四二
はながたみ　七五九
はなこそちらめ　三三七
はなごとに　五三四
はなしちらずは　一八二
はなすすき
―ほにでてこひば　六七八
―われこそしたに　七五五
はなぞむかしの　一三九
はなたちばなに　三三一
はなちらす　一六四
はなちれる　二〇九
はなとみて　九七九
はなとみるまで　三九七
はななきさとに　一三〇
はななきさとも　九七
はなにあかで　三一〇
はなにもはにも　五〇九
はなのいろは
―うつりにけりな　一九四
―かすみにこめて　一七六
―ただひとさかり　五一六
―ゆきにまじりて　四〇一
はなのかを　一〇〇
はなのきに　五一三
はなのきも　一七八
はなのごと　一八三
はなのさかりに　二〇五
はなのすがたぞ　九七九
はなのちりなむ　一五三
はなのちる　一九〇
はなのなか　五三七
はなのまぎれに　四六一
はなみつつ　三四六
はなみてくらす　四一八
はなみれば　一八七
はなよりさきと　三四八
はなよりも　八三三
はなをしみれば　一三八
はなをばひとり　七九一
ははそのもみぢ　三三六
はひまつはれよ　一九九
はやきせに　五八一
はやくいひてし　七八八
はやくぞひとを　五三二
はらはばそでや　七四〇
はるがすみ
―いろのちぐさに　一八六
―かすみていにし　二八六
―たつをみすてて　一三〇
―たてるやいづこ　八九
―たなびくのべの　九八四
―たなびくやまの　一五七
―たなびくやまの　七〇三
―なかしかよひぢ　五三五
―なにかくすらむ　一六七
はるかぜは　一七一
はるきぬと　九八
はるくることを　一〇一
はるくれば
―かりかへるなり　一一九
―やどにまづさく　四一九
はるごとに
―ながるるかはを　一三一
―はなのさかりは　一八二
はるさめに　二〇三
はるさめの　一七四
はるされば　九七二
はるたつけふの　八八
はるたてど　一〇二
はるたてば
―きゆるこほりの　五八九

―はなとやみらむ　九二
はるにおくれて　二一七
はるにしられぬ　三八九
はるのいろの　一七九
はるのきる　一一一
はるのこころは　一四〇
はるのしらべや　五一九
はるののに　一九七
はるののの　九八六
はるのひの　九四
はるのみやまの　九二八
はるのものとて　六四三
はるのよの　一三九
はるはいくかも　三一二
はるはすぐとも　一三四
はるばるきぬる　四八三
はるやとき　九八
はるよりのちは　九三九
はれぬおもひに　四五四
はれぬくもゐに　九〇八

ひ

ひかりとどめず　八六三
ひかりなき　九三九
ひかりのまにも　五九七
ひかりみねばや　六〇四
ひかりをのみぞ　九三〇
ひかりをはなと　五三三
ひぐらしの
―なきつるなべに　二八〇
―なくやまざとの　二八一
ひさかたの
―あまつそらにも　七五七
―あまのがはらの　二五二
―くものうへにて　三三九
―つきのかつらも　二七二
―なかにおひたる　九三〇
―ひかりのどけき　一七〇
ひさしきほどに　二五九
ひさしくも　七七六
ひとくひとくと　九七五
ひとこふる　九九八
ひとしくまねば　一〇一五
ひとしるらめや　五六〇
ひとしれず
―おもへばくるし　五五二
―おもふこころは　九五六
―たえなましかば　七九八
ひとしれぬ
―おもひのみこそ　六三四
―おもひやなぞと　五六一
―おもひをつねに　五八四
―わがかよひぢの　六五九
ひとだのめなる　四五七
ひとつおもひに　五九〇
ひとづてにのみ　六二一
ひととせに　四九四
ひとにあはむ　九八四
ひとにくからぬ　六五八
ひとにこころを　五三三
ひとにしられぬ
―こひもするかな　六〇六
―はなやさくらむ　一八〇
ひとにつきなみ　九八四
ひとにはつげよ　四七七
ひとにもがもや　一〇三三
ひとのあきには　七三九
ひとのこころぞ　一七〇
ひとのこころに
―あかれやはせぬ　一四七
―しもはおかなむ　七九二
ひとのこころの
―あきしうければ　七九四
―あれてみゆらむ　七四七
―そらになるらむ　七八三
―はなとちりなば　七九〇
―はなにぞありける　七九〇
ひとのこころも　七二六
ひとのこころを
―みてこそやまめ　八〇二
―みてこそやまめ　九九四
ひとのことのは　七二五
ひとのこひしき　七九九
ひとのしるべく
―わがこひめかやも　六八五
―わがこひめかも　一〇三九
ひとのためさへ　九三三
ひとのとがむる　一一三
ひとのみも　五七一
ひとのみる　三〇八
ひとはいさ
―こころもしらず　一三九
―われはなきなの　六五七
ひとはくれども　七四七

ひとはよそにも　七五七
ひとひもきみを　五四四
ひとひもみゆき　三八七
ひとふるす　九四五
ひとめづつみの　六八三
ひとめみし　一六六
ひとめもくさも　三八二
ひとめもる　五九四
ひとめゆゑ　五〇七
ひとめをもると　六八〇
ひともかよはぬ　八〇八
ひともとと　三一七
ひともみるがに　一〇一三
ひとやこひしき　五八五
ひとやりの　四五六
ひとよもゆめに　九四一
ひとりあるひとの　二九六
ひとりして　六一八
ひとりぬる　二六五
ひとりのみ
―ながむるよりは　三〇九
―ながめふるやの　七七〇
ひとわすれぐさ　八九二
ひとをあくには　九九一
ひとをおもふ
―こころこのはに　七八〇
―こころはかりに　六一九
―こころはわれに　五七五
ひとをこころに　四三六
ひとをしのぶの　七七〇
ひとをぞたのむ　五九九
ひとをとふとも　七四四
ひとをみぬめの　六〇〇
ひとをみるめは　六三六
ひのひかり　八五一
ひるはおもひに　五三一
ひろはばそでに　五〇一

ふ

ふかきこころに　八三〇
ふかきこころを
―しるひとのなき　五八六
―ひとはしらなむ　五八五
ふかきたにこそ　一〇〇〇
ふかくさの　八一六
ふかくさのやま　八一五
ふかくもひとの　七〇四
ふきくるかぜは　一八七
ふきなちらしそ　三五七
ふきまよふ　七七九
ふくかぜと　一九八
ふくかぜに　一八四
ふくかぜの　三六一
ふくかぜを　一八九
ふくからに　三三一
ふしておもひ　四三一
ふじのねの　九八三
ふじのやまこそ　五八四
ふしみのさとの　九四一
ふたたびとだに　二一〇
ふたたびにほふ　三五〇
ふたつなき　八六三
ふたみのうらは　四九一
ふぢごろも　八二四
ふみわけて　三五九
ふみわけてとふ　三八八
ふゆがはの　六二三
ふゆがれの　七八六
ふゆごもり　三九七
ふゆながら
―そらよりはなの　三九六
―はるのとなりの　九八〇
ふゆのいけに　六八四
ふゆもこほらぬ　六二一
ふりかくしてし　三五九
ふりにしこのみ　五一三
ふりにしさとの　八五一
ふりはへて　五二一
ふるさとさへぞ　二二六
ふるさとさむく　三九一
ふるさとと　一七五
ふるさとに　七四七
ふるさとにしも　三三九
ふるさとは
―みしごともあらず　九四九
―よしののやまし　三八七
ふるさとびとの　一六一
ふるひとみれば　七三八
ふるゆきは　三八六

へ

へにけむあきを　五一〇

ほ

ほかなるものは　九三九
ほかになくねを　三三七
ほかのちりなむ　一五四
ほそたにがはの　一〇一九
ほととぎす
―けさなくこゑに　八三二
―こゑもきこえず　三三七
―ながなくさとの　三三六
―なくこゑきけば　三三六
―なくやさつきの　五三九
―はつこゑきけば　三三三
―ひとまつやまに　三三九
―みねのくもにや　五一五
―ゆめかうつつか　六六六
―われとはなしに　二四〇
ほにいづるあきは　三一三
ほにいでてひとに　七五五
ほにいでてまねぐ　三一四
ほにはいでずも　一〇三七
ほにもいでぬ　三七四
ほのぼのと　四八〇
ほりえこぐ　七三九

ま

まがきがしまの　一〇三五
まがねふく　一〇一九
まきのいたども　七〇七
まきもくの　一〇一三
まくらのみこそ　五五九
まくらより
―あとよりこひの　九八一
―またしるひとも　六九〇
まこもかる　六三〇
まさきのかづら　一〇一四
まさごのかずは　一〇三一
まさしやむくい　九九〇
まだしきほどの　二一八
またるることの　七七三
まぢかけれども　五六一
まちしさくらも　一六七
まづしるものは　九一一
まつとしきかば　四三三
まづなげかれぬ　九〇七
まつはくるしき　七七六
まつひとに　二八二
まつひとのかに　一三三
まつひとも　一八四
まつむしのねぞ　二七七
まつもむかしの　八八五
まてといはば　七四五
まてといふに　一五八
まどひまされる　六〇四
まどふこころぞ　六三七
まどふゆめぢに　五七五
まどほにあれや　七六二
まなくちるとも　六三三
まなくときなく　一〇〇七
まなくもちるか　八九七
まひなしに　九七二
まめなれど　九九五

み

みかさのやまに　四七三
みきとないひそ　七九九
みさぶらひ　一〇二六
みさへながると　六四六
みずばこひしと　六九九
みずもあらず　五三五
みだれてあれど　九九五
みだれてのみや　五八二
みだれてはなの　一一五
みだれむとおもふ　七三三
みちしらば
―たづねもゆかむ　三七九
―つみにもゆかむ　一〇四〇
みちのくに　六五五
みちのくの
―あさかのぬまの　六九七
―あだちのまゆみ　一〇一五
―しのぶもぢずり　七三三
みちのくは　一〇二四
みちふみわけて　三五八
みちもさりあへず　一九六
みちゆきぶりに　一一九
みづぐきの　一〇〇九
みつしほの　六八六
みつともいふな　六七四
みづなきそらに　一七四

みづのあきをば　三七〇
みづのあわの　七八六
みづのうへに　八九四
みづのおもに
—おふるさつきの　九三八
—しづくはなのいろ　八二七
みづのはるとは　五三一
みづまさりなば　八二三
みづまさるとや　四六三
みてしひとこそ　五三八
みてのみや　一四三
みてもこころの　七四九
みてもまた　七五八
みどりなる　三一五
みなせがは　七八七
みなとやあきの　三七八
みなひとは　八二九
みねたかき　四三一
みねにもをにも　一三八
みねのこずゑも　三三八
みのくに　一〇三〇
みのまどふだに　五七五
みはすてつ　一〇〇一
みはてぬゆめの　六三五
みまくのほしき　八八七
みまくほしさに　六四八
みまさかや　一〇三〇
みみなしの　九八二
みむろのやまに　三五五
みやぎのの　七一〇
みやこいでて　四七九
みやこぞはるの　一四三
みやこのつとに　一〇三六
みやこしまべの　一〇三六
みやこはのべの　一〇七
みやこびと　九〇八
みやこまで　八九五
みやまがくれの　一九八
みやまには
—あられふるらし　一〇一四
—まつのゆきだに　一〇七
みやまより　三七七
みよしのの
—おほかはのへの　七一四
—やまのあなたに　九一七
—やまのしらゆき　三九一
—やまのしらゆき　三九三
—やまべにさける　一四六
—よしののたきに　五〇五
みるかげさへに　四〇六
みるひとも
—なきやまざとの　一五四
—なくてちりぬる　三六六
みるめなき　六五一
みるめにひとを　七〇一
みるめのうらに　六八六
みるものからや　七〇三
みるわれさへに　一六九
みれどもあかぬ　七〇三
みればなみだの　八三六
みわたせば　一四三
みわのやま　七七八
みわやまを　一八〇
みをうらしと　七九五
みをしるあめは　七一九
みをすてて　九三九
みをつくしとぞ　六〇七
みをはやながら　九五七

む

むかしのひとの　二一九
むかしはまたも　一八三
むかしへや　三三九
むかしもいまも　六五七
むかしをこふる　九一一
むしのごと　六一六
むしのねきけば　三六三
むすぶての　四七〇
むつごとも　九七七
むなしきからの　六〇九
むねのあたりは　六一〇
むねはしりびに　九八四
むらさきの
—いろこきときは　八四九
—ひともとゆゑに　八四八
むらとりの　六九三

め

めざしぬらすな　一〇二九
めづらしき
—こゑならなくに　四三六
—ひとをみむとや　七三八

めづらしげなく　六九九
めにこそみえね　七三七
めにはみえずて　二九三
めにはみえねど　三〇七
めにみぬひとも　五三四

も

もえてもはるを　七八六
もがみがは　一〇二七
もしほたれつつ　九二四
もとくだちゆく　八七一
もとのこころは
—わすられなくに　八六七
—わすれざりけり　二九五
もとのこころを　八六八
ものうかるねに　一〇二
ものおもふごとに　七四八
ものおもふことの　二六五
ものおもふときの　五六五
ものおもふやどの　二九六
ものおもふわれに　二三五
ものごとに　二六四
ものはながめて　五〇三
ものわびしらに　五一七
もみぢすればや　二七二
もみぢせぬ　三三三
もみぢにあける　四九七
もみぢのにしき　四九五
もみぢばの
—ちりてつもれる　二七九
ながれざりせば　三七〇
—ながれてとまる　三六四
もみぢばは　三七五
もみぢはよるの　三六六
もみぢばを　八四〇
ももぐさの　三一六
ももちどり　一一七
もろこしの　九九三
もろこしも　七六九
もろともに　四五三

や

やどかすひとも　四九四
やどちかく　一一三
やどりさだめぬ　五〇四
やどりして　一九八
やどりせし
—はなたちばなも　三三三
—ひとのかたみか　三一三
やどるつきさへ　七六〇
やへむぐらして　九三七
やまかくす　四八八
やまかぜに　四六一
やまかぜにこそ　一一一
やまがつの　七四七
やまがはに　三七一
やまがはの　九五七
やまざくら
—かすみのまより　五三八
—わがみにくれば　一三八
やまざとは
—あきこそことに　二九〇
—ふゆぞさびしさ　三八二
—もののさびしき　九一三
やましたかぜに　四三一
やましたどよみ　二九二
やましなの
—おとはのたきの　一〇三九
—おとはのやまの　六八五
やましろの　七六三
やまたかみ
—くもゐにみゆる　四二五
—したゆくみづの　五五一
—つねにあらしの　五一四
—ひともすさめぬ　一三七
—みつつわがこし　一七三
やまたちばなの　六八九
やまだもる　三七三
やまにははるも　二〇九
やまのかすみを　八三九
やまのかひある　一〇〇二
やまのかひなく　九九八
やまのかひより　一四五
やまのこのはの　三三一
やまのこのはも　四二九
やまのたぎつせ　三八六
やまのにしきの　三六二
やまのはならで　八六三
やまのはにげて　八六四
やまのやまびこ　一〇三五
やまのゐの　七六六
やまはいかでか　三三二

やまぶきの 九七五
やまぶきは 二〇三
やまほととぎす
—いつかきなかむ 二一五
—いまぞなくなる 二三〇
やまよりつきの 六六一
やまわけごろも 八九九
やみにこゆれど 一三七
やよやまて 三三〇

ゆ

ゆきかとのみぞ 一四六
ゆきかふひとの 三三四
ゆきかへり 七八一
ゆきげのみづぞ 三八七
ゆきぞふりつつ 一六三
ゆきとのみ 一七二
ゆきとのみこそ 一九三
ゆきとまるをぞ 九四六
ゆきのうちに 九〇
ゆきのまにまに 四五八
ゆきふみわけて 九三三
ゆきふりて
—としのくれぬる 四〇五
—ひともかよはぬ 三九五
ゆきふれば
—きごとにはなぞ 四〇三
—ふゆごもりせる 三八九
ゆきみるべくも 四五一
ゆきめぐりても 四七二
ゆきもわがみも 四〇四
ゆくかたのなき 五三三
ゆくとしの 四〇六
ゆくへさだめぬ 三五八
ゆくへしらねば 九四六
ゆくへもしらず 九四七
ゆくへもしらぬ 九五四
ゆくみづに 五七四
ゆたのたゆたに 五六三
ゆふぐれの 四五九
ゆふぐれは 五四二
ゆふされば
—いとどひがたき 五九一
—ころもでさむし 三八四
—ひとなきとこを 八〇一
—ほたるよりけに 六〇四
ゆふづくよ
—おぼつかなきを 四九一
—さすやをかべの 五四七
—をぐらのやまに 三七八
ゆふつけどりは 六六一
ゆふてもたゆく 五六三
ゆめうつつとは 六七二
ゆめかうつつか 六七〇
ゆめぢにさへや 七六八
ゆめぢには 六八一
ゆめぢにも 六一一
ゆめぢをさへに 六八〇
ゆめてふものは 五九八
ゆめといふものぞ 六〇八
ゆめとこそ 八一九
ゆめとしりせば 五九七
ゆめともしらず 九一三
ゆめにいくらも 六七二
ゆめにだに 七六九
ゆめにだも 七〇〇
ゆめのうちに 五七六
ゆめのうちにも 一九八
ゆめのかよひぢ 六〇二
ゆめのただぢは 六〇二
ゆめもさだかに 五七八

よ

よきもさかりは 八六九
よこぼりふせる 一〇三一
よしのがは
—いはきりとほし 五四九
—いはなみたかく 五三二
—きしのやまぶき 二〇四
—みづのこころは 六七六
—よしやひとこそ 七八八
よしののかはの
—たぎつせのごと 六九三
—よしやよのなか 八一〇
よしののさとに 三九八
よしののやまに
—みゆきふるらし 三八四
—ゆきはふりつつ 八九
よしみむひとは 二九七
よせてかへらぬ 八九三
よそながら 九九六
よそにして 五八八

よそにのみ
—あはれとぞみし 一三五
—きかましものを 七五六
—こひやわたらむ 四五一
よそにみて 一九九
よそのもみぢを 四三〇
よどがはの 七三一
よとともに 六二一
よなよななかむ 五〇五
よにふれば
—うきごそまされ 九一七
—ことのはしげき 九三一
よのうきごとは 九一八
よのうきときの
—かくれがにせむ 九一七
—なみだにぞかる 八九六
よのうきめ 九一九
よのうきよりは 九一三
よのなかに
—いづらわがみの 九一二
—さらぬわかれの 八七九
—たえてさくらの 一四〇
—ふりぬるものは 八七〇
よのなかの
—うきたびごとに 一〇〇〇
—うきもつらきも 九一一
—うけくにあきぬ 九一九
—ひとのこころは 七八八
よのなかは
—いかにくるしと 一〇〇〇
—いづれかさして 九四六
—かくこそありけれ 五三四
—なにかつねなる 九〇五
—むかしよりやは 九一五
—ゆめかうつつか 九一三
よのなかを 九一六
よはにやきみが 九五一
よははるなれや 九〇三
よひのまに 九九八
よひのまも 六〇四
よひよひごとに 六五九
よひよひに
—ぬぎてわがぬる 六二四
—まくらさだめむ 五六九
よぶかくこしを 六六七
よぶかからでは 九九三
よぶかくなきて 二三一
よやくらき 二三二
よやふけぬらむ 四三八
よるこそまされ 六三六
よるさへみよと 三五二
よるのころもを 五九八
よるのたもとは 六三六
よるはこえじと 四五九
よるはすがらに 五七七
よるはほたるの 五九〇
よるべなみ 六四七
よろづよかねて 八八四
よろづよふとも 一〇三四
よろづよを 四三
よをいとひ 一〇〇四
よをいまさらに 三七五
よをうぢやまと 九四三
よをうみべたに 六九〇
よをさむみ
—おくはつしもを 四九〇
—ころもかりがね 二八七
よをすてて 九三〇
よをばなしとや 五一三
よをへておつる 九〇二
よをへてみれど 八九八

わ

わがいほは
—みやこのたつみ 九四三
—みわのやまもと 九四二
わがうへに 八四五
わがおもかげに 七〇〇
わがおもふひとに 七一六
わがおもふひとの 九八九
わがおもふひとは 四八五
わがかどに 二八四
わがかどの 一〇一五
わがきつる 三六五
わがきみは 四〇九
わがこころ 八六〇
わがこころから 六三五
わがこころとや 九〇一
わがごとく
—ものやかなしき 六一四
—われをおもはむ 七五七
わがごとものや 二七五
わがこひに 六三三

わがこひは
—しらぬやまぢに　六二七
—ひとしるらめや　五五九
—みやまがくれの　六〇三
—むなしきそらに　五四六
—ゆくへもしらず　六三七
わがこひを　六八九
わがころもでぞ　六〇五
わがころもでに　一〇九
わがころもでの　三三八
わがしたひもの　七三八
わがすむやどに　三〇九
わがせこが
—くべきよひなり　一〇三九
—ころものすそを　二四九
—ころもはるさめ　一一三
わがせこを　一〇二五
わがそでに　七六六
わがそのの　五五四
わがたまくらの　七六一
わがたましひの　九五〇
わがために　二六三
わがつらきにや　五〇七
わがなげきをば　六三四
わがなはたてじ　一〇二〇
わがねぬごとや　二七五
わがまたぬ　四〇三
わがみから　九一三
わがみひとつの
—あきにはあらねど　二七一
—ためになれるか　九一五
わがみひとつは　七五三
わがみふるれば　七四三
わがみむなしく　八〇六
わがみもくさに　八四一
わがみもともに　一九四
わがみよにふる　一九四
わがもとゆひに　七〇九
わがものおもひの　五九四
わがやどに　三〇一
わがやどの
—いけのふぢなみ　三一五
—きくのかきねに　六〇五
—はなふみしだく　五一二
—はなみがてらに　一五三
わがやどは
—みちもなきまで　七七〇
—ゆきふりしきて　三八八
わがやどをしも　三三三
わがよはひ　四一三
わかるとひとに　四四七
わかるれど　四六六
わかれては　四四〇
わかれてふ　四四九
わかれむことを　五〇四
わかれをとむる　八二〇
わかれをば　四六〇
わがゐるやまの　七八一
わぎもこに　一〇三七
わくらばに　九二四
わすらるる
—ときしなければ　五六八
—みをうぢばしの　八〇八
わすられがたき　三一三
わすられぬらむ　七五九
わすられむ　九五四
わするることの　八〇三
わするるときも　七五〇
わすれぐさ
—かれもやすると　七九二
—たねとらましを　七六七
—なにをかたねと　七九二
わすれては　九三三
わすれなむ
—とおもふこころの　七二八
—われをうらむな　七二九
わすれぬものの　七二七
わたつみと　七四〇
わたつみの
—おきつしほあひに　八八六
—かざしにさせる　八八七
—はまのまさごを　四一一
—わがみこすなみ　八〇三
わたのはら
—やそしまかけて　四七七
—よせくるなみの　八八七
わたらでやまむ　六五六
わたらぬさきに　二六〇
わたらばにしき　三五四
わたりはてねば　二五五
わたるとなしに　七五六
わびしらに　一〇〇三
わびぬれば
—しひてわすれむと　六〇八
—みをうきぐさの　九〇九
わびはつる　八〇〇

わびびとの
—すむべきやどと　九四五
—わきてたちよる　三六三
わりなくも　六〇九
われうぐひすに　一八九
われうちつけに　三三九
われおちにきと　三〇一
われおとらめや　六一六
われかとゆきて　二七九
われかひとかと　九二五
われさへともに　六四九
われてものおもふ　九九八
われにはひとの　九九二
われにをしへよ　一六四
われのみぞ　六三七
われのみや
—あはれとおもはむ　三一四
—よをうぐひすと　七九〇
われはけさ　五〇八
われはせきあへず　六〇一
われみても　八八二
われもおもひに　六三九
われやいをねぬ　七六九
われやははなに　一八九
われやわするる　四四六
われよのなかに　二三〇
われをおもふ　九八九
われをきみ　九三六
われをのみ　九八九
われをふるせる　八〇七
われをまつらむ　七〇六
わをほしといふ　九八二

を

をぐらやま　五一〇
をぐろさき　一〇二六
をしとおもふ　一九五
をしむから　四三九
をしむらむ　四六五
をしめども　二一〇
をちこちの　一一八
をとこやまにし　三〇二
をとめのすがた　八五四
をのへにたてる　八八五
をのへのしかは　二九四
をばすてやまに　八六〇
をふのうらに　一〇三三
をみなへし
—あきののかぜに　三〇五
—うしとみつつぞ　三〇二
—うしろめたくも　三〇九
—おほかるのべに　三〇四
—ふきすぎてくる　三〇七
をられぬみづに　一三一
をりつれば　一三二
をりてかざさむ　一三四
をりてみば　二九八
をりとらば　一五一

跋 （明治版初版）

おのれ蚤くより古今集を研鑽して窃に思へらく、契沖律師のは萬葉代匠の餘材にとゞまり、賀茂眞淵のは更にそを紹述したる打聽に過ぎず。本居宣長のは、その語學の楮餘にうつし出でたる遠鏡のみ。香川景樹に至り、始めて專心に攻究せしが如しと雖も、所謂正義を樹つるに急にして、しかも體裁を備へず、況やその內容形式に立ち入りて鑑賞論評したるが如きは、僅に百中に二三を數ふるのみと。乃ち深く以て憾としたりき。

たまたま明治二十八年の夏、某會の希望によりこの集を講ずることありき。よりて或は諸說を折衷し、或は謬說を排し、或は新說を立て、更に私見によりて論評を下せるに、皆人耳新しと聞きなしつ。茲にはじめて評釋の業を思ひ立ちぬ。

抑も、延曆遷都以後、今日に至るまでの國歌界を支配したるは實に古今和歌集なりき。されば本集の研鑽は、卽ち上下千數百年間の國歌を研鑽するに値し、本集の鑑賞批判は、卽ち上下數十萬首の國歌を鑑賞批判するに該當す。こゝに於て、わが評釋事業の

容易ならざることに想到し、その責任の重且大なることを覺悟したり。

乃ち評釋事業の第一著手として、前賢の諸說を網羅蒐集し、本文の異同を考訂して一の稿本を作らむと志しつ。しかも傍らその研鑽をも續けしかば、意外に長時日を費し、殊に春部上の稿本の如きは、鎌倉に滯在中盜難に遭ひて失ひしが如き打擊を受け、漸く明治三十二年秋冬の交に至りて、その大部分を完成したり。

又五十音圖の小表一千葉を製しつ。各首の聲音轉換の逕路を調査し、音數の多少を檢するなどの用に供すべく。

準備は既に成れり。こゝに始めて評釋の筆を起し、その第一卷は明治三十三年の秋において脫稿し、發行世に問ふこととなりしは、實に明治三十四年一月の事なりき。幸にも世は好評を以て迎へたりき。

かくて一氣呵成に續々脫稿すべしと豫期せしを、思ひきや多くは研鑽猶足らざる憾ありて、執筆意の如くならざらむとは。稿を屬するに、一日に就るところ僅に一首乃至二首、或は一首にして日をわたるものすら少からざりき。しかも稿を脫して印刷に附せむとするに臨み、更に一校するに、意に滿たざるもの十に五六、卽ち雌黃を施すに

塗抹縱横殆ど完膚なきに至りぬ。爲に澁滯又澁滯、遷延又遷延、漸く本年に至りて全部脫稿を告げぬ。今その每卷發行の年月を記せば實に左の如し。

第一卷　明治三十四年一月
第二卷　明治三十五年八月
第三卷　明治三十七年十一月
第四卷　明治三十九年九月
第五卷　明治四十一年一月

五卷一千餘頁、その三分の一は解釋に屬し、三分の二は全く著者の創見にかゝれる批評に屬せり。あはれかの類書の如き、さのみ識見を要せざる編纂物すら、猶幾年を費しつと號するならずや。況や評釋事業は一言半句も腦漿の餘瀝にあらざるはなく、識見の片影ならざるはなし。思へば不才おのれが如き者には、實に過分の重擔なりしよ。されば本書完成の遲延は、著者が怠慢にあらずして、漸く精を加へたる所以なることをも、識者の夙に知了せらるゝ事ならむと信ず。さはいへ、かばかりの一小著述、世の才高く學博き先生にとりては何かあらむ。只これ尋常茶飯ならむ。

終に臨みて一言す。魚を捕るには筌を以てし、獸を擒るには蹄を以てす。詩歌の意義を知るに評釋を以てするは、素よりその所ならむ。然れども讀者はまた魚を得て筌を忘れ、獸を獲て蹄を遺るゝ覺悟なかるべからず。偏に筌蹄に執着する者は遂に目的の獲物を眼前にして逸すべし。かゝれば既に評釋によりてその意義と詩美の指示とを得ば、更に文字を離れて瞑想一番、詩歌の眞諦を會得せむことを要す。

明治四十年十二月

元臣しるす

納本

昭和二年三月廿五日印刷
昭和二年三月三十日發行
昭和三十年九月十五日二十三版發行

古今和歌集評釋
定價金壹千參百圓

不許複製

著者　金子元臣
東京都千代田區神田錦町一丁目十六番地

發行者　株式會社明治書院
代表者　文入宗義

東京都千代田區神田三崎町二丁目五番地
印刷者　有限會社三崎堂印刷所
代表者　西村保太朗

發行所　株式會社明治書院
東京都千代田區神田錦町一丁目
振替口座東京四九九一番
電話東京(29)〔〇三五四～五番／三六八〇番／三九二七番〕

元國學院大學教授

金子元臣先生著

書名	判型・頁數	定價
枕草子評釋	A5判 三〇〇頁	定價一二〇〇圓
定本源氏物語新解	B6判 全三册	定價各四八〇圓
和漢朗詠集新解	A5判 六五〇頁	定價六八〇圓
古今和歌集評釋	A5判 二一〇頁	定價一三〇〇圓
萬葉集評釋	A5判 全四册	定價　圓
枕草子通解	B6判 六三〇頁	定價三五〇圓
古今和歌集通解	B6判 四五〇頁	定價二九〇圓
校註枕草子	B6判 三五〇頁	定價一六〇圓
校註源氏物語一	B6判 三三〇頁	定價一六〇圓
校註古今和歌集	B6判 二五六頁	定價一二〇圓
源氏物語選	B6判 三二八頁	定價一五〇圓

東京　明治書院　神田